

コ本改
リ、原作る、據

の法親王(親)山の座主(親)など僧綱給はり。さまぐの賞ども有りてまかて給ひぬ。御うぶやしなひ七夜など。關白殿(親)よりはじめて参り給ひて御あそびどもあり。御湯殿南おもてにしつらひて。弦うち五位六位しらがさねに立ちならべり。男宮におはしませば文よみ式部大輔(親)左中辨(親)などいふ博士。大外記(親)とかいふもの。明經博士とて。つるばみのころもあけのころも袖をつらねて。うちかはりつゝ日ごとによむけしきいはんかたなくめてたし。御子の御祈はじめてせさせ給ひ。なせの御はらへに。辨ゆげいのすけ五位の藏人など。時にあへる七人御ころも管取りてたつほど。おぼろげの上達部などもあふぐぐくもなかりけり。御めのとには。二條の關白(親)の御子に。宰相中將(親)といひし人のむすめ。内藏頭(親)男にてあれば。えらばれて養ひ奉るなるべし。日にそへてめづらかなるちどの御かたちなるにつけても。いかてかすがやかにみこの宮にも位にもとおぼせども。きさきばらに御子だちあまたおはしますをさしこゆべきならねば。おもほしめしわづらふ程に。當帝(親)の御子になし奉り給事いできて。みな月の廿六日御子内へいらせ給ふ。御ともに上達部殿上人えらびて。常のみゆきにも心となり。都のうち車もさりあへず。見るもの所もなき程になんはべりける。内へいらせ給ふにてぐるまの宣旨など藏人おほせつ。既に参らせ給ひて。中宮(親)を御母にて。まだ御子も生まれ給はねば。めづらし

きさきばらの御
子、即通仁君仁
本仁雅仁也

コ本改
リ、原作る、據

く養ひ申させたまふ。きさきの親にては關白殿(親)おはしませば。御子のおほちに。かたぐみかどもきさきも御子おはしませぬに。院も御心ゆかせ給ひて。いと心よき事いできて。いつしか八月十七日東宮にたせ給ふ。昭陽舎に御しつらひありて渡らせ給ふ。大夫には堀川の大納言(親)なり給ふ。御母のをちにおはして殊に撰ばせ給へるなり。御母女御の宣旨かぶりたまふ。ねがひの御まゝなり。男宮のうれしさもいふばかりなきうへに。御みめも御心ばへもいとつくしう。この世のものにもあらずさかしくおとなしくて。日の御座に事あるとに。大夫(親)のいだきまゐらせ給へるにもなきなどし給はず。るさせ給ふほどには。御しとねのうへにひとりるさせ給ひて。おとなのやうにおはしませば。かひくしく見たてまつる人もよろこびの涙おさへがたかりけり。かくて同七年十二月七日御年三つにて位ゆづり申させ給ふ。近くは五つなどにてぞつかせ給へども。心もとなさにやすがやかにるさせ給ひぬ。御母女御殿皇后宮に立たせ給ふ。御とし廿五にや。御即位大嘗會など心ことに世もなびきてなん見え侍りける。おとなにならせ給ふまゝに。御有様然るべきさきの世の御ちぎりと見え給へり。攝政殿(親)の御弟の左のおと(親)女御(親)たてまつらせ給ひて皇后宮にたち給ひぬ。猶たらずや覺しめすらむ。院より御さたせさせ給ひて。大宮の大納言(親)のむすめ(親)。關白殿(親)の御子とて。北の政所(親)の

七年永治と改元
あり

おほする、原作
おほす、據コ本
改

御せうとのむすめなれば御子にし奉り給。御かたぐはなぐといどみがほなるべし。殿のあにおとうとの御中善くもおはしませねば。宮もいと隔ておほかるに。關白殿はうちのひとつにて。ひとへに中宮のみのほらせ給て。皇后宮の御かたをばうとくおはしませしける。かくて年ふるほどに御母きさき院號ありて女院(院)とておはしませば。院(院)のきさきの女院。三人(院)おはします。内にはきさきふたり(院)立ち給ひて。いとかたぐ多くおほするころなるべし。

むしのね。

此みかど(院)。御みめも御心ばへもいとなつかしくおはしませしけるに。すゑになりて御目を御覽せざりければ。かたぐ御いのりも御藥もしかるべきにやかひなくて。未さまには。年のはじめの行幸などもせさせ給はずなりにけり。攝政殿たぐひなく思ひたてまつらせ給ふ。みかどもあるかならず思ひかはさせ給て。殿の御弟(院)にこめられさせ給て。藤氏の長者などものかせ給ひたるを。幼き御心に歎かせ給ふ。殿(院)もみかどの例ならぬ御事をなげかせ給ふほどに。十七にやおはしませしけん。はつ秋の末に日ごろ例ならぬ事おはしませしてかくれさせ給ひぬれば。世の中はやみにまどへる心ちしあへるなるべし。さりとしてあるべきにあらねば。鳥羽院にはつぎのみかど定めさせ給ふに。誠にや侍りけん女院(院)の御事のいたはしさにや。姫宮(院)を

ん、コ本作ぬ

る、原作から、
據コ本改

女帝にやあるべきなどさへ計らはせ給ふ。又仁和寺の若宮(院)をなど定めさせ給ひけれど。とはりなくてひと日は過て。世の中おぼしめし恨みたる御有様なるべし。た^(院)だおはしませさんだにおしかるべきを。歌をも幼くおはしませす程に。すぐれてよませ給ひ。法文のかたも然るべくてやおはしませしけむ。心にしめて經などもくんによませ給ひて。それにつけても二十八品の御歌などよませ給。おなじ歌と申せども此の比のうちあるさまにもあらず。むかしの上手などのやうによませ給ひける。おほくよませ給ひける中。世を心ほそくやおぼしめしけむ。
^(玉虫)虫のねのよはるのみかは過る秋をもしむ我が身ぞまづきへぬべき。
などよませ給へりける。いとあはれにかなしく。又から萩などいふとをかくし題にて。

つらからばきしべの松の波をいたみねにあらはれてなかんとぞ思ふ。
など多くき侍りしかどもおぼへ侍らず。位におはしますこと十四年なりき。御わざの夜さねしげといひしがむかし藏人にて侍りける。おもひ出てよめる。
思ひきや虫のねしげき淺茅生に君を見すて、歸るべしとは。

殿(院)の御子の大僧正(院)ときこへ給。みかどのうへさせ給へりける菊を見給ひて。
よはひをば君にゆづらて白菊のひとりをくれて露けかるらん。

らで、コ本作りて

備、原作肥、據
集改

今鏡第三 すべらぎの下 (むしのね)

七百七十四

とよまれ侍りけるこそあはれに聞へ侍しか。備前の御とて侍けるが。みかどおはし
まさて後むかし思ひいてけるに。しのばしき事多く覺へければ。星あひの比ないし
土佐が。かのみかどの御事のかなしみになへて。かしらおろしてこもり侍りける
もとにひつかはしける。

(風雅下)

は、據ヨ本補

天の川ほしあひの空はかはらねどなれし雲井の秋ぞ戀しき。
とよめりけるこそいとなさけ多く聞き侍りしか。このみかどの御母は。贈左大臣

長實中納言のむすめ也。得子皇后宮ときこへ給ふ。美福門院と申しき。この御有様さ
きに申し侍りぬ。かつは近き世の事なればたれもきかせ給ひけん。されども事のつ
づきに申し侍るになん。猶あさましくおはしまし御すくせぞか。御親もおはせ
ずなりにしかば。いかになり給はんずらむと見へ給ひしに。志のびて参りはじめ給
ひて御子達生みたてまつり給ひ。女御(嬪)きさき。みかどの御母におはしますのみ
にあらず。ゆく未までの御有様申すをろか。はじめかやう院のやしなひ申させ
給ひしは殿子内親王と聞へたまひしはうせさせ給ひにき。そのつぎ姫宮は暁子内
親王。八條院と申すなるべし。院(嬪)にやがて養ひ申させ給ひて。あさ夕の御なぐさ
めなるべし。あさなくて物などうつくしうおほせられて。わか宮は東宮になりた
り。われは東宮のあねに成りたりなど仰せられければ。院(嬪)はさるつかさやはある

の、據ヨ本補

に、據ヨ本補

させ、據ヨ本補、
以下同
廿六、當作廿一

べきなど興じ申させ給ひけるなどぞきこえ侍りし。この宮保延三年ひのとの巳の
年にうまれさせ給ひて。保元二年六月御ぐしおるさせ給ふ。御とし廿一とぞきこえ
させ給ひし。應保元年十二月に院號きこえさせ給ふ。二條のみかどの御母とて。后
にもたしせ給はねども女院と申すなるべし。小一條院の東宮より院と申しやう
なるべし。近衛のみかど生まれさせ給ひてのち。永治元年十一月にや侍りけん。かの
との酉の年。又ひめ宮(嬪)六條殿にて生みたてまつり給へりし。二條のみかど東宮
ときこえさせ給ひし時。保元元年の比御息所ときこえさせ給ひて。みかど(嬪)位に
つかせ給ひしかば。平治元年十二月廿六日中宮ときこえさせ給ひしに。永暦元
年八月十九日御なやみとて御ぐしおろさせ給ふ。御とし廿とぞきこえさせ給ひし。
いとたぐひなく侍りき。應保二年二月十三日院號ありて高松の院と申す。この宮々
の御母(嬪)國母にておはしまし程に。近衛のみかどかくれさせ給ひて歎かせ給ひ
しに。次の年鳥羽院うせさせ給ひし時は。北おもてに候ふと候ふ下臈どもかきたて
て。院のおはしまさくらんにけ。たしかに女院に候へとてわたされ侍りけり。女
院は法皇の御やまひのむしろに御ぐしおろさせ給へりき。三瀧のひじりとかきこへ
しは御戒の師ときこえ侍りし。よろづおもほしすてたる御有様にやあらん。鳥羽な
どをもよろづ女院の御まゝとのみさたしおかせ給へれど。後の世の事をおもほしお

今鏡第三 すべらぎの下 (むしのね)

七百七十五

うへ、二本元

ら、原作よ、今
宮、二本作君

ら、據二本補

今鏡第三 すべらぎの下 (大内わたり)

七百七十六

きてさせ給うべに。心かしく何事にものがれさせ給へりき。姫宮だち(高松院)御母おはしましし。あり皆御ぐしあうさせ給ひてしこそ。いとあはれにきこえ侍りしか。むかしの佛のやたりの王子十六の沙彌などの御有様なるべし。なかにも當時のきさきの宮(嵯峨)にて佛の道にいらせ給ふ世にたぐひなし。この世をつらくおぼしめしとりて。わが御身もひめ宮だちをもすゝめなし奉りてつとめさせ給ふほどに。わづらはせおはします御事ありて。應保元年十一月廿三日(安徳)にかくれさせおはしましにき。紫のくもたなびきてるながらうせさせおはしにけるとぞうけ給はりし。かねて高野の御山にしのびて御堂建てさせ給ひて。それにぞ御舍利をばさくりまいらせたまひけるとなむ。かの御ともにはさもあるべき人々。おのく御さけりありて。贈左大臣の末の子ときみちの備後守とかきこえし。後には法師になられたりけるに。年ごろもちぎりおかせ給へりけるとて。其人ばかりぞ首にかけ参らせてたゞ一人参られば。若狭守にてたかのぶと申してむげに年若き人。をさなくよりなれ仕うまつりて。御なごりのしのびがたさに。事にのぞみて慕ひまいりけるに。御山へいらせ給ふ日。雪いたくふりければよみ侍りける。

たれか又けふのみゆきを送りおかんわれさへかくて思ひきへなば。
大内わたり。

廿日、編年記作
十七日

の、據二本補

過ぎたる方の事はとをきもちかきも見および聞きをよぶ程の事申しはべりぬるを。今の世の事ははかり多かる上に。たれかはおぼつかなく覺されん。しかはあれども事のつききなれば申しはべるになん。たうじの院(嵯峨)は鳥羽院の第四のみこ。御母待賢門院。大治二年ひのとの末の年生み奉り給へりしにやおはしますらん。多くの宮だちの御中に天の下つたへたもたせ給ふ。いとやんごとなき御さかへ。保延三年十二月御ふみはじめに式部大輔敦光といひし博士。御じとくには参るとうけたまはりしに。上達部殿上人まいりて詩などたてまつられける。近くはさることもしきこえ侍らぬに。この御文はじめにしもしか侍りけん。よき例にこそせられ侍らんずらめ。同五年十二月廿日御元服させたまひしは。十三の御年にこそおはしましけめ。久壽二年七月廿五日位につかせたまふ。御とし廿九におはしましき。院(嵯峨)のおほせとにて。内大臣とて徳大寺のおとと(嵯峨)おはせし具し奉りて。まづ高松殿にわたり給ふ。夜に入りて上達部引きつれてまいり給ひて。近衛の(内裏)へわたらせおはします。十月廿六日御即位ありて東宮たせ給ふ。大嘗會など有りてとしもかはりぬれば。院の姫宮(嵯峨)東宮の女御に参り給ふ。高松院と申す御事也。の齋院とて今の上西門院(嵯峨)のおはしまししを。御母にしたてまつらせ給ふとうけたまはりし。母きさき美福門院おはしませば。べちの御母なくともおはしましぬべ

今鏡第三 すべらぎの下 (大内わたり)

七百七十七

に、原作より、
據ニ本改

させ、據ニ本補

を、ニ本作事

す、原作して、
據ニ本改

けれど。今すこしねんごろなる御心にや侍りけん。五月の末に故院(聖)の御なやみま
 さらせ給ひて七月にうせさせ給ひしほどに。世の中にさまぐ申す事ども出でき
 てもものさはがしくきこえしほどに。誠にいひしらぬいくさの事いできて。みかど
 (聖)の御かたかたせさせ給ひしかば賞ども行はせ給ひき。其のほどのこと申し盡
 すべくも侍らぬ上に。みな人知らせ給ひたらん。世を治めさせ給ふ事むかしにはぢ
 ず。記録所とて後三條院の例にて。かみは左大將公教。辨三人。寄人などいふもの
 あまたあかれはべりて。世の中をしたゝめさせ給ふ。次の年(保元三)も諒闇にて。三月にぞ
 つかさめしなどせさせ給ふ。十月に大内造り出だしてわたらせたまふ。殿舎ども門
 門などの額は關白殿(聖)かゝせ給ふ。宮つくりたる國の司など七十二人とか位給は
 りなとす。中頃かばかりのまつりごとなきを。千世にひと度する水なるべしとぞ
 思ひあへる。上は清涼殿。藤つぼかけておはします。女房。弘徽殿。登華殿などにつぼ
 ねたび。皇后宮(聖)は弘徽殿におはします。女房それもとくわてん殿のつぼきに。
 つぼねして候ふ。中宮は(聖)承香殿におはします。その女房麗景殿につぼねあり。内
 のおと(聖)の奉り給へる女御(聖)は梅壺におはす。その女房。斐芳舎につぼね給は
 りき。かんなりのつぼなるし。東宮(聖)は桐壺におはします。女房はその北舎につ
 ぼねしつゝ候ふ。東宮のみやす所(聖)は梨壺なれば。女房の北につぼね給はり。

と、原作に、據ニ
本改

關白殿(聖)は宣耀殿を御とのるところとせさせ給へり。近き世には里内裏にてのみ
 ありしかば。かやうの御すまひもなきに。いとなまめかしう珍らかなるべし。弓矢
 などいふ物あらはに持ちたるものやはありし。物に入れかくしてぞおほぢ(大)をもあり
 きける。宮このおほぢ(大)をも鏡の如くみがきたてし。つゆきたなげなる所もなかりけ
 り。世の季ともなくかく治まれる世の中いとめてたかるべし。

ないえむ。

かくて年(保元三)もかはりぬれば。朝覲の行幸美福門院にせさせ給ふ。誠の御子におはしま
 さねども。近衛のみかどおはしまさぬ世にも。國母(聖)になぞらへられておはします。い
 とかしこき御さかへ。又東宮行啓ありて。姫宮の御母とて拜し奉り給ふ。この姫
 宮と申すは八條院と申すなるべし。廿日ないえんおこなはせ給ふ。もくとせあまり
 絶えたる事を行はせ給ふ世にめてたし。題は春生(聖)聖化中とかやぞきこえ侍りし。關
 白殿など上達部七人詩つくりて参り給へり。青色の衣春の御あそびにあひて。めづ
 らかなる色なるべし。舞姫十人綾綺殿にて袖ふる氣色。から女を見るこちこ。こ
 としはにはかにて誠の女はかなはねば。童をぞ仁和寺の法親王(聖)奉り給ひける。
 ふみをば仁壽殿にてぞ講せられける。尺八といひて吹きたえたる笛。此のたび始め
 て吹きいだしたりとうけ給はりしこそいとめづらしき事なれ。七月すまうのせち

鳥羽、コ本作か
たが、コ本作か

をこなはせ給ふ。これも久しく絶えて年ごろ行はれぬ事なり。十七番なん有りける。ふるき事どものあらまほしきをかく行はせ給ふありがたき事なり。かつは君の御すくせもかしこくおはします上に。少納言みちのりといひし人。後は法師になりたりしが。鳥羽院にも朝夕仕うまつり。この御時にはひとへに世の中をとりおこなひて。古きおとをもおとし新しきまつりごとをも速かに計らひ行ひけるとぞき侍る。此のみかど。御めのとほ修理のかみもとたかのむすめ。大藏卿師隆のむすめなど二三人おはしけれど。あるはまかり出であるはかくれなどして。紀の御(物)とて。御乳の人ときこえしがをとこにて。かの少納言みちのりの子あまたうみなどして。今は御めのとにて。やそ島の使ひなどせられければ。ならぶ人もなきにこそ。
(玉孫御孫部)
すべらぎの千代のみかげにかくれずはけふ住吉の松を見ましや。

などよまれはべりけるとときこえ侍りし。誠にかひくしき人におはすべし。かの少納言からの文をも博く學び。やまと心もかしこかりけるにや。天文などいふ事をさへ習ひて才ある人になん侍りける。よはひさまで古き人にも侍らざりしに。今の世にもいかにめてたく侍らまし。御めのとほだいもなきにはあらぬを。近衛のすけなどかりそめにもあらで。四位の少將中將なるにさまぐの國の司などかけて。あまりに侍りけるにや。はねあるものは前の足なく。角あるものはかみの齒なき

事にて侍るを。さして道の人ならぬ天文などのおそれある事にや。よろづめてたく侍りしに。おしくも侍るかな。かくて保元三年八月十六日くらゐ東宮(尊)に譲り申させ給ふ。位におはします事三年なりき。ありるのみかどにて御心のまゝに世をまつりごたんとおもほしめするべし。さきぐのみかど位につかせ給ひ院など申せども。わがまゝにせさせ給ふ事は有りがたきにならぶ人もおはします。八巻のみのりをうかべさせ給ひて。さまぐつとめ行はせ給ふなれば。昔のちぎりにおはしますなるべし。千手観音の御堂(驪)たてさせ給ひて。天龍八部衆などいきてはたらかずといふばかりこそ侍るなれ。鳥羽院の千手観音だにこそありがたきこえ侍りしに。千手の御堂こそおぼろげの事ともきこえ侍らね。熊野をさへうつして都につくらせ給へらんこそ。遠くまいらぬ人の爲もいかにめづらしく侍らん。比叡などをもいけひすへたてまつらせ給へらん。神佛の御事かたぐをこしたてまつらせ給へるかしこき御心ざしなるべし。みくま野まうて年毎にせさせ給ひ。ひえの山。かうやなどきこえ侍り。しかるべき御ちぎりなるべし。今は御ぐしおろして法皇と申すなれば。いかばかり尊くおはしますらん。御子だちもおのゝ道にとりてごえおはします事きこえさせ給へること。たれも知らせ給へることなれば。何とかはさのみ申し侍るべきな。されども事のつゞきを申し侍りつるなり。

をとめのすがた。

二條のみかど(院)と申すは。此の院(院)の一の御子におはしましき。このあさなくおはします新院(院)の御あやにおはします。その御母右大臣有仁のおとこの御むすめ。誠の御親はつねねの大納言におはす。このみかど 東宮にたせ給ひて。保元三年八月十一日位につかせ給ひき。御年十六とぞうけ給はりし。十二月廿日御即位ありて年(年)もかへりにしかば。正月三日朝覲のみゆきとて院(院)へ行幸せさせたまふ。二十一日ことしも内宴ありて。上達部七人。四位五位十一人ふみつくりてまいるときこえ侍りき。序は永範の式部大輔ぞかゝるゝとうけたまはりし。題は花下歌舞を催すとかや。法性寺のおと(院)奉り給へりとぞきこえ侍りし。舞姫ことしは。うるはしき女舞にて。日ごろよりならはされけるとぞきこえ侍りし。みちのりのだいとく樂のみちをさへ好みありて。さもありぬべき女ども習はしつゝ。神の社などにもまいりて舞ひあへりと聞き侍りしに。ゆかしく見ばやと思ひはべりしかど。あいのくちあしき事は心にもえまかせ侍らて。さる所どもにえまいりあはで見はべらざりき。此の御中には定めて御覽せさせ給ひけんかし。かの入道(院)事にあひ世にあさましき事ども出てきうてきてぞ。内宴もたゞ二年ばかりにて。行はれぬ事になりて侍るにこそ。その事のとがにやはべらん。猶もあらまほしきなれどかつはし

い、原作は、據イ本改

もはら以下十三字、二本元

元いづとも、二本

たつる人もかたぐ。久しくたえたる事を行はれて世のさはぎも出てきにしかば。時におはぬ事とてはべらぬにや。春のはじめに詩つくりて。上達部より下さまたてまつる事。かしこき御時もはらあるべき事なり。さる事もべらば猶いみじかるべし。二月廿四日きさき立ち給き。鳥羽院の姫宮にて。高松院(院)東宮の御時より女御におはしまし、中宮に立ち給ひて。もとの中宮(院)は院(院)のきさき。公能右大臣の御むすめ皇后宮にあり給ふ。ことしぞ大嘗會ときこえ侍る。御かたぐさぶらひあはせ給へりしも皆まかりいでさせ給ひにき。此の御時はいまだ御かたぐも。おはしまさぬ程なれば。上は清涼殿ばかりにつねのやうにおはしまして。藤壺には中宮(院)ぞおはしましける。殿(院)の御とのる所は猶宣耀殿なり。いづくもひろらかにていとめでたくきこえ侍りしに。その年のしはすにあさましきみだれ都の内にてきにししかば。世もかはりたるやうにて。少納言の大徳もはかなくなり。めでたくきこえし上達部。このゑのすけなどきこえし子ども。あるは流されあるは法師になりなどして。いとあさましき頃なり。信頼の右衛門督と申しは。かの大徳が中あしなくて。かゝるあさましきをしいだせる也けり。御あぼえの人にていかなるつかさもならんと思ふに。入道いさむるをいぶせく思ひて軍をおこしたりけるを。大とこさとりて行く方知らずなりにけるに。彼のみかきもり(院)もそのむくひに。思はぬかば

ねになむなりにける。いとあさましともことばもあよばぬ事なるべし。
ひなのわかれ。

彼のみちのりの大とこのゆかり浦く流されたる。皆めしかへして世みなしづまりたれば。内の御まつりごとのまゝなりしに。みかどの御母方(皇)又御めのと(雄)などいひて。大納言經宗。別當惟方などいふ人ふたり世をなびかせりしほどに。院の御ため御心にたがひてあまりのことどもやありけん。ふたりながら内に候ひける夜あさましき事どもありて。おもひたゞしきさまにきこえけるを。法性寺のおほき大臣(皇)のせちに申やはらげ給ひて。おのくながされにき。このころはめしかへされて大臣の大將までなり給へるとこそうけたまはれ。さまであやまたずおはしけるにや。宰相(雄)はうきめ見たりとてかしらおろされにけり。それも歸りのぼりておはするとかや。鳥羽院うせさせ給ひしほどに。世の亂れいできてより。かたぐ流され給ひし人たびくしにそのかずおはしき。はじめのたび讃岐院の御ゆかり。おほいどの(皇)がたなど廿四五人ばかりやおはしけん。四年ばかりありてかの衛門督(皇)とかやきこえし人の亂れに。少納言の大とこ(皇)の子ども八九人ばかり浦々へときこえ侍りき。事なをりしかば其人々は召し返して。又のとしの春もろなかの源中納言とかや。衛門督におなじ心なるとてあづほの方へおはすとき侍りき。しか有し

たれば、原作で、
據二本改
の、據イ本補

が、原作る、據校
本改

と、或當作に

のき、コ木作と
られ、此條宜参考著聞
集五、十訓抄十

程に。その頃かの大納言(皇)。宰相(雄)とふたり阿波國ながとの方などにおはしき。その年の六月にやありけん。出雲守光保。その子光宗などいひし源氏のむさなりし人つくしへつかはして。はてはいかになりけるとかや。その人の女とかやいもうととかやなる人の。鳥羽院にときめく人にて。いとほしみの餘りにや。二條院東宮とておはしまし御めのとにて。位につかせたまひにしかば。内侍のすけなどきこえき。そのゆかりにて時にあへりしに。内の御方人どもの。かく事にあへりしかばにや。又源氏どものしかるべくうせんとしてにやありけん。又さばかりの少納言うづまれたる。もとめいでたるにやよりけんかくぞなりにし。かやうにていまは何事かはとおぼえしに。かくおはしますすべかりけるを。その折も又いかうたがはせ給ひけん。皇子の御方人とおぼしき人。つかさのきなどして又流させ給へりき。大かた六七年のほどに三十餘人ちりくにおはせし。あさましく侍りき。かるきにしがひてやうくめしかへされしに。惟方いつとなくおはせしかば。かしこより都へ女房につけてときこえし。
このせにも沈むときけば涙川流れしよりもぬる、袖かな。
とぞよまれ侍りける。この兄に大納言光頼ときこえ給し。四十餘りにてかしらおろして桂の里にこそこもり給なれ。それはかやうのことにかゝり給ふ事なく。何事

かしこ、原作
れ、據ニ本改

もよき人とさきつたてまつりし。いとあはれにありがたき御心なるべし。又右兵衛督成範ときこえし紀の二位のはらにて。そのありは播磨の中將(三)弟の美濃の少將(三)などきこえし。衛門督のみだれにちりくにはあはせし時。中將下野へあはしてかしこにてよみ給ひける。

わがためにありけるものを下野や室の八島にたえぬ思ひは。とかや。ひが事どもや侍らん。

花園のにはひ。

そのみかど(三)の御母(三)。うみおき奉り給てうせ給にしより。鳥羽の女院(三)養たてまつり給て。幼くあはしましし時は仁和寺におはしまして。五の宮(三)の御弟子にて俱舎願などさとくよませ給ひて。ぢくくよみつくさせ給ひて。そのころとさあらはせるふみどもをさへ傳へうけさせたまひて。智慧ふかくあはしましけり。院(三)位につかせ給ひしかば。常今の一の宮(三)にておはします上に美福門院の御養ひ子にて。近衛のみかどの御かはりともあはせしめして。この宮に位をも譲らせ給へらんと計らはせ給ひければ。都へかへり出でさせ給ひて。みこの宮たからのくらるなど傳へさせ給へりき。末の世の賢王におはしますとこそうけ給はりしか。御心ばへも深くあはしまし。動かしがたくなんあはしましける。廿三におはしまし

あ、原作お、據ニ
本改

は、原作お、據ニ
本改
り、原作る、據ニ
本改

御年(三)御病ひ重くて若宮(三)にゆづり申させ給ひて。いくばくもあはしまさうりき。よき人は時世にもあはせ給はて。久しくもあはしまさうりけるにや。末の世いとくちをし。みかどの御位は限りある事なれど。あまり世をとくうけとりてあはしましけるにや。又太上天皇朝にのぞませ給つねの事なるに。御心にもかなはせ給はず。世のみだれなをさせ給ふ程といひながら。あまりにはべりけるにや。よくあはしまし。みかどとて世も惜み奉るときこえ侍り。二條院とぞ申すなる。古き后(三)の御名なれど。をとこ女かはらせ給へれば。まがはせ給ふまじきなるべし。されど同じ御名は古くも侍らぬにや。此のみかど(三)の御母は大納言經實の御むすめ。其御母。東宮大夫公實の御むすめなり。その大納言の中の君は花園の右のおと(三)の北のかたなれば。あねの姫君を子にして。院(三)の今宮とてあはしましにたてまつられたりしなり。このみかど(三)生みおき奉りてうせ給ひにき。后の位贈られ給ひて。贈皇太后宮懿子と申すなるべし。御ちやの按察大納言(三)も。あほきおと(三)あほきひとつの位あくられ給へるとなむうけ給はる。さることやあらんとも知らでうせ給ひにしかども。やんごとなき位せへられ給へり。御末のさかりなるべし。はかなくて消えさせ給ひにし露の御命も。后をくられ給へばいきて成り給へるも昔がたりになりぬれば。残り給ふ御名は同じ事なるべし。彼の譲られてあはしまし。みかど(三)

院、據コ本補

は新院と申して。まだ幼くて太上天皇とておはしますなり。二條院の御子ふたり(秋徳)おはしますなる御中に。第二のみこにおはしますなるべし。御母ことく(き)にきこえさせ給ひき。この帝の御母。徳大寺の左大臣(徳)の御むすめと申すめりしも。うるはしき女御などに参り給へるにはあらで。忍びてはづかに参り給へるなるべし。さればたしかにもえうけ給はり侍らず。帝尋ねいて奉りて後。中宮(種)養ひ奉り給て母后におはしますなり。永萬元年六月廿五日位につかせ給ふ。御とし二つ。世をたもたせ給ふ事三年にや。おはしますすらむ。一院(種)おぼしめしおきつる事にて。東宮(種)に位を譲り奉り給て。まだ幼くおはしますに。太上天皇と申すもいとやんどなし。御年二つにて位につかせ給ふ事。これやはじめ(に)ておはしますらん。近衛の帝は三つにてはじめて即かせ給ふと申しも。はじめたる事とこそうけたまはりしか。多くは五つなどにてぞつかせ給。から國には一つなる例もおはしましけりとかきこえき。このみかどの御母。いまの中宮育子と申して。法性寺の入道のおほきおと(徳)の御むすめにおはします。前の上野のみ源あきとしのむすめの御腹となん。みかどの誠の御母の事はさきに申し侍りぬ。この中宮。二條のみかどおはしまさねども。今のこくもとてなを内におはしませば。昔にかはれる事なくなむおはしましける。臨時の祭の四位の陪從に。きよすけときこゆる人催しいだされて参られ

いで、コ本作い
だし、原作る、據コ
本改

まだ、據コ本補
に、據コ本補

かみ、コ本作介

る、原作ん、據コ
本改

たりけるに。先帝の御時は雲の上人なりけれど。この世にはまだ殿上もせねば。たちやすらひて北の陣の方にめぐりて後の宮のおはします。御たちのつぼねまちなど見るに。また殿上のかたさまへ参りて。はるかに見わたしなどしけるにも。昔にかはりたる事もなく。なれならひたりし人どもの見えければ。後の御方の人に物など申けるついでに。繪扇の片つきを折りてかきつけて。ごたちの中に申いれさせける。(風雅下)むかしみし雲のかけはしかはらねど我身一つのとだえ也けり。いとやさしく侍る事ときこえ侍き。

ふた葉の松。

さて。後一條院の御ときより。近きやうに侍れど十代に御世餘らせ給ひけり。今は當今(種)の御事申すもはかり多く侍れど。事ついきにおはしませば。事新しく侍れど申すになむ。當帝は一院(種)の御子。御母は皇后宮滋子(種)ときこえさせ給ふ。贈左大臣平時信のおとこの御女なり。みかど應保元年かのとの巳の年生まれさせ給ひて。仁安元年十月十日春宮にたせ給ふ。御とし五。みかど(種)よりも二年兄にておはします。あに春宮は三條院の例なるべし。同三年二月十九日位につかせ給。御年八つにおはします。同じみかどと申せども。世の中隔てある事もなく。一院(種)あめの下しろしめし。御母きさきさかりにおはしませば。いとめてたき御さかへなる

けり、コ本作き

は、據コ本補

五、恐當作六

べし。しかればふたばの松の千代のはじめ。いとめてたく傳へうけたまはり侍りき。御母きさきこのみかど生み奉り給ひて五六年ばかりにや。女御ときこえさせ給ひて。仁安三年と申し、やよひの頃皇太后宮に立たせ給へり。いまは女院と申すとぞ。いとめてたき御さかへにはしませす。多くの女御きさきおはしますに。みかど生み奉り給へりける御すくせ申すもあろかなり。先のみかどの御時もこの御世にも。御産の御いのりとのみきこえて。誠にはあらぬ事のみ聞こえ給ひしに。いとありがたく聞こえさせ給ふ。代々のみかどの御母。ふぢなみの御流におはしますに。堀河の帝の御母きさき(璽)も關白(璽)の御むすめになりて女御にまいり給へれども。誠には源氏(綱)にはしませば。ひきかへたるやうにきこえさせ給ひしに。いま又たいらのうぢの國母かくさかへさせ給ふうへに。同じ氏の上達部殿上人。近衛づかさなど多くきこえ給ふ。此の氏のしかるべくさかへ給ふ時のいたれるなるべし。たいらのうぢのはじめは一つにはしませしけれど。にきの家と世のかためにおはする筋とは。久しくかけりてかたぐきこえ給ふを。いづ方もおなじ御世にみかど后おなじ氏に榮へさせ給ふめる。平野はあまたの家の氏神にておはすなれど。御名もとりわきてこの神垣のさかへ給ふ時なるべし。このきさきの御母。顯頼の民部卿の御むすめにおはしますなるべし。醍醐の帝の御母方(璽)の家にておはしますのみにあらず。君に

れ、コ本元

仕へ奉り給ふ家。かたぐしかるべくかさなり給へるなるべし。今の世の事はゆかしく侍るをえうけたまはらて。おぼつかなき事おほくはべり。

今鏡第四

ふぢなみの上。

ふぢなみ。

よつぎは。入道おほきおと(璽)の御さかへ申さんとて。その御事こまかに申したれば。その後より申すべけれど。水上あらはれぬはながれのおぼつかなければ。まづ入道おと(璽)の御有様あろく申し侍るべき也。入道前太政大臣道長のおと(璽)は。大入道殿(璽)の五郎。九條の右のおと(璽)の御むすめなり。一條院。三條院。後一條院。三代の關白におはします。五十四の御とし御ぐしおろさせ給ひて。萬壽四年十二月四日六十二にてかくれさせ給ふ。おのこ君女ぎみあまたおはしますき。をんなぎみ。第一のは。上東門院(璽)と申して。後一條院。後朱雀院。二代のみかどの御母なり。つぎに第二の御むすめは。三條院の中宮妍子と申しき。陽明門院(璽)の御母なり。第四は後一條院の中宮威子と申す。二條院(璽)と後三條院の皇后宮(璽)との御母なり。第

む、據前本補

て、前本元

四、前本傍書云
三、歟

は、據前本補
の御むすめ、據
前本補○大、據
前本補
と、ころ、コ本作
たり

へり、前本无○
と、ころ、原作り、
據前本改
いと、據コ本前
本補

二、前本作一、恐
非是
の、據前本補

皇后宮、前本作
皇太后宮

治安、前本作治
曆、非是

ぞ、コ本作て○
皇后宮、コ本作
中宮

媚、前本作研、非
是○内、據コ本
前本補
と、前本此下有
いふと三字

さ、前本作き
身の、など、前前
本无

六の君は。後冷泉院の御母。内侍のかみ嬉子と申しき。これははみなたかつかさ殿(子)の御はらの御むすめなり。男君だち。太郎は宇治のおほきおと(通)。次は大二條殿(通)。またおなじ御はらからなり。堀川の右のおと(通)。閑院の東宮大夫(通)。無動寺のうまのかみ(通)。三條の民部卿(通)。この四ところは高松(理)の御はらの君だちなり。この御はらに女君二所おはしき。ひとりはお小一條院とて東宮より院にならせ給へりし。女御にまいり給へりき。今ひとところは土御門の右のおと(通)の北の方なり。昔も今もかゝる御さかへいとありがたきなるべし。上東門院は一條院のきさき。二代のみかど(後醍醐)の御母なり。御有様さきにこまかに申し侍りぬ。次に妍子と申すは女院とおなじ御はらからにおはします。寛弘元年一月内侍のかみになり給ひて。やがて正四位下せさせ給ふ。十二月に三位にあがらせ給ふ。七年正月に二位にのぼり給ひて。同年二月に三條院の東宮と申し、女御に参り給ふ。位につかせ給ひて。寛弘八年八月に女御の宣旨かうぶり給ふ。長和元年二月十四日中宮にたち給ふ。みかど位さらせ給ひて。寛仁二年十月十六日皇后宮にあがり給ふ。萬壽四年九月十四日三十四にて御ぐしおろして。やがてその日かくれさせ給ひにき。枇杷殿の皇太后宮と申す。隆家の帥くだり給ひけるに。この宮より扇たきはすとて。

(新古今類聚花玉の付巻)
すいしきはいきの松原まさるともそふる扇の風な忘れそ。

この宮の御はらに三條院のひめみやおはします。その宮禎子の内親王と申して治安三年一品の宮と申す。萬壽四年三月廿三日後朱雀院の東宮と申し、時まいらせ給ひき。御年十五にぞおはしき。みかど位につかせ給て皇后宮にたせ給ふ。後にあらためて中宮と申き。みかどの御ついでにかつは申し侍りぬ。後三條院の御母。陽明門院と申すこの御ことなり。この女院の御はらに女宮だちおはしき。良子内親王とて長元九年十一月二十八日伊勢のいつきときこえさせ給へりし。一品にのぼらせ給へりき。つぎの姫宮は媚子の内親王と申しき。長元九年霜月のころ賀茂のいつきときこえしほどにまかり出て給ける後。天喜五年などにやありけむ。なが月の比いづこともなく失せ給にければ。宮のうちの人いかにすべしと。もなく明かし暮らしける程に。三條わたりなる所にすみ給ふ也けり。はじめは人の扇にひと文字をおと(理)の書きたまへりけるを。女(理)の書き添へさせ給へりければ。おとこ又見てひとつ添へ給ふに。たがひに添へたまひけるほどに。歌ひとつにかきはてたまひけるより心通ひて。夢かうつつかなる事もいきてきて心やあはせ給へりけん。をいいだしたてまつりてやがてさて住み給ひけり。おとこ答あるべしなんと聞えけれど。人がらの品も身のさななどもおはして。世もゆるしきこゆるばかりなりけ

程、前本作ころ

しぞ、前本作け
いる○申、前本作
ひ

ま、前本元
故、前本元
が、前本元

るにや。もろとも心合せ給へればにやありけんさてこそ住み給ひけれ。男その
程は宰相中將など申しけるとかや。後には右のおとよまでなり給へりき。入道お
とよ(璣)の第四の御むすめ。後一條院の中宮威子と申しき。これも同じ御はら鷹司殿
女御にまいり給ふ。寛弘九年に内侍のかみになりたまひて。後一條院くらゐの御時
せ給ふ。同九月にかくれさせ給ひにき。みかどは四月(十七日)にうせさせ給ひきさきは九月
にかくれさせ給ひしいと悲しかりし御事ぞかし。その御はてにさはること有りて
江の侍従(姫)参らざりけるを。人のなごまいらざりしぞと申たりければ。
(後拾遺)わが身には悲しき事のつきせねば昨日をはてと思はざりけり。
とぞきこえける。この後のうみたてまつりたまへる姫宮章子内親王と申し。二條院
と申すこの御事なり。後冷泉院東宮におはしましし時まいらせ給ひて。永承元年
七月(十四日)に中宮にたせ給ふ。治暦四年四月(十七日)に皇太后宮にあがらせ給ひき。内にまいら
せ給ひて藤壺におはしましけるに。故中宮(璣)のこれにおはしましし事など思ひい
だして。出羽辨が涙つゝみあへざりければ。大貳三位(後醍醐)。
(後拾遺)しのびねの涙なかけそかくばかりせばしと思ふころの袂に。
とよまれ侍りければ出羽辨(璣)。

承保元年六月廿
二日、イ本作延
久元年七月廿三
日、據前本補
は、原作い、據
前本改

と、原作も、據
コ本前本改

(同上) 春の日にかへらざりせばいにしへの袂ながらや朽ちはてなまし。
とぞかへし侍りける。
馨子の内親王と申すも又同じ御はらにおはします。長元四年に賀茂のいつきにて。
同九年に出でさせたまひて。永承六年十一月後三條院東宮におはしましし女御にま
いらせたまひき。御とし廿三。承保元年六月廿二日皇后宮にたち給ふ。延久五年
四月廿一日御ぐしあろさせ給ひき。院の御ぐしあろさせ給ひし同じ日。やがて
同じやうにならせ給ひし。いとあはれに契り申させ給ひける御すくせなり。后の位
はもとにかはらせ給はず。入道殿(璣)の第六の君(璣)は。後冷泉院の御母におはしま
す。みかどの御ついでに申し侍ぬ。
梅のにほひ。

關白前太政大臣頼通のおとどは。法成寺入道おほきおとよ(璣)の太郎におはしま
す。御母宮だちと同じ。従一位源倫子と申す。一條の右大臣雅信のおとよの御むす
め也。鷹司殿と申す。この宇治のおほきおとよ大臣の位にて五十六年までおはしま
しき。後一條院の御をぢにて。御年廿六にて寛仁元年三月十六日攝政にならせたま
ふ。その十九日牛車の宣旨かうぶらせたまひて。やがてその廿二日大臣三人のかみ
につかせ給ふ宣旨かうぶり給ふ。みかど(後二)おとなにならせ給ひぬれば關白と申

七月七日、イ本
作十月十日、イ本
本、見上巻、月五
日本、原、前、本、無
に、改、前、本、無
コ、本、改、前、本、無
〇、本、改、前、本、無
上、有、十二、月、に、四
御、前、本、無、前
同、下、七、字、前
本、無

き。後朱雀院位につかせ給ふにも。猶御をぢにて長元九年四月廿九日さらに關白
せさせ給ふ。その後太政大臣(藤原)にならせ給ふ。御年七十一とぞきこえ給ひし。治暦三
年七月七日宇治の平等院に行幸ありて准三后の宣旨かうぶり給ふ。むかしの白河の
おと(藤原)のこどくに内舍人なども御隨身にたまはらせ給ひき。關白は譲り給ひ
てのかせ給へれど。内覽の職事まいり物申すこと同じことなりき。後三條院くらひ
につかせ給ひてぞ。年ごろの御心よからぬ事どもにて宇治にこもりるさせ給ひて。
延久四年正月廿九日御々しおろさせ給ひて。同六年二月二日八十三にてうせ給
き。この大臣歌などもよくよませ給ひしにこそ侍るめれ。その中に堀川の右のおと
ど(藤原)に。梅の花ありて奉り給ふとて。
(新古今上)
折られけりくれなる匂ふ梅の花けさ白妙に雪はふれしと。

とよませたまひたる。いとやさしく末の世までとまり侍るめり。この大臣の御子。
太郎にて右大將みちふさと申し、十八にてうせ給ひにき。御は、右兵衛督憲定の女
なり。まうけの關白。一の人の太郎君にてあへなくなり給ひにしかば。世もくれふ
たがりたるけしきなりしぞかし。としもまだ甘にだにらせ給はぬに。和歌などお
かしくよませ給ひけるさへいとあはれに思ひ出でられさせ給ふ。ひとよばかりを
七夕のなどよませ給ひたる。後拾遺にいりて侍めり。

ふしみの雪のあした。

はら、原作は、
據、本、前、本、改、
今、に、據、前、本、補

大將殿(藤原)のほかの君だちはおほと(藤原)のひとつ御はら(藤原)におはしましき。おほ
殿の御するこそは今に一の人がせ給めれ。その御ほうにをされて。大將殿もと
かくれ給ひけるにこそ。女君は後朱雀院の中宮(藤原)に奉り給へりしは。誠の御子に
はおはしまさて式部卿の宮(藤原)の御子なりしに。誠の御むすめは四條宮(藤原)と申し
き。大將殿のひとつ御腹(藤原)なり。ふしみのすりのかみとしつなときこえし人もひ
とつ御はらにおはしき。其の御母(藤原)は贈二位讚岐のかみとしつなとあひぐし給へ
りければ。としつなの君御子にておはしけれど。けさやかならぬほどなりければに
や。なをとしとをのぬしの子の定にて橘の俊綱とておはせし。後になほ殿の御子
とて藤原になり給き。直衣など着られけるをも橘直衣とぞ人は申しける。まめや
かになりて後。大殿。宇治大僧正(藤原)四條宮(藤原)などはおなじ御はらなれど。修理の
かみはげろ(藤原)うにてやみ給にしぞかし。上達部にだにえなられざりける。猶世のあが
りたるにや。からくやおぼしけん(藤原)とぞおぼえはべりし。されども近江守有佐といひ
し人は後三條院のまことには御子ときこえしかど。讚岐守顯綱の子にてこそやまれ
にしか。有佐といふ名も。みかど(藤原)の御手にて扇にかゝせたまひて。母の侍従内
侍に賜へりける。堀河の右のおと(藤原)は中務の少輔ありすけが道にあひて。あり

給、前本此下有
へり二字

り、原作る、據
前本改
きこえし、前本
作きし、前本
前本作ど、或是、
に、前本補
俊綱事、見宇治
拾遺三
の、前本元
せ、コ本作さ

ざ、原作た、據
コ本改

る、前本作り
ける、前本此下
有に字

るたりつるこそいとあしくおぼまつれ。院にたがはず似奉りたるさまなど有りけり
ときこえしかば。それはさてこそやまれにしか。このすりのかみはたち花をかへら
れにしかばなほ關白の御子なるべし。このすりのかみの。むかしおはりの國に
すんがうといひけるひじりにておはしけるを。熱田の社のつかさのながしるなる
ことのありければ。むまれかはりてその國の守になりて。かの國に下るまゝに熱田
にまうで。その大宮司とかをかなくせためられなどしければ。あやまちなき者
をかくつかまつるよと神に申しける。夢に昔すんがうといひて有りしひじりの法
施を年ごろ得させざりしかば。いかにもえ答むまじきとぞ見たりける。しかならん
ために國の司のしなに生まれ給ひけるにこそ。さすが昔の行ひの力に關白の御子
にてもおはするなるべし。われも昔その物おさめたりきなどいひて鏡とりいださ
せなどせられける。たゞ人にはおはせざるべし。大殿の伏見へおはしましたりける
もすゝなる所へはおはしますまじきに。雪のふりたりける。つとめて。としつな
がいたく伏みふけらかすに。にはかにゆきて見んとて。播磨守師信といふ人ばかり
御供にて俄にわたらせ給ひたりければ。思ひもよらぬとにて門を叩きけれど。むご
にあけざりければ人々いかにと思ひけり。かばかりの雪のあしたに。さらぬ人の家
ならんにてだにかやうの折節などはその用意あるべきに。いはんや殿のわたりたま

ふつ、異本作
ふつ、蓋物若
勘當之義(註)

いで、前本作と

あらん、前本此
下有ぞ字

れ、前本作せ

へるに。かたゞ思はずに思へるに。あけたるものにをそくあけたるよし加
うづありければ。雪を踏み侍らじとて山をめぐりはべると申しければ。元より
あけ設け又とりあへずいぞぎあけたらむよりもねんにけふあるよし人々いひけ
るとか。修理のかみさはぎいで。雪御覽じて御物語などせさせ給ふほどに。師信か
くわたらせ給ひたるに。いでしかるべきあるじなどつかまつれと催しければ。俊
綱にへどの参り侍りなんと申しければ。人にも知られてわたらせ給ひたればにへ
どのまいるとあるまじ。日もやうくたけて。いかでか御まうけなくてあらんとい
ひければ。殿(御)わらはせ給ひて。たいせめよなど仰せられける程に。家の司なるあ
きまさといひて光俊有重などいふ學生の親なりしをのこけしききこえければ。修
理のかみたちいで、かへり参りて。あるじまできこしめさすべきやう侍らざるな
り。御臺などの新しきもかく御覽する山のあなたの庫にをきこめて侍れば。便なく
とりいづべきやう侍らず。あらはに侍るは皆人の用ゐたる由申しければ何のはい
かりかあらんたいとりのいだけと仰せられければ。さばとてたちいで、とりいださ
れけるに。色々の狩装束したる伏見さぶらひ十人。いろ／＼のあこめにいひしら
ぬそめませしたるかたびらくりかけとちなどしたるさうし十人ひきつれて。倉
のかぎもちたるをのこさきにたちてわたる程に。雪にはへてわざとかねてしたる

さげ、前本作さ

この里かの里所
心、前本作かた

たはぶれ、前本

つと、前本作ひ

の、原作に、據

ふけら、前本此

も、前本作は

に、前本作の

やうなりけり。さきに跡ふみつけたるを。しりにつゝきたる男女同じ跡をふみてゆ
きけり。かへさには御臺高坏しろがねの銚子など一つづゝさけて持ちたるは。こ
のたひはしりにたちてかへりぬ。かゝる程に上達部殿上人。藏人所の家司職事御隨
身などさまぐにまいりこみたりけるに。この里かの里所々にいひしらぬそなへ
ども目もあや也けり。師信いかにかくは俄にせられ侍るぞ。かねて夢など見侍りけ
るかなどたはぶれ申しければ。俊綱の君は。いかでかゝる山里にかやうのこと侍
らん。よういなくて侍るべきなどぞ申されける。伏見にては時の歌よみどもつと
へて和歌の會たゆるよなかりけり。伏見の會とていくらともなくつもりてなんわ
なる。音羽の山のけさはかすめるなどよまれたるいというに侍るかし。かやうにも
てけうせらるゝあまりに。ふけらかしまいらせられけるにこそ。四條宮(預)の女房
あまたあそびて。暮れぬさきにかへり給ひければ修理のかみ。
都人くるればかへる今よりはふしみの里の名をもたのまじ。
となむよみ給ひける。白河院。一におもしろき所はいづこかあると問はせ給ひけれ
ば。一には石田こそ侍れ。次にはと仰せられければ。高陽院ぞ候ふらんと申すに。第
三に鳥羽ありなんやと仰せられければ。鳥羽殿は君のかくしなさせ給ひたればこそ
侍れ。地形眺望などいとなき所なり。第三には俊綱が伏見候ふらんとぞ申されける。

の、據前本補

に、前本作日〇
まだ、據前本補

に、原作は、今
從前本〇見、寫
本、原作は、據
給へり、前本元
補〇まだ、據前本

こと人ならばいと申しにくきとなりかし。高陽院にはあらで平等院と申す人もあ
り。伏見には山みちをつくりて。然るべき折ふしにはたび人をしていとをされけ
れば。さる面白きとなかりけり。大僧正(預)のまだ若くおはしける時。御母贈二位
(預)の。宇治殿(預)に。僧都の御房のまだ我が房もたせ給はてあひずみにておはし
ますなるに。房をさたしてたてまつらせ給へかしと申されければ。泰憲の民部卿近
江守なりけるが参りたりけるに。こゝなる小僧の房をまだもたざるに。草庵ひと
つむすびてとらせられなんやと仰せられければ。作り侍らんとやすきとに侍り。
泰憲がたちに仕うまつる石田と申す家こそ寺も近くて。おはしきさんにもつれ
づれなぐさみぬべき所にさぶらへ。堂なども侍りて見よき所なりと申しければ。殿
(預)はゆゝしきほうありける小僧かな。それはこよなきとこそあらめとて。すゑた
てまつり給へりけるとぞ。泰憲の民部卿はおほとの(預)の中將など申して。まだいは
けなくおはしけるに。大將殿(預)などまだ世におはしましける程は。殿(預)も人もお
もりにかに思ひたてまつらるゝこともなかりける折。名簿をとりいだして。手うつし
にたてまつりて。泰憲が名簿えさせ給へらんは。さりともしあるべき事なり。思ふ
やうありてたてまつるなりと申しければ。宇治にまいらせ給ひて。かくこそ仕うま
つりたれと申させ給ひけるにこそ。おぼえはつかせ給ひけれとぞき侍し。まことに

やはべりけん。

雲のかへし。

に、コ本前本元、
悉行

れ、原作は、
コ本前本改、
據

久、前本作元

させ、原作し、
據前本改〇て、
御並據前本補

宇治のおほきちと(神)の御むすめは。大殿(神)の一つ御はらにて。四條の宮(神)に
なんちはしましける。そのさきに式部卿のみこ(神)の女君を子にしたてまつりて。
後朱雀院の御時たてまつらせ給へりしは。弘徽殿の中宮、嬬子と申しき。その御事は
さきに申しはべりぬ。いつしかみやくうみたてまつりてあへなくかくれさせ給に
し。いと悲しく侍りしとぞかし。誠の御むすめならねども。いかにくちあしく思しめ
されけん。秋のあはれいかばかりかは悲しく侍りし。この中宮(神)のうみたてまつり
給へる姫宮は祐子の内親王と申き。長曆二年四月二十一日むまれたまふ。長久元年
もぎし給ひき。延久四年御ぐしあろさせ給て。後に二品の宮と申しき。この宮の(御)
歌合に宇治のおほきちと(神)の御うた。
(後拾遺)
有明の月だにわれやほととぎすたゞ一聲のゆくかたも見ん。
(同上)
とよみたまへるなり。大貳三位。
(同上)
秋ざりの晴せぬみねにたつ鹿はこゑばかりこそ人に知らるれ。
とぞよめりける。又禊子の内親王と申すこそは。この中宮うみおき給へる宮におは
しませ。寛徳三年三月加茂のいつきと申しき。天喜六年御なやみによりていてたま

の、詞花作も

しき、據前本補

ぞき、集作も
そめ

ふ。美作の御が。ありし昔の同じ聲かたとよめるは。この宮のいつきのころ侍りて。
思ひいだして侍りけるになん。この宮いつきときこえける比。本院の朝顔を見給ひ
て。
(詞花作)
神垣にかゝるとならばあさがほのゆふがくるまで匂はざらめや。
と侍るもいとやさしく。宇治殿のまとの御むすめ。四條のみやにおはします。後冷泉
院の中宮寛子と申しき。永承元年内へまゐり給ひて同六年皇后宮にたち給。御年十
六。治暦四年四月に中宮と申す。同十二月に御ぐしあろさせ給ふ。御とし三十二。天
喜四年皇后宮にて歌合せさせ給ふに。堀川の右のおと(神)雲のかへしの嵐もぞ吹
くなどよみ給ふ此のたびなり。また御身にも得させ給へりける道にこそ侍るめれ。
女房の参らむと申しけるほどに。身まかりけるをきかせ給ひて。
(詞花作)
くやしきぞきならしけるなべて世の哀とばかりいほましものを。
(長久六)
とよませたまひけんいとなさけ多くなん。宇治殿のかざりにおはしましけるに。お
ほ殿(神)のおぼしめさん事仰せられおかせ給へと申させ給ひければ。宇治と宮とと
ぞ仰せられける。宇治とは平等院の御堂の事。宮とは四條宮の御事なり。かくて候は
んずれば。御堂の事宮の御事はおぼつかなく覺しめすこと。つゆ侍るまじきなりと
ぞよく申させ給けるとなん。

白川のわたり。

鷹司殿(手)の御はらの第二の御子にては。大二條殿とておはしまし。關白太政大臣教通のおとと申しき。御堂の君たちの御中には第三郎にやあはしけんかし。さはあれども宇治殿(顯)のつぎに關白もせさせ給ふ。第二の御子にてぞおはしまし。大臣の位にて五十五年おはしましき。治曆四年四月十七日後冷泉院の御時。兄の宇治殿の御ゆづりによりて關白にならせ給ひき。七十三の御年にやありけん。みかど程なくかはりるさせ給ひて。後三條院の代のはじめの關白。やがて同月の十九日に更にならせ給ひき。延久二年三月に太政大臣にのぼらせ給ふ。承保二年九月廿五日ににぞうせさせ給ひにし。御年八十。兄の宇治殿は申べきならず。此おとも世おぼえなどとりくになむおはしまし。女御さきなどたびくたてまつらせ給ふ。家の賞かぶり給ふ事もたびくにて。御ひき出物御馬などたてまつり給ふ。公達など加階せさせ給ひて。もとより一人の人もをとらずなんおはしまし。御後見にて但馬守能通といふが。はかくしき物にてうしろ見たてまつりければ。御家のうちもいと心にくきともおほかりけり。いつの事に侍りけるにかや。おほみおそびに冬の束帯に半臂をきさせ給へりけるを。肩ぬがせ給けるときに。宇治殿よりはじめて。下がさねのみ白く見えけるに。この大臣ひとり半臂を著給へりけれ

御、前本元〇三、原作五、今從校本
五、前本元
り、原作つ、據前本改

五、前本作九、百練抄與此同〇
に、據コ本前本補

物、據前本補
も、據前本補
此條、宜考古事
ける、に、並據前本補

なる、前本元
れ、前本元

つれば、據前本補

て、據前本補
は、前本元
ける、據前本補
る、原作り、據コ本前本改

座、前本作かた
〇り、原作る、據コ本改

ば。御日記に侍るなるは。予ひとり半臂の衣をきたり。衆人はぢたる色ありとぞ侍るなる。かやうなるともぞ多く侍りける。能通のぬし宇治殿にまいりて御前にめされて。参るとしてやくもちてまいらんとて。藏人所のみづしさぐりて。しやくもをかれぬみづしかな。衣冠にておまへに参るものは。とりてこそ参るとにてあるにとつぶやきければ。殿(顯)きかせ給ひて。かく常にけぢしめらるゝなどぞ仰せられける。しやくは束帯にてぞつねはもつ事にて侍るを。とのるさうぞくにも事にしたかひ人によるべきにや。けひるしなどは常にもち侍るめり。又高光とかきこえし人。たれにあひ奉りたりけるとかや。車よりありてふところかみをたかくたゝみなして。笏になしてなんとれりけるとぞ聞きはべりし。束帯にても上達部はなちては。殿上にはもちてのぼり給はぬとかや。大宮の右のおとと(顯)經輔の大納言。藏人頭にていさかひ給ひける時笏してうち給ひたりけるより。とめられ侍けるとぞきし侍りし。御座のおほひかくなるさほはとりはなちにはべりけるを。鳥羽院の位の御時にや。殿上人のいさかひ給ひて。其の棹をぬきて打たんとし給ひけるより。うちつけられたるとなんきこえ侍る。もとなき事もかゝるためしに始まれるなるべし。その御座と申すは御侍子とて。殿上のおくの座のかみにたてられ侍るなり。紫檀にて作られて侍るなるを。むかし宇多のみかどまだ殿上人におはしまして。業平

け、前本作へ○
のみ、前本元

は、據前本補

と、前本作ひ○
れば、コ本作る

は、據前本補

敷通公が子たち
の事

なん、據コ本前
本補○おはせ
し、原作おはし
ましき、今従前
本

の中將とすまひとらせ給ひて。かうらんうちあらせ給けるを。代々さてのみをれながらこそ侍るなるに。近き御世に筑紫の肥後守になれりける何某とかやいふ人蔵人なりける時。紫檀のきれとのに申して。そのかうらんのをれたるつくるはんなどせられけるこそ。をこの事に**は**侍りけれ。かの能通のぬしの。しかありけるすゑなればにや。みちのりといひし少納言の大とも。近くはいみじくこそ世の中したゝむめりしか。このあとと**は**右衛門督など申しけるほどにや。白川に花見にわたり給とて。小式部内侍にかくと仰せられければ。
春のこぬ所はなきを白川のわたりにのみや花は咲くらん。
と申したりけるころ。いとやさしくとまりて見え侍れ。和泉式部とかきたるも侍る**は**母のよみて侍るにや。
はちすの露。

四條の大納言**は**のむすめの御はらに。御子ども多くおはしましき。太郎にては山井の大納言のぶいへの君おはしましき。いとよき人に**なん**おはせし。宇治殿**は**山のるばかりの子をえもたぬとぞ仰せられける。いかばかりおはしましけるにか。何ごとにか侍りけん。宇治殿の御もとにおはしけるに。わざとすゑまさんとおぼして。見かへりて久しくものし給ひけるにも。遂に給はざりけるとかやぞきこえ侍

又、據コ本補、
前本作五郎にて
は五字

て、前本元

るなる、據前本
補

りし。いと末おはせぬに土御門の右のあとと**は**のひめぎみ**を**を養ひ子にて。大殿**は**の北のまんどころと申し。二條殿**は**の次の御子は三位侍従信基とておはしましき。**又**九條の太政のあとと**は**信長とておはせし。それもはかくしき末もおはせぬなるべし。こばたの僧正**は**ながたにの法印**は**などいふ僧きんだちおはしましき。僧正は小式部内侍のはらなればにや。歌よみてこそおはすめりしか。粟津野のすぐるのすしきつのもめばなどいふ歌。撰集にも見え侍るめり。うせ給ひて後も上東門院の御夢に御覽じける。僧正の御うた。
あだにして消えぬる身と思ふらんはちすの上の露ぞわが身は。
とはべりける。浄土に往生し給にや。いとたうとき御歌本るべし。法印は兄だちの同じはら**は**におはするなるべし。
をのみみゆき。

大二條殿**は**の女君は後朱雀院の女御**は**におはせし。院うせさせ給ひて七八年ばかりやありけむ。御ぐしあろし給ひて十餘年ばかりすぎてうせ給ひにき。長久二年に歌合せさせ給へりしに。良暹法師の人にかはりて。
みかくれてすだくかはげのもる聲にさはぎぞ渡るるでのうき草。

とよめるこの歌合のうたなり。兼長の君はをのが影をや友と見るらんとよみ。永成

眞、系圖作貞

保、拾遺往生傳作曆、前本作せ

ある、前本元此條、宜考十訓八著聞集十四雜記、前本作見、草林相似、ひ、原作え、今從前本

ぞ、據前本補

しづやか、前本作しのびや

法師はいのちはことの數ならずとよめる。かやうのよき歌ども多く侍り。天喜元年御ぐしおろし給ひて治暦四年にぞうせさせ給ひにし。弘徽殿の女御と申しき。おなじ御時内侍のかみ眞子と申ししも世に久しくおはしき。第二の御むすめにやおはしけん。三君(三子)は後冷泉院の女御にまいりて。まさきに立ち給ひて(治暦十七)皇后宮と申しき。のちに皇太后宮(延久七)にあがりて。承保元年の秋御ぐしおろし給ひてき。猶きまさきの位にて比叡の山のふもと小野といふ里にこもりるさせ給ひて。都の外に行ひすまし給へりき。雪おもしろくつもりたるあしたに。白河院にみゆきなどもやあらんと思ひて。ある殿上人馬ひかせてまいり給へりけるに。院いと面白き雪かなと仰せられて。雪御覽せんとおぼしめしたりけるに馬ぐしてまいりたる。いみじくかんせさせ給て。御隨身のまいりたりけるひとり御ともにて俄に御幸ありけるに。北山のかたざまにわたらせ給ひければ。その御隨身ふともひよりて。もし小野のまさきの山ずみし給ふなどへやわたらせ給はんずらんとおもひて。かの宮にまうで仕うまつるものや侍りけん。俄にしのびてみゆきのけさ侍ぞ。そなたさまに渡らせ給ふ。もしその御わたりなどへや侍らんずらんとつげきこえければ。かの入道の宮(三)その御用意ありて。法花堂に三昧經しづやかによませさせ給ひて。庭の上いさゝか人のあつみなどもせず。うちいで十具ばかり有りけるを中よりきりて。袖甘いださんよ

る、據前本補所、前本此下有

うはありけるを。もし入りて御覽するとも侍らん。いと見苦しくやと女房申しけれど。きりていだし給ひけるに。既にわたらせたまひて。はしがくしの間に御車たてさせ給ひてかくとや侍りけん。さやうに侍りける程に。かざみ着たるわらは二人。ひとりしろがねの銚子にみき入れてもて参り。いま一人はしろがねの折おしきにこがねのさか月五すゑて。太かうじ御さかなにていだし給へりければ。御どもの殿上人とりて参りて。いとめづらしき御よういに侍りけり。かへらせ給てのち。かしこく内を御覽せでかへらせ給ぬなど御たち申しければ。雪見に渡り給ひていり給ふ人やはあるとぞのたまはせける。月を雪ともきこえ侍り。さて院より御使ありて。いと心ぐるしくおもひやりたてまつるに。うちいでなどこそよういして。ありがたくもたせ給へりけれとて。美の、國とかや御庄の券奉らせ給へりければ。参りつかうまつるおとこ女これかれ望みけれど。御幸つけきこえける隨身に預け給ひけるとぞ聞き侍し。そのとねりの名はのぶさだとかや。殿上人はおにがしの辨とかやたしかにも聞き侍らざりき。その小野の寺などは。猶のこりて三昧行ふ僧もまだかすかにはべる。后まだおはしましける折。夕立のそら物おそろしく鳴る神おどろくしかりけるに。御經よみてるさせ給へりけるを。神おちて御經なども紙の所。ばかり焼けて文字はのこり。御身には露の事もおはしまさざりける。いとたうとくわ

さましき事とぞ聞き侍りし。うせ給けるときもいとたうとくて。浄土にまいり給ふとぞ申し侍りし。大二條殿(駿)の君だちかくなり。

うすはなざくら。

昔は世もあがりてうちつゞきすぐれ給へるは申べきならず。又とりわきたる御能などは次のとにて。近き世の關白には大殿(顯)とてをぢの大二條殿(駿)のつぎに一人におはしましこそ。御みめも善く御心ばへもすゑさかえさせ給ふ事もすぐれておはしましこそ。その御名はもろざねとぞきこえさせ給ひし。宇治のおほきおと(顯)の第二の御子におはしましき。御母贈從二位藤原の祇子と申しき。四條の宮(禊)と一つ御はら也。大臣の位にて四十二年おはしましき。承保二年九月内覽の宣旨かうぶり給ひて十月三日氏の長者にならせ給。十五日に關白にならせ給ひき。御年三十四。白河院の御時なり。大將はのかせたまひて。御隨身など賜はらせたまひて牛車の宣旨かうぶらせ給ふ。承暦四年十月に太政大臣の上につらなり給べき宣旨ありき。堀河院くらむにつかせ給ひし日攝政にならせ給。同四年内舍人(顯)の隨身たまはり給。寛治二年十二月に太政大臣になり給ふ。同四年攝政の御名はかはりて關白と申しかども。猶つかさめしなどとは同じとなりき。嘉保元年三月關白(八日)のかせ給ひても御隨身はもとのやうにつかはせ給き。同三年正月なかの(八日)への手車の宣

に、前本元
など、原作猶、
據前本改、
牛、原作午、據
本前本改、據
の、據前本補
は、前本元

六十、コ本作六十二

かくせども、詞
花作へだつれ
ど〇し、同作そ

ぞ、前本作かや

こそ、前本此上
有さ字
なき、前本作な
作申(ま)前本

旨ありき。康和三年正月廿九日御ぐしおろさせ給ふ。二月十三日宇治にてうせさせ給ふ。御年六十におはしましき。大殿と申し。又後の宇治の入道殿とも又京極殿とも申すなるべし。寛治八年高陽院にて歌合せさせ給ひし時の歌よみども。昔にもはぢぬ御あそびなるべし。筑前の御のうすはなざくら(顯)の歌。匡房の中納言の白雲とみゆるにしろしといふ歌にまけ侍りしを。殿より。

しら雲はたちかくせどもくれなるのうす花ざくら心にぞしむ。
と仰せられたりしかば。筑前の御の御返したてまつるに。

白雲はさもたはたてくれなるの今一しほを君しそむれば。

と申したりしいとやさしくこそ侍りしか。御心ばへなどのなつかしくおはしましけるにこそ。御鞆御覽せさせ給ひけるに。もりなが淡路守といひしを殊の外にほめさせたまひけるほどに。信濃守行綱も心には劣らず思ひて羨ましくねたく思ひけるに。御足すまさせ給ひけるにつみ奉るやうにたびくしければ。いかにかくはと仰せられければ。鞆も見しらぬはぎのといひつゝ洗ひ参らするを。行綱もよしとぞ仰せられける。御かへりごととこそくゝと撫て奉りける。もとのさるがうなれども。ものこちなきしうにはさもえまざじかして覺えて。またもりながのぬし花ざかりに鞆もたせてかへりへまかりけるに。行綱さそひにやりたりければ。御物忌にこ

もりて人もなければ。けふはを參らじと返事しけるをきつせ給ひて。たゞい
 けとて薄色の指貫のはりたる。香のそめ布などおさめ殿よりとり出ださせて。には
 かにぬはせて。御まり花の枝につけてみまやの御馬にうつしおきていだしたて、
 つかけしければ。けふこそこのついでに女に見えめとおもひて。日ごろはあはぬ女
 の家のさじきに馬うちよせてかたらふほどに。御馬にはかにはねおとして。まへの
 ほりけにうちいれてけり。かしらくだりのこる所なく土がたにあみたりけるを。女
 家にいれてあらひあげていとあしさにこそあひにけれ。御馬走りてみまやに立ち
 にけり。あやしきこしめしけるほどに。るかひをひつきてかくと申しければ。い
 かにあさましくおかしくおぼしめしけん。さてしばしはえさしいてもせざりけると
 ぞきこえ侍りし。

なみのうへのさかつき。

この大殿(應)の末廣くおはしますさまは。をのこ公だちよにしらす多くおはしまし
 て。をとこ僧もあまたおはしますに御むすめぞおはしまさぬ。六條の右のおと
 つり給へりし。賢子の中宮とて堀河院の御母なり。宮々おほくうみ奉り給へりき。
 その御事はみかどの御つるでに申しはべりぬ。さて一の人つがせ給へる。太郎にお

この、前本元

うち、前本作は
ねり、前本作は
し、似是

と、前本作に

なり、據本補
○へり、前本元
へる、據前本補

はしまし、後の二條の關白おと(應)の御ながれこそ今もつがせ給ふめれ。その御
 名は關白内大臣師通と申しき。御母は土御門の右のおと(師房)と申し、御むすめ
 (璽)を。山井の大納言信家と申し、が子にしたてまつり給へりし御腹なり。永保三
 年正月廿六日内大臣(金)になり給ふ。御年廿一。嘉保元年三月九日關白にならせ給ふ。
 御年卅三。その三年正月(金)從一位にのぼらせ給ふ。右大臣の上につらなるべき宣旨か
 うぶり給ふ。承德三年六月廿八日御年三十八にてうせさせたまひにき。大臣の位に
 て十七年おはしましき。このおと(師房)御心ばへたけく。すがたも御能もすぐれてな
 んおはしましける。御即位などにやはべりけん。匡房の中納言この殿(應)の御有様
 をほめたてまつりて。あはれこれをもろこしの人に見せはべらばや。一の人とて
 さし出だし奉りたらんに。いかにほめきこえんなどぞまのあたり申しける。立上と
 いふ琵琶をひき給ひければ。おほきなる琵琶のちりばかりにぞ見え侍りける。手な
 どもよくかゝせ給ひけり。うまごの殿(應)などばかりはおはしまさずやあらん。手
 かきにおはしきとぞ定信の君は人にかたられける。三月三日曲水宴といふ事。六
 條殿にてこの殿せさせ給ふときこえ侍りき。から人のみぎはにのみ居てあうむの
 盃うかべて。桃の花の宴とするとを。東三條にて御堂のおと(應)せさせ給ひき。
 その古き跡を尋ねさせ給ふなるべし。このたびの詩の序は孝言といひしぞかきけ

れ、前本作い

るとき、侍りし。四十にだに足らせたまはぬを。しかるべき御よはひなり。かぎりある御いのちと申しながら。御にきみのほど人の申し侍りしはつねの事と申しながら。山の大衆のおどろくしく申しけるもむつかしく。世の中心よからぬつもりにやありけんとも申し侍りき。

宇治のかは風。

風、原作せ、據前本改

まいらせ、原作
まさせ、據コ本
改補、前本作ま
つらせ

かに、前本作ま

り、原作る、今従
前本

御心、前本无

後の二條殿(源)の御つぎには近く富家殿とておはしまし。入道おとよおほぢの大
殿(源)御子にしま(い)らせ給ふときこえ給き。御母は大宮の右のおとよ(源)の御むす
め(孫)なり。このおとよの御名は忠實とぞきこえ給し。康和元年閏九月廿八日内覽
の宣旨かうぶり給ひき。御とし廿二。同二年七月十七日右大臣にならせ給ひき。大
將も猶かけさせ給へりき。天永三年十二月十四日太政大臣になり給ひき。はじめは
宇治の川瀬波しづかにて白河のみづへだてなくおはしまし。かば。富家殿つくり給
ひて院(源)わたらせ給ひけるに。宇治川にあそびの船歌うたひてなみに浮かびなど
していと面白くあそばせ給ひけり。盛定といひしおとこ歌うたひ。その時こうた
うなどいひし船に乗り具してうたつかうまつりけるとかや。そのたび人々に歌
よませさせ給はざりけるをぞくちあしくなど申す人もありける。かやうの所にわ
たらせ給ひて何となき御あそびも古き跡にも似ぬ御心なるべし。かやうにて過ぎ

させ給ひしに。保安元年十一月十二日にやありけん。夜をこめて院よりとて堀川の
おとよ(源)俄にまいり給へと御使ありて。おとよ(源)内覽とむべき由を仰せ下し
給ひけり。白河院うせさせ給ひて鳥羽院世しらせ給ひし時にぞ富家より出てさせ
給ひし。待賢門院おさなくおはしまし。を白河院養ひ奉り給ひて。鳥羽院くらるに
おはしまし。女御にたてまつり給ふほどに。入道おほきおとよ(源)の御むすめ(孫)
女御に奉らんとせさせ給ふときこゆるによりて。關白うちとめ申させ給ふとぞきこ
え侍りし。白河院の御世にきさき御息所などかくれさせ給ひてさるかた(源)もお
はせざりしに。白川殿ときこえ給ふ人おはしましき。その人待賢門院(源)をば養ひ
奉り給ひて。院も御むすめとてなしきこえさせ給ひし也。その白川殿あさまし
き御すぐせおはしける人なるべし。宣旨などは下されざりけれども。世の人は祇園
の女御とぞ申すめりし。もとよりかの院(源)のうちの局わたりにおはしけるを。はつ
かに御らんじつけさせ給ひて三千の寵愛ひとりのみ也けり。たゞ人にはおはせざる
べし。賀茂の女御と世にはいひて。うれしきいはひをとて姉弟後につきてきこ
えしが。それはかのやしろのつかさ重助がむすめどもにて。女房に参りたりしか
ば御目近かりしを。これははづかに御覽じつけられて。それがやうにはなくて。こ
れはとの外におもきさまにきこえたまひき。かの御さたにて其女院(源)もならびな

くおはしましき。代々(後醍醐)の國母にておはしましければ。とはりとは申しながら。いかばかりかほさかえさせ給し。おさなくては白河院の御ふところの御足さしいれてひるも御殿でもりたれば。殿(建礼門院)などまいらせ給ひたるにも。こゝにすぎなきとの侍りて。え身づから申さずなどいらへてぞおはしましける。おとなにならせ給ひてもたぐひなくきこえ侍りき。白河院かくれさせ給ひてこそほいの如く。殿の姫君たてまつり給ひて女御の宣旨かうぶり給ふ。皇后宮にたち給ひてのちは院號きこえさせ給ひて高陽院と申しき。院の後まゝり給へるが女御の宣旨はこれやはじめに侍りけん。後の宮のはじめつ方も宇治の御幸ありて皇后宮ひきつきていらせ給し。うるはしき行啓のやうには侍らて皆狩衣にふりうなどして。女房の車いろくにもみぢのほひいだして。さうなども皆車にのりてなん侍りし。さきざき白河院の御時は。雜仕は皆馬にのりてすきがさたの笠などきて。いくらともなくこそつゝきて侍りしが。これは女車にてこれぞはじめ侍りし。後の宮にはかうぶりにてこそ常は人々候ふを。これはほういになされてなん侍りし。此のふけのおと(建礼門院)は御みめもふとり清らかに御聲いとうつくしく。年老いさせたまふまで細くきよらかにおはしましき。朗詠などえならすさせ給ふ。又箏のとはすべてならびなくおはしましき。歌はさまてもきこえさせ給はざりしに。宇治にこそ

は、前本元、或行が、コ本作に、據前本補

は、據前本補

う、據前本補

へり、前本元

たえせぬ、新古今作ひさしき〇〇
 せ、前本作よ〇〇
 ひ、前本作り
 ぞ、前本元、恐行

させ、前本作し

り、前本作らせ

は、據前本補

こと、前本元

こと、前本元〇
 へり、據前本補

し、據前本補〇
 の、據前本補

りのさせ給へりしときぞ。

(新古今雜事) さほかはの流たえせぬ身なれどもうきせにあひて沈みぬる哉。とよませ給ひけるとかや。ふみのさたなどは常にせさせ給ふともきこえざりしかども。天台止觀とかいふふみを「ぞ」皇覺とかいひてすきうの法橋といひしに。本書ばかりは傳へさせ給ひてけり。日とに参りて候ひければ。まぎらはしき日もよふけてなど思ひいださせ給ひつゝ。年をわたりてぞよみはてさせ給ひける。眞言もこのみさせさせ給ひけるときこえき。年よらせ給ひては御足のかなはせ給はざりしかば。わらふだに乗りてひかれ給ひ。又御輿などにてぞ院にも参り給ひける。御ぐしおろさせ給ひて奈良にても山にても御ずかいせさせたまひき。御名は圓理とぞきこえさせ給ひし。いづれのため院(建礼門院)の御ともにてぞ御受戒はせさせ給ひける。御子の左のおと(建礼門院)のことおはせしゆかりに奈良におはししが。宇治殿へは入らせ給はておはしまししを。法性寺殿(建礼門院)に御消息ありければ。とく京の方へいらせ給へと御かへりごと申させ給へりければ。よろこび給て年ごころの御中も直らせ給ひて。播磨とてときめかせ給ひし人の。都の北に雲林院か知足院かに侍るなる堂にぞおはしてうせさせ給ひし。その播磨とかきこえし人は世にたぐひなきさいはひ人になむおはすめり。白川殿に唯同じさまなるとのはじめにやおはしけん。後には

は、據前本補

女院(璣)のはした中ものなどいふとになり。つぎに女房になりなどしておはすとぞきこえられし。今にかしこき人にて。法性寺殿の三井寺の僧都の君(璣)養ひまして。昔に變らぬ有様にてなんきこえ侍るなる。かの白川殿とて祇園におはせしはゆかりまでさりがたく院におぼしめされておはせしに。はじめつかた平氏の正盛といひしまいり仕うまつりければ。隱岐守などいひけるも。後にはしかるべき國々のつかさなどになりたりけれど。なほ下北面の人にてありけれど。その子よりぞ院の殿上人にて四位五位のまひ人などしけれども内の殿上はえせざりけるに。五節たてまつりける年受領いまひとり爲盛爲業などいひしが父(璣)なりし殿上ゆるされたりしかば。忠盛。

(金葉上)おもひきや雲井の月をよそに見て心のやみに迷ふべしとは。

とぞきこえし。その殿上ゆるされたりしは。院の御めのとぞ知綱といひしがうまご(璣)なれば。いとちしみるべき上に近くつかはせ給ふ女房の。心ばへなどおぼしめしゆるされたる者にてありしが。子などおまたうみたりければ。殿上せせんとおぼしめしながら。辨近衛のすけなどにもあらでたちまちに殿上せんもいかどおぼしめして。宇佐の使につかはしけるを。鳥羽院の新院と申しておはしまし程に。長輔ときこえし兵衛佐をつかはさんと申させ給ひければ。かの御方に申させ給ふと

近、前本作兵

せ給、原作れ、據前本改補

のほ、前本此下有れ字

その以下至女房かたらける、前本无

さりがたくて。さらば爲忠は今年の五節をたてまつれとぞ殿上はゆるさせ給ける。あまりふとれりしかばにや。口かはくやまひして十年ばかりこもりながら四位の正下までのほりしも。三條鳥丸殿つくりたりしたつはあそこそこもりたれども。女の宮づかへをすれば加階はゆるしたぶと仰せらるとぞ。顯頼の中納言は大原うとくおぼゆとぞよろこびいふとてたはぶれられける。左京のかみ顯輔のいはれけるは太夫の大工なるべし。二條の大宮つくりても加階し。その御堂つくりても。また院の御所つくりてもかゝいすといはれけるときこえしにあはせて。木工權頭をぞかけづかさにしたりし。貫之がつかさなればとてなりたりけるとかや。その人(璣)またおさなきほどなりけるに。白河の法皇の六位の殿上したりけるに。それがしと召しけるを人のめしつぎければ。藤原の異姓になるはあしきことなりとてものと姓になるべき由仰せられけるも。猶むかしの御いとほしみの残りけるとぞきこえし。ためあきらといひし人も本はためりのりといひけるを。白河院のためあきらと召したりけるよりかはりたるとかや。おぼぢの高大貳はなりのりといひしかども。此の頃その末はむねあきらなどいへるは。召しけるよりあらたまりたるとかや。白河院ははかなきことも仰せらるゝのかくぞとまりける。又御心のさとくおはしまして。時の程にもほし定めけるは。信濃守これあきらといひしが式部丞の藏

人なりしとき。女房の局の前にもるものなど申しけるに。殿まいらせ給ふとて庭に
 おりて居ければ。女房まいりて。關白の参り候ふなど申しければ。關白(院)ならばさき
 こそをはめ。をこのものは兄の知綱が参るをいふにこそあらめと仰せられけるに。
 伯耆守(細)の参られけるとぞ女房かたられける。かの雲井の月よめりし忠盛は。中
 中に院(頭)かくれさせ給ひてのちにぞいつしか殿上ゆるされたりし。その時殿上の
 硯のはこにかきつけられたりける歌ありけりときこえしは。みなもとなのる雲の上
 はなにさへのぼるなりけりとかや。忘れておぼえ侍らず。山城と伊勢と。源と平と
 をたいたるやうにぞきこえし。おなじおりに殿上したりける人のとなるべし。そ
 の平氏の子ども二人ならびて藏人になりなどせしも。平氏のおほきちと(院)は白
 河院の御時は非藏人などいひて院の六位の殿上したりしかども。うるはしくはな
 させ給はてかうぶり給はりて兵衛佐になりたりしも。藏人はなをかたきときこ
 え侍りき。さて又かの宇佐使に下られし兵衛佐(頼)はありかたときこえし人のむこ
 なりしが。心ざしやなかりけん離れにしかばいとくちをしくて。なを御きそくにて
 ふたゝびまでとりよせたりしかどもえすみはてざりしかば。世に歌にさへうたひて
 ありしを。院の御めのと子の帥(頼)の子なれども。ふたゝびまでここさりたるあやま
 りにや。國のつかさなりしをもとらせ給ひてふる里のせうとに。天の橋立もわたり

よめり、前本作
 よみたり
 に、前本元〇そ
 の時、前本元、
 きこえし以下、
 前本甚有異同、
 今便宜附載卷末

にしは。かの宮内卿平氏のむこになれりしいとおしみの、これるなるべし。そのふ
 る里にすみわたる人ときこえしも。世の中によめる歌などきこえ侍りき。歌はわす
 れておぼえ侍らず。

(前本八二〇頁六行以下如左)
 きこえし。

山しろがみなもとなのる雲のうへはいせへいしさへのぼるなりけり。
 とぞきこえはべりし。おなしあり殿上したりける人のとなるべし。山しろといせ
 と。みなもと、平とをつかひよかりける歌とかや。その平氏のともしふたりくら人
 になれりしは。白河の御時はきよもりが非藏人といひて院の六位殿上したりし
 かども。うるはしくはなさせたまはて。かうぶりたまひて兵衛佐になりたりしも。
 くら人はなをかたきときこえ侍りき。さて又かの白河殿はゆかりまでざりがたく
 おぼえにおはして。平氏のまさもりといひしむこに。宮内卿ときこえし人のわか
 くおはせし時にやなられたりしかばいとをしみありしに。またその人のむこにさ
 きに申つる兵衛佐とりたりし女に心ざしやなかりけん。のがれにしとおほせにて
 かへりなりたりしかども。なを又はなれにしかば。そのとがにやあまのはしだて
 のくにを。こじうとのすけたゝときこえしにとりわたされにき。御めのとぞのそ
 ちのこなれども。としにふたゝびまでとこをされりしによれるなるべし。よにも
 うたにつくりてにくみのつまとかやうたふめりき。そのよつまにはかぐらのふ

えにふき給ときこえし少將など申候とき。わたりすまれしうたにと人のよみたる
ときこえし。ひろうなきとかやあほえはべらす。

今鏡第五

ぶちなみの中。

みかさの松。

近くおはしましし法性寺のおと(馳)は。ふけの入道おと(馳)の御子にておはし
ます。御母六條の右のおと(馳)の御むすめ。仁和寺の御室(馳)と申し、一つ御はら
からにておはしましし。かば其の北のまんどころ。昔は白河の院にも参りたまひけ
るにこそ。仁和寺の法親王をば師子王の宮とぞ世には申し。御母の童名にやお
はしけん。又宮のわらは名にやおはすらん。さてこのおと(馳)は仁和寺の宮(馳)と
親しく申しかはしたまひき。富家のおと(馳)の北の方にては堀川の左のおと(馳)の
御むすめおはせしかども。それは御子おはしまさず。くちあしきとともありけるに
やよりけん後にはうとくなり給き。その六條のおと(馳)の御むすめの京極の北
のまんどころにさぶらひ給ひける。はじめは院(馳)にめして宮うみ奉り給へりけ

て、據前本補、下

の、據前本補

又以下十四字、
據前本補○は、
據前本補

き、原作て、據
本改

時、據コ本補
○み、原作は
つ、據前本改○
へ、前本作け
な、コ本作が、前
本、御○み、事、
並、據前本補
う、據コ本補

る程に。富家のおと(馳)若くおはしける時に。みそかにのぞきて見給へることありけ
るより。御やまひになりて惱みたまひけるを。命もたえぬべくおぼゆるとのみ侍れ
ど。心にかなふべき事ならねば世にながら侍らん事もえ侍るまじ。又心のま
に侍らばいかなるおもき罪もか(う)ぶる身にもなり侍ぬべし。いづれにてかよく侍
らんなど京極の北の方(馳)に申し給ひけるにや。いかに御命おはしまさんことに
まさることはあるまじければとて院に申させ給たりければ。ゆるしたまはらせ給ひ
たりけるとかや。ひがごとくに侍らん人の傳へ語り侍しなり。さてすみたまひける
ほどにまづは姫君(馳)うみ給ひ。またこのおと(馳)をもうみ奉り給てのち。さて
うるはしくすみ給ひけるとぞうけ給はりし。このおと(馳)保安二年のとし關白に
ならせ給ふ。御とし廿五にぞおはしましし。同四年正月に讃岐のみかど(馳)くらるに
つかせ給しかば攝政と申き。みかどおとなにならせ給て關白と申し、ほどに。近衛
のみかど位につかせ給しかば又攝政にならせ給ひき。久壽二年七月近衛のみかど
かくれさせたまひて。此一院(馳)位につかせ給ひしにも又關白にならせ給しかば。
四代のみかどの關白にてふた(び)び攝政と申き。昔もいとたぐひなき事にこそ侍り
けめ。おほきおと(馳)にもふた(び)びなり給へりしいとありがたく侍りき。藤氏の長者
さまたげられ給しも。左のおと(馳)の事にあひ給しかば。保元々年七月に更にかへ

給、前本作させ
給はれ五字

に、據コ本補

りならせ給にき。同三年八月十六日二條のみかど位につかせたまひし時。いまのと
の(基)の御兄におはしまし、右のおほいまうちぎみ(基)に。關白ゆづりきこえさせ
給て大殿とおはしましに。應保二年に御ぐしあるさせ給てき。御年六十六とぞ
うけ給はりし。長寛二年二月十九日六十八ときこえさせ給ひし年かくれさせ給ひ
にき。昔まだあさなくおはしまし、時。春日の祭の使させ給しに。内侍周防のこ
参りて行事弁爲隆に申をくりける。
(金鑑)

い**か**ばかり神もうれしとみかさ山二葉の松の千代のけしきを。
そのかへしはをとりたりけるにやきこえはべらざりき。祈り奉りたるしるしあり
てめでたく久しくせさせ給ひき。法性寺の御堂の御所などつくりて。貞信公(基)の
御堂のかたはらにすませたまひしかば法性寺殿とぞ申める。昔より攝政關白つ
きておはしませど。身の御さオえはたぐひなくおはしましき。才學もすぐれておはし
ましける上に。詩など作らせ給とはいにしへの宮(攝)帥殿(基)などにもおとらせ
たまはずやおはしましけん。歌よませ給事も心たかく昔の跡をねがひ給ひたるさ
まなりけり。管絃のかた心にしめさせ給ひて。筆のとをむねと御遊などにもひかせ
給ふとぞき侍りし。父オと(基)ばかりはおはしまさずやありけん。手かかせ給ふ
事は昔の上手にもはぢずおはしましけり。
五字 四字 五字

まし、據前本補

も、コ本作ま

さへそひてすぐれておはしましき。内裏の額ども古きをばうつし。うせたるをば更
にかかせ給とぞうけ給はりし。院宮の御堂御所などの色紙形はいかばかりかはなほ
くかせ給し。御願よりはじめて寺々の額など數しらずかせ給き。よが可はの花臺
院などはふるき所の額もむかへ講すめけるじりの申したるとてかせ給へり
とぞ山の僧は申し。又人の仁和寺とかより額申したりければかせ給ける程に。
おくのえびすもオとひらとかいふが寺なりときかせ給て。みちの奥へとりかへしにつ
かはしたりけるを返し奉らじとしけるを。女の心かしくやありけん。かへし奉ら
ざらんはしれごとなりといさめければ返し奉りけるに。御厩舎人とかつかはした
りける御使の心やたけかりけん。三つにうちわりてぞもてのぼりける。柱をにらみ
けんにもをとらぬ使なるべし。えびすまでもなびき奉りけるにこそ。又いづれの御
願とかの繪に。飯室の僧正(基)たうとくおはするとかくとて。冷泉院の御太刀ぬかせ
給へるに。僧正にげ給へるあとに。とままれる三衣篋のもとにて。みかどのものけ
うたせ給たる所の色紙形。これはえかへしとておぼもかへれていまだ侍る也。御手
ならびなくかせ給へども。さやうの御よういはありがたき事ぞかし。まだあさな
くおはしまし、時より。歌合など朝夕の御あそびにて。基俊俊頼などいふ時の歌よ
みどもに。人ノ名かくして判せさせなどさせ給ふとたえざりけり。御うたなど多

などは、コ本作
として、前本作り
さる程、

人の、據コ本補
○など以下九
字、前本作きこ
え侍る

な、前本无
し、前本作りけ
る

まし、據前本補

くき侍りし中に。

(金巻) わたの原こぎいで見ればひさかたの雲るにまがふちきつ白浪。
などよませ給へる御歌は。人丸が島がくれゆく舟をしぞ思ふなどよめるにもはぢ
ずやあらんとぞ人は申し侍りし。

(金巻) よし野山みねの櫻や咲きぬらんふもとの里に匂ふはるかぜ。

などよませ給へるも。心も詞もたへにして。金玉集などにえらびのせられたる歌の
つらになんきこえ侍るなる。からのふみ作らせ給ふ事もかくぞありける。さればふ
みの心ばへまらせ給ふ事深くなんおはしませ給へる。白河院にも三巻の時えらびて
奉り給ひ。基俊の君にもからやまとのおかしきことの葉どもをぞえらびつかはさ
せ給ける。かやうの事ども多くなん侍るなる。又つくらせ給へるからの詞ども。御
集とて唐の白氏の文集などのとくに。事このむ人もてあそぶとぞうけ給はる。かく
ざえもおはしまして。日記なども鏡をかけておはしませば。右大弁爲隆といひし幸
相は日本はゆしくしてつらなる國かな。さきの關白(醍醐)を一人にて。このおと
花園のおとふたり。若き大臣よくつかへぬべきを。うちへつゝ公事もつとめさ
せて。この殿一人なれば。いたづらに足ひきいれてめたまへるこそ惜しけれとぞ
いはれけるとなんきこえ侍りし。

ひ、前本作ふ
ふしの、前本无

菊のつゆ。

女 法門のかたは底をきはめさせ給ひて。山三井寺東大寺山科寺など智恵ある僧綱大と
こども内裏に御讀經などつとむる折に。御籛のうちにて深き心たづねとはせ給ひ。
わが殿にて八講など行はせ給ふ。折ふしのとにつけて經論の深きとひろき心。汲み
つくさせ給はぬとなくなんおはしませ給へる。御佛供養せさせ給ひける御導師に。菊
の枝にさして給はせける。

(玉葉) たぐひなき御法を菊の花なればつもれる罪は露ものこらじ。

などぞきこえ侍し。御心ばへもすきくしくのみおはしませながら。わづらはしく
とりがたき御心にて。ひがくしきとはおはしませ。何事もおどろかぬやうにぞ
おはしませける。されば世にもにさせ給はて。いづ方にもうときやうにきこえさせ
給ひて。公達など心もとなくきこえさせ給ひしかども。世の中みだれ出てきて後元
のやうに氏の長者にもかへりならせ給ひ。男公達も位高くならせ給ひて。法師にお
はします(醍醐)も僧正ともならせ給ひ。ところくの長吏もせさせ給へり。女御きさ
きかたぐおはしてよろづあるべきと皆おはしませ。昔時にあはせ給ひたる一
の人におとらせ給事なかりき。馬をうしなひてなげかざりけん翁などのやうにてお
はしませしけにや。くるしき世をすぐさせ給てのちはかくさかへさせ給へり。作ら

やうに、前本此
下有てそ二字、
前本无

のちは、前本作
つめに

せ給ひたる御詩とて人の申しは。

官祿身にあまりて世をてらすといへども。素閑性にうけて權をあらそはず。

か、前本作、
して、前本作さ

とかやつくらせ給へるもその心なるべし。さやうの御心にや又近衛のみかどのか
なしびのあまりにや。關白にこのたびならせ給しはじめに。かのみかど船岡にをさ
めたてまつりし御供せさせ給へりし。かちよりおはしますさまにて御こしの綱を
ながくなされたりしにや。日記にしなしてかゝれてぞすさまじきはおはしませける。
いとおはれに悲しくなん侍りける。二條院くらむにつかせ給し時關白をば御子に
譲りませ給て。大殿とておはしませしほどに御ぐしおろさせ給て。御名は圓觀
とぞつかせ給ける。このおとらうせさせ給ふほど近くなりて。法性寺殿かつら殿な
ど御覽じめぐらせ給て。ところぐの有様をさまぐの文ども作らせ給ひて。もり
みつこれとしなどいふ學生どもに給ひて。和してたてまつり判せさせなどさせ
給へり。後の世に佛道ならせ給へるにや。この品のはちすの上におはしますなど
夢にも人の見たてまつりたるとかや。式部大輔永範夢に見たてまつりたるとて。詩
三首作りて給はせける中に。

漢月天にうるはしくしてことぐくなりといへ共。忘るゝとなかれ昔の尼文を
もてあそぶとを。

ま、前本作
申〇大殿とて、
據同上補

と作らせ給へりけるとて。和して奉らんとしける程におどろきにけり。夢のうちには
は都率の内院におはしますとおぼしかりきとぞ。和してたてまつれる文にはかゝれ
侍るなる。

藤の初花。

攝政前右大臣(三)とて近くおはしませしは。法性寺のおと(三)の太郎にぞおはし
ました。御母從二位源の信子と申しき。國信と申し、中納言のむすめにぞおはしま
すなる。このおとらの御名は基實とぞ申すとうけ給はりし。いづれの御時の例とか。
左衛門督などきこえさせ給しに。その後大納言右大臣などにならせ給へりき。折ふ
しあきわはざりけるにや大將にはならせ給はざりしかとよ。二條のみかど位につ
かせ給しに。父おとらのゆづりにて保元三年八月十六日關白になり給。御年十六と
ぞきこえ侍し。昔よりかくきびわにてなり給へる一人の人。これや始めにておはしま
すらん。から國に甘羅といひける人は十二にてぞ大臣になり給ける。世の人おさな
しとも申さゞりけり。人からによるべきとにこそ侍めれ。永暦元年八月十一日右大
臣にのぼり給。永萬元年六月みかど(三)の御位みこ(六)に譲り奉らせ給し日攝政に
ならせ給ふ。同二年七月廿六日御年二十四にてかくれさせ給にき。大臣のくらゐに
て十年おはしませしき。このおとら御みめもこえきよらにおはしませしき。又手なども

右、前本作左
しき、原作とぞ、
據ニ本改

きびわ、前本作
ひわく

がら、前本作補
〇右、前本作左
の御、據ニ本補

ら、前本作げ

の、據ニ本補

補の、は、並據同上
な、據前本補

る、原作リ、據
コ本前本補

昔の跡つぎまさせ給へりけり。いとめてたくきたてまつりしほどに。夢のやうに
てかくれさせ給にしいとかなくこそ。去年は二條のみかどことしはこの殿の御
事。折ふし心あらん人はおもひしりぬべき世なるべし。贈太政大臣正一位など後に
そへ奉られはべりとぞきこえ給ふ。きのふ今日のちごにおはしますを。昔がたりに
うけ給はるやうに覺えていとあはれにかなしく侍り。六條の攝政と申なるべし。
又中の攝政殿と申す人も侍り。太郎におはせしかども中關白と申し、様なるべ
し。この次の一人は今の攝政(藤)の^{おとと}にあはします。御母はこれも國信の中納
言の三の君にぞおはす^{なる}。御名は國子ときこえ給ふ。三位志給へるとぞ。一人の
藤氏の御はら多くは源氏におはします。然るべきとにぞ侍。宇治殿(藤)二條殿(藤)の
御はらは一條の左大臣(藤)の御むすめ(藤)。後の二條の關白殿(藤)は土御門の右の<sup>お
とと</sup>(藤)の御むすめ(藤)。法性寺殿(藤)は六條の右大臣(藤)。此の殿ふたところ(藤)は
源中納言(藤)の姫君ふたところ(藤)におはします。藤氏は一人の人にて源氏は御母
方やんどとなし。御ながれかた^くあまほしくも侍るかな。今の世の事新しく申
さても侍るべけれど。ことのつぎなれば申し侍るになん。このおとと(藤)永暦元年
八月十一日内大臣にならせ給ひて同月左大將^{左大將}かけさせ給き。同二年九月十三日左
大臣にのぼらせ給て。永萬二年七月二十七日攝政にならせ給ふ。御とし廿二におは

さしいらせ、前
本作まいらせ
も、據前本補

る、コ本元

しましき。やがて藤氏の長者にならせ給ひき。仁安三年二月當今(藤)位につかせ給し
に又攝政にならせ給ふ。いとやんどなくおはしましける御さかへなり。御兄の攝
政殿(藤)も宇治の左のおとと(藤)もその御子の大將殿(藤)も長者つぎ給ひてひさし
くおはします。一の人の御子なりとも大臣にこそならせ給ふとも。かならずしも
家のあつがせ給事かたきを。この御ほうにやをされさせ給ひけん。皆夢になりて
かくたちまちに攝政にならせたまひ藤氏の長者におはします。みかさの山の朝日は
かねててらさせ給ひけん。御身のさえおさなくよりすぐれておはしますとて。内宴
の詩なども兄をさしおき奉りてその席にさしいらせ給き。御心は^もあるべかし
くまだ若くおはしますに。公事をもよくおこなはせ給ふ。おとなしくおはしますな
り。閑院ほどなくつくりいださせ給て。上達部殿上人など詩つくり歌たてまつりな
どして。昔の一人の御有様にはいつしかおはします。心ある人いかにばかりかはほ
めたてまつるらん。みかどにかし奉らせ給て内裏になりなどし侍らんも。世の爲も
いとほしくしきとにこそ侍なれ。ゆく未思ひやられさせ給ひて。然るべきこと、
世の爲もたのもしくこそうけたまはれ。此の二人の攝政殿だち皆御子おはしますな
れば。藤なみのあとたえず佐保川のながれ久しかるべき御有様なるべし。

濱千鳥。

この近くおはしまし、入道おほきあとも(馳)。御心のいろめきておはしまし、かば。ときめき給かた、多くて。北の方(源)はきびしくものし給ひしかどもはらうに公達おほくおはしましき。奈良の僧正(源)。三井寺の大僧正(源)。このふたりはあところにおはしまさば今はお給へる上達部にておはすべきを。北の方の御はらにお君達もおはしまさて。女院(源)ばかりもちたてまつり給つるにつけても。大方もねたましき御心の深くおはしましけるにや。御房達のねさなくおはしまし、より。おとなまで近くもよせ申させたまはず。いなごなどいふ虫の心をすこしもたせ給はばよく侍らまし。后などはかの蟲のやうにねたむ心なければ。御子もうまごも多くいでき給ふところ申なれ。關白攝政の北の方も同じ事にこそおはすべかめれ。されど年よりてはおもほしなをしたりけるにや。君達ほかばらなれど殿の内にも多くおはしましき。源中納言の姫君だちふたり(源)に。ひとり(源)のは故攝政殿(源)。今ひとり(源)のには當時の殿(源)。又山に法印御房(源)とておはしましき。又奈良に僧都とておはします也。又女房の御はらに右のおほい殿(源)。三井寺のあや僧都のきみ。又三位中將殿(源)など申しておはしますなり。又山の法印(源)などきえたまふ。又未つかたに時めかせ給ひしはらにおはする。山の法眼など申してきこえ給。女きんだちは女院(源)中宮(源)などおはします。讃岐のみかど(源)の御時の中宮聖子と申す

なり、據前本補
○の段なる、據
コ本補
ハ、前本作

此條、見袋草子
三長明文字鎖上

ハ、前本作

か、前本作
太、前本元

は。北の政所(源)のひとりうみ奉らせたまへるぞかし。その御母は宗通の大納言の御むすめなり。顯季の修理のかみの御むすめ(源)の腹なるを法性寺殿に奉り給へりき。かの女院讃岐のみかど(源)位におはしまし父のおとも時の關白におはしまししかば宮の御方御あそび常にせさせ給ふ。ちりくにつけつ、昔おぼし出づるともいかにおほくはべらん。卯月のころみかど宮の御方に小弓の御あそびに。殿上人かたわかちてかけものなど出だされ侍りけるに。あふぎ紙をさう子のかたに作りて歌かきつけられたりけり。その歌は。

これを見て思ひも出てよ源千鳥あとなき跡を尋ねけりとは。
と侍りける。返し公行の宰相右中辨とておはせしぞしたまひける。

はま千鳥跡なき跡を思ひいで、尋ねけりともけふこそは知れ。
とぞうけ給はりし。歌は殿(源)のよませ給へるにや侍けん。拾遺抄にはべる小野宮の
あとの故事思ひいでられていとやさしくこそきこえ侍しか。

使あはせ。

かのみかど(源)位ありさせ給ひしかば皇太后宮(源)にわがらせ給へりき。近衛のみかどの御時も、母后(源)にて内に猶おはしましき。中宮と申し、時近衛のみかどの東宮におはしましに。ふた宮の女房だち常にきこえかはしておかしき事ども侍り

けるに。文のつかひいかなるものに侍りけるにか。わろしとてはじめは藏人を東宮よりやられたりければ。返事又少將爲通して送りたりけり。その返りごと東宮より公通の少將もちておはしたりけり。かやうにする程に左のおと(璽)中宮の女房の文もちてわたり給ひたるに。東宮の女房なげきになりて宮司などいかにせんずるとさまぐものなげきにしあへるに。傳の殿(璽)のおはしましたるはこの宮人におはしませば。ことつけにてこそあれなどいへどもからくしまけてわぶるほどに。關白殿(璽)われ使せんとしてふみかへせて中宮の御方にわたらせ給へるに。女房皆かくれて心得てさしいでねばとかくしてうちかけてかへらせ給ひぬ。中宮には又これにまさる使は院こそおはしませめとて。かゝる事こそさぶらへとて内の御使にやありけん。頭中將とて教長のきみ鳥羽院の六條におはしましゝに申されければ。いかにも侍るべきに。女房のとりつぎてせため侍れば。えなんし侍るまじきと申させ給などしてありときき侍りし。後にはいかになり侍けん。この女院始めつ方は上(璽)常におはしませてよる晝あそび(璽)せさせたまひけるに。末つ方には兵衛のすけなどいふ人いできてめづらしき折も多しおはしませしけるに。上(璽)ふと渡らせ給ひけるに。しばし短き御屏風のうへより御覽じければきさき(璽)十五かさなりたる白き御ぞたてまつりたる御袖口の。白浪たちたるやうに匂ひたりけるを。浪のよりたるを

せ、原作を、據コ本改

びせさせ、原作は、據コ本改補

き、前本元

見るやうなる御そでかなと仰せられければ。うらみぬ袖にもやといらへ申させ給けるとときこえ侍りし。うらみぬ袖も浪は立ちけりといふ古きことなにより侍るとかや。折ふしいとやさしく侍けることなどこそ傳へうけ給はりしか。ひがことにや侍りけん人の傳へ侍るとはしりがたくぞ。新院(璽)遠くおはしませしてのち。この女院は御ぐしおろさせ給てけりとなんきこえさせたまふ。同じ事と申ながらいとあはれに悲し。近衛のみかどの御時の中宮皇子と申しも。太政大臣伊通のおとこの御むすめを。この法性寺殿(璽)の御子とてぞたてまつり給へる。この頃九條院と申なるべし。まとの御子ならねど院號も關白の御子とてはべるとかや。この法性寺殿は。二條のみかどの御時も女御(璽)たてまつらせ給ひて中宮にたちたまひき。みかどかくれさせ給ひても。いまの新院(璽)くらゐの御時國母とてなをうちにおはしませしき。みかどかみかど位させ給し。かば里におはしませども猶中宮と申なるべし。御ぐしおろさせ給へるとかや。まだ御年廿三四などにやおはしませすらん。この頃ばかり上臈の入道(璽)宮院だちおほくおはします折はありがたくや侍らん。女院いつところおはします。おほみや(璽)中宮(璽)二所のきさきの宮。齋宮(璽)さい院(璽)などかたぐきこえさせ給ふ。かつはよのはかなきによらせ給。佛の道のひろまり給へるなるべし。

かざり太刀。

の、據前本補
齋宮、據コ本補

いまの、前本元

り、據ヨ本補

富家の入道おと(應)の御子は。法性寺のおほきおと(應)。次には宇治の左のおとど頼長ときこえ給へりし。女君は高陽院と申。泰子皇后宮ときこえたまひき。法性寺殿の一つ御はらの姉にておはしましき。長承三年三月のころ后にたち給ふ。御年四十ときこえき。保延五年院號をさせ給き。左のおと(應)御は、は土佐守盛實といひしがむすめにやおはしけん。その左のおと(應)は御みめもよくおはし。御身の才も廣き人になんきこえたまし。堀川の大納言(應)に前書とかきこゆるふみうけ傳へさせ給へりけり。そのふみは匡房の中納言より傳はりて。讀み傳へたる人かたく侍るなるをこの殿ぞ傳へさせ給へりける。今は師の傳へもたえたるにこそ侍るなれ。かやうにしてさまぐのふみどもよませたまひ。僧のよむふみも因明などいふふみ奈良の僧どもに尋ねさせ給ふとかやきこえき。笙の笛をぞ御あそびにはふかせ給ときこえ給し。御手か、せ給ふ事をぞわざとかきやつさせ給ひけるにや。兄の殿にいかにも劣らんずればなどおぼしたりけるを。法性寺殿(應)はわれは詩も作るやうに覺ゆるものを。さては詩をぞ作らるまじきなどぞ仰せられけるとかやきこえ侍し。法成寺すりせさせ給ふ。塔の焼けたる作らせ給ひてすがやかにいとめてたく侍き。日記などひろくたづねさせ給ひ。行はせ給ふことも古き事をあこし。上達部の着座とかし給はぬをも皆催しつけなどして。おほやけわたくしにつけて何事も

な、前本作と
ら、前本元

圓、ニ本作胤、以下同

いみじくきびしき人にぞおはせし。道にあふ人きびしくはぢがましきこと多くきこえき。公事おこなひ給ふにつけて。あそく參る人さはり申す人などをば家焼きこぼちなどせられけり。奈良に濟圓僧都ときこえし名僧の公請に障り申しければ京の宿房こぼちけるに。山に忠胤僧都ときこえしとたはぶれがたきにてみめ論じて。もろともにわれこそ鬼などいひつゝ歌よみかはしけるに。忠胤これをきゝて濟圓がいひつかはしける。

め、ニ本作ろ

まこと(前同)にや君がつかやをこぼつなる世にはまされること、め有りけり。
返し。

やぶられてたちまのぶべき方ぞなき君をぞ頼むかくれ簀かせ。

とぞきこえ侍りける。又女えんぜさせ給こともあらしくぞきこえ侍りける。いはひをなごいふ深き色好みとかや思はせ給ひけるに。よる俄におはしたりければ隠れて。思ひかけぬものうしろなどに有けるを。もりのり。つねのりなどいふ人どもしてもとめなどして。かくれのあやしの方まで見けれど。えもとめ得てかへり給ひて。又ひるあらぬさまにてかくわたらせ給へると侍りければ。このたびはいてあひ奉り。たいめしけるにも昔今の物語などして。ことうるはしくかへりいでさせ給にけり。ふたゝびながら世つかざりしなとぞいひけると人はかたり侍りし。この御童

え、前本作も

奉り、以下十五
字、前本元

名はあやぎみと申しけるに。富家殿(註)法性寺殿(註)。親子の~~中~~中後にこそたがはせ給へりしか。はじめは左のおと(註)御子にせさせ奉り給けるころ。かさり太刀もたせたてまつらせ給けるに。

代々をへて傳へてもたる飾り太刀のいしづきもせずあやおぼしめせ。

とよませ給へりける程にすゑには御心どもたがひて。この弟の左のおと(註)を院(註)とともひき給て。藤氏の長者をもとりてこれになしたてまつり給ふ。賀茂まうでなどは一の人こそおほくし給ふを。兄の殿(註)をおきてこの左のおほいどの(註)の賀茂もうでとて世のいとなみなるに。東三條などをとりかへして。かぎなどのなかりけるにやみくらのとわりなどし給ふとぞきこえ侍し。ふたりならびて内覽の宣旨などかうぶり給ひ隨身給はりなどし給ひき。かゝる程に鳥羽院うせさせ給ひて。讃岐の院(註)と左のおと(註)と御心おはせて。この院(註)のくらるにおはしましし時。白河の大炊御門殿にていくさし給ひしに。みかどの御まもりつよくて。左のおと(註)も馬にのりていで給ける程に。たれか射奉りたりけるにか矢にあたり給ひたりけるが。奈良ににげておはして程なくうせ給にき。その公だち右大將兼長ときこえたまひし。御母は師俊の中納言の御むすめなり。その大將殿は御みめこそいとよきよらかにあまりぞふとり給てやおはしきしけん。御心はへもいとつよくし

ぞ、原在など下、
據前本改

は、據コ本補
ぞ、前本元

陪從、前本此下
有ぞ字

ながれ、千載作
しづみ、
も、據コ本補

註、原作秋舞、
據コ本前本改

も、前本元

けんこそ、前
本作てんと

はしけり。つぎに中納言中將師長と申しは。みちのくの守信雅ときこえし御うまごにやおはすらん。その御弟は中將隆長と申しける。それも入道中納言(註)の御はらなるべし。皆ながされ給ひてうらくにおはせしに。中納言中將殿は歸りのぼり給ひて大納言になり大將などにおはすめり。身の御さえなどもおさなくよりよき人にておはしますときこえ給き。琵琶はすべて上手にておはしますとぞきこえ給。都わかれてとさの國へおはしけるに。これもりとかやいふ陪從・御おくりに参りける。道にて箏のこのえならぬ調べ傳へ給ふとて。そのふみの奥に歌よみ給へりけるこそあはれに悲しくうけ給はりしか。

をしへ置くかたみを深くしのはなん身は青海の波にながれぬ。

とかやぞき侍りし。青海はかのしらべの心なるべし。いと悲しくやさしくも侍けるとかな。もろこしにむかし嵯敷夜といひける人の琴のすぐれたるしらべを。此世ならぬ人に傳へ習ひてひとり知れりけるを。袁孝尼とかやいひけることひきの。あながちに習はんといひけれども。なひがしろに思ひてゆるさうりける程に。罪をかうぶりける時。このしらべのながくたえぬるとこそ悲しみ痛みけれ。このとのしらべを傳へ給ひけんことこそかしこくたのもしくもうけ給はりしか。琵琶こそすぐれ給へりときこえ給へりしか。箏のともかくきはめさせ給ひて御おぼち(註)の

い、前本作こ

た、前本此下有の字

なる、原作なり、今従前本、二本作ける

跡をつがせ給ふ。いとやさしくこそうけ給はり侍れ。かくて年へて後歸りのぼり給へるに。二條のみかど琵琶をこのませ給てめしければ。參らせ給ひて賀王恩といふ樂をぞひき給ひけると傳へうけたまはる。さてもとのかずの外の大納言にくはり給ひて。うちつゞき大將かけ給へるなるべし。その外の公だちは皆うらづにてかくれ給ひにけり。いと悲しくいかにあはれに主も人もおぼしけん。この奈良におはせし禪師の君(璣)も還りのぼり給ひて後うせ給ひにけり。たゞごとくも覺え給はぬ御有様なり。この左のおと(璣)は近衛の帝の御とき女御たてまつり給へりき。おほいのみかどの右大臣公能のおと(璣)の三君を御子にし給てたてまつり給ひて皇

こけのころも。

後の二條(璣)殿の御子には。富家の入道おほきおと(璣)。その御弟にて宰相中將家政。少納言家隆とておはしき。たじまのかみ良綱といひしがむすめのはらにおはす。その宰相の御心ばえのきはだかにおはしけるにや。三條のあく宰相とぞ人は申し侍りし。その御子には。あきたかの中納言のむすめのはらにおはせしまさのりの中納

り、原作る、據前本改

ふ、原作ま、據前本コ本改

なん、據前本補
○う、前本元
して、據前本補

に、據前本補

言と申し。身の御さえひろくおはしけり。つかさをもかへしたてまつり給て。かしらおろして高野におはすとまき侍りし。その御子にて少將ふたり(璣)おはすなる。前の美作守顯能ときこえしがむすめのはらにやあはすらん。弟の少將きんふさときこえ給ふ。二條のみかどかくれさせ給ひて世をはかなくおもほしとりて。高野山にのぼりてかしらおろしてすみ給ふなれば。御ちやの中納言(璣)もそれにひかれて深き山にもすみたまへるなるべし。昔こそ若き近衛のすけなど世をのがれて山にすみ給ふとはふるき物語にもきこえ侍れ。まさにこれこそあはれに悲しく。花山の僧正(璣)の深草の御時藏人頭にておはしけるが。よるひるなんつかうまつりて。諒闇になりなければかなしびにたへずして。御ぐしおろし給てこけの衣かはきがたく。入道中納言(璣)。後一條院の御忌にみかどをこひ奉りて世をそむきて深き山にすみ給けんにも。おくれぬあはれさにこそきこえ給ふめれ。昔はいかばかりかはかやうの人きこえ給し。九條殿の御子高光少將。はじめは横河にすみ給て。たゞかばかりぞ枝にのこれるなどいふ御歌きこえ侍き。後には多武峯におはしき。又少將時叙ときこえ給し源氏の。一條のおと(璣)の御子大原の御室などきこえてやんごとなき眞言師におはしき。又村上の兵部卿致平のみこの成信の中將。又堀河關白(璣)のうまごにやあはしけん。重家の少將とて左大臣(璣)のひとり子におはせし。もろとも佛道

させ、據前本補
○祚、原作祚、
據前本改、コ本
作雅、下同

に一つ御心に契り申させ給て。三井寺の慶祚あざりの室におはして世をそむきな
んとのたまひければ。名高くおはする君だちにおはするにびんなく侍りなんとい
なひ申けれど。かねて御ぐしをきりておはしければ。慶祚阿闍梨ゆるしきこえてけ
り。てる中將(補)ひかる少將(補)など申けるとかや。中將(補)は廿三。今ひとり(補)は廿
五におはしけるとかや。行成大納言の御夢に重家の消息とて。世をそむきなんとい
ふことのたまへりけるを。御堂のおと(補)の御もとにおはしあひて。かゝる夢こそ
見侍りつれと語りきこえ給ければ。少將うち笑ひて。まさしき御夢に侍り。しか思な
どのたまはせける。次の夜寺の大阿闍梨房へおはしたりけるとなん。年ごろの御心
ざしの上に。時の一の人のわづらひ給ふだに人もたゆむこと多く。世のたのみなき
やうに覺えたまふとの心ほそくおぼえ給へて。さばかりおしかるべき君だちの。そ
の御年のほどにおもほしとり行ひすまし給へりし。おはれなどいふもともよろしか
りしとぞかし。このことを又人の申し侍りしは。齊信公任俊賢行成ときこえ給し大
納言だち。陣の座にて世のさだめなどしたまひけるを立ちぎき給て。位高くのぼら
んと思ふは身の耻をしらぬにこそありけれ。かやうに後の世をぞ思ひとるべかりけ
るなど思ひていてたまひける夜。重家の少將御親の大巨殿(補)にいとま申し給ける
を。大方おぼしとめらるべきけしきもなかりければ。えといめ給はざりけるとも

り、原作る、據
前本改

おぼし、據前本
補○めら、前本
作ま

きこえ侍りき。行成大納言の御日記にはさきに申しつるやうにぞ侍なる。これはこ
と人のかたりはべりしなり。四條大納言公任の御歌など侍りしかとよ。御集などに
は見え侍らん。又いひむろの入道中納言(補)の御子成房の中將の君も。おやの中納言
の同じ深き谷に入り居つゝ室ならべて行ひ給しぞかし。義懐の中納言。惟成の辨。
このふたりは花山院のありかしらおろし給へりき。四條の大納言(補)の御歌。辨のだ
いとこのもとに。
(おぼし)
さゝ浪やしがの浦風いかばかり心の内のすゞしかるらん。
ときこえ侍し。昔こそさかりなる人のかやうなるはきこえ給しか。近き世にはかゝ
る人もきこえたまはぬを。この公房の少將ころおはれに悲しくきこえたまへ。

花の山。

大殿(補)のをのこ公だちは。後の二條殿(補)のつぎに。花山院の左のおと家忠とて
大臣の大將にて久しく一のかみにておはしき。その御母は美濃守頼國ときこえし。
源氏のむすめの腹におはす。このおとと關白にもなり給ふべき人におはすれど。御
兄の二條殿の御子富家の入道おと(補)の。大殿(補)のうまごにおはする上に。御子
にしたてまつり給て關白つぎ給へれば。大殿のおはしまし、代よりふけ殿をたのみ
にしておれと仰せられおきてさせ給へりければ。何ごとも申しおはせつゝすぎ給

へり、據前本補

へりけるに。富家殿關白になり給ひて大將のき給へりけるを。白河院の御おぼえにて宗通大納言なるべしときこえければ。このおとゝ富家殿にいかゞしはべるべきと申しおはせ給ひければ。いかにも力をよばぬ事にこそあめれ。さるにてももし少しのつまともやなると中宮(璣)に心ざしを見え申し給へ。この家にいとなきとなれどなど侍ければ。まことにしか侍る事として申いれ給へりければ。思ひかけぬ御心ざしなどきこえ給けるほどに。白河院宗忠のおとゝ頭辨におはしけるとき。きとまいれと侍りければ。おそくやおぼしめすらんと恐れ、おぼしけれど。いと心よき御けしきに。堀河のみかど位おはしまし、時内へ参りて申せとて。大將あきて侍るに宗通をなし侍らんと思ひ給ふなり。おさなくよりおぼしたて侍りてさりがたく思ふあまりになんなど奏せよと侍りければ。わづらはしきとにかゝりぬと思ひながら参り給へりけるに。内は御笛吹かせ給てきこしめしも入れざりけるを。ひまうかいひてかく奏し給ひければ。御返事もなくてなを笛ふかせたまひていらせ給ひけるを。いそぎて御返事申せと侍りつる物と思ひておどろかし申されければ。いでさせ給ひて。いかにも御はからひにこそ侍らめ。かく仰せつかはすべしとも思ふたまへ侍らず。かゝるおぼせ侍ればおそれながら申侍になん。昔うけたまはり侍りしおぼせに。世のまつりとは司召にあるべき。しかあれば大臣大將などより始

を、據ニ本補

御、據ニ本補

侍、ニ本元

はいはん、ニ本作はいむ

はら、前本此上有御字

人以下九字、據前本補

めて。朝負あそひのまつりごとまで。人の耳おどろくばかりのつかさをば。よくためらひて世の人のいはんを聞くべきことうけたまはり侍りしより。いとかしこきおぼせなりと心の底に思ひ給へてなんまかりすぎ侍る。この大將のことはしかるべきにとりて。家忠こそ關白の子にて侍る上に位も上臈に侍るをこえ侍らんや。いかゞと思ひたまふるに。下臈なりとも身の才などすぐれ侍らば。そのかたともおぼえ侍るべきに。それもまさりたることも侍らず。いかにも御はからひに侍るべしと申せとの給はせければ。歸り参られ侍りけるに。いそぎ問はせ給ひけるに。かくと申しければ院(通)きかせ給ひて。しばし候らへとて重ねてめして。えもいはずのたまはするものかな。まことにことわりとして。家忠おぼせ下すべきよし侍てぞこのおとゝ大將にはなり給ひける。このおとゝの御子は中納言忠宗と申しき。その中納言は播磨守定綱ときこえしむすめの。はらにおはしき。中納言いとよき人にぞおはせし。雅兼の中納言とならび給て五位藏人十年ばかり。藏人頭にても十年などやおはしけん。二十年の職事にてふたりながら同じやうに仕へたまひしに。昔にもはぢず末の世にはありがたき職事として惜まれ給ほどに。なか／＼おそくのぼりたまふとぞいたみ給ひける。宰相中納言まで同じやうにならびてのぼり給き。忠宗の中納言は中宮権太夫ときこえ給き。その中納言の御子は修理のかみ家保ときこえし。人のむすめのよきを。

將、コ本作納言
御、據前本補、下
同
せし、前本作せさ
補、據コ本前本
は、據同上補
お、據コ本補○
同上改

はらにおはするきんだち。花山院のおほきおと忠雅又中納言忠親など申して。おやの御子なればよきかんだちめだちにぞおはするときこえ給。忠親の中納言。これも親だちのおはせしやうに。雅兼の子の雅頼の中納言と藏人頭にならびて。宰相中納言にもおなじやうにうちついきのぼり給ふなるもいとかひくしく。忠雅のおととは三位中將大臣大將などへたまひておほきおとまでいたり給へり。その御子におはするなる兼雅の中納言は。家成の中納言の御むすめの腹にやおはすらん。それも三位の中將などときこえ給。中宮權太夫(聖)の御兄にてはりまのすけ忠兼といふ人もおはしけり。弟の中納言(聖)の上達部になり給てのち。親のおほいどの(聖)大將をたてまつりて。少將にはじめてなし申したまひけるとかや。その少將(聖)の子に光家とかきこえ給けるを。大臣殿(聖)の御子にし給ひて殿上したまへけり。侍従におはしけるをばかのご侍従とぞ人へ申ける。親はかくれて子のあはれたるとかや。なるべし。そのおやの少將は子より後に殿上もし給けるとかや。おほいどの(聖)の三郎にては。按察の大納言經實と申ておはしき。二位大納言とぞ申し。二位宰相など申しつたりけるとぞ。その御母は美濃守基貞のむすめなり。その大納言の御むすめ(聖)。公實の春宮太夫のおほいぎみのはらにおはせしを。院(聖)の宮とておはしましに参り給て。二條のみかどをうみ奉りてかくれ給にき。后を^おくられ給き。

給、前本此下有
へる二字

母、原作はら、
據コ本前本改

ちゝの大納言殿はおほきおと^おくられ給へるとぞ。その皇后(聖)のひとつ御はらにおはすなり。この頃は經宗の左のおとときこえ給ふ。二條院の御おぢにておはせし上に。人がらもはかしくおはするにや。よき上達部とぞきこえたまふめる。おやの大納言殿(聖)も兄の中納言殿(聖)も。物などかき給ふとおはせずときこえしに。これはふみにもたづさはり給へるとぞきこえ給ふ。御子に中將のきみおはする。清隆の中納言のむすめのはらにやおはすらん。この大臣殿の御兄ども多くおはするなるべし。經定の中納言は治部卿通俊のむすめのはらにおはしけるとぞきこえし。その次に光忠の中納言ときこえ給ふも。左のおとこの御兄におはするなるべし。二條のおほきさいの宮(聖)の女房の御子におはせしを。かの宮の養はせ給ひてはるわか君と聞えし。この頃は前中納言民部卿になり給・とかや。あぜちの大納言(聖)の御子は。多くおはしけるとぞきこえし。おほ侍従などいひてもおはしき。仁和寺に静經僧都ときこえたまひしは。よき眞言師にてしるしある人とぞきこえ給し。おほと(聖)の四郎にやあたり給けん。按察のひとつばらに能實の大納言と申し。小野の宮とぞきこえ給し。あにの殿よりも^{女子}などかきたまひしにや。檢非違使の別當などし給き。大殿の五郎にやおはしけん。忠教の大納言。四條の民部卿とぞきこえ給し。その御母遠江守永信が子に。藏人ありてつかさなかりしにや。永業ときこえし人

のむすめのはらにおはす。その民部卿の御子どもあまたおはしき。忠基の中納言と申し、筑紫の帥になり給へりしかとよ。神樂の笛をぞよくふき給けるとうけたまはりし。その御子に六角の宰相家通と申すなるは。重通のあぜちの大納言の養ひ申し給ひけるとぞきこえ給ふ。

みづぐき。

四條の民部卿(註)の御子は。又俊明の大納言のむすめのはらに宰相中將教長ときこえ給し。のちには左京のかみになりてさぬきの院(註)のこといもおはしましに。かしらあろし給ひて常陸の國の浮島とかやに流され給へりし。歸りのぼり給て高野にすみ給となんきこえ給ふ。和歌の道にすぐれておはするなるべし。手かきにもおはすとぞ。ところくゝの額などもかき給ふなり。又御堂の色紙がたなどもかき給ふとぞきこゆる。佐理の兵部卿しんのやうをぞ好みてかき給ふときこゆる。かつは法性寺のおと(註)の御筋なるべし。花園のおと(註)のもさやうの筋にかゝせ給ふとぞ聞えさせ給ひし。宇治の左のおと(註)のともたか。教長。いづれかまさりたるとときたゝときこえし人にとひ給はせければ。定めきこえんもよしなくて。とりどりによく書き侍るとぞ答へ申してしとさだのぶの君人にかたられけるを。たびたびとはせ給けるにや申きられにけりともきこえ侍り。はだへと骨とにたとへた

國の、據前本補
○歸り、據前本補
前本補
なん、據前本補
とぞ、前本元

ときたゝ、前本
作きた大夫、前本
當作さだのぶ、前本
きこえん、前本
作さぶらはん、前本
と、據前本補

め、コ本前本元
也、前本作めり
○な、前本元
かき、前本元

前本旁書云件經
南都禪定院在之
今東金堂御塔
在之○奉り、據
前本補

たぢの、前本作か

るとかやその入道(註)は人にかたられける。朝隆の中納言は行成の大納言の消息ゆゆしくうつしにせられたるとぞきこえ侍るめる。その消息もたぬ人なし世に多く侍る也。教長の御手もさまく、京るなかつたはり侍なり。宮内大輔(註)もひじりのすすむるふみ何かとすぐさずかきひろめ侍けり。いかに本多く侍らん。道風のぬしのいまずかりける世にこそひとくたりもたぬ人はおぼに思ひ侍けれ。宮内大輔(註)は大納言(註)のするなればよくにらるべきにて侍れど。一つの様を傳へられたるにや。常に見ゆるやうにはかはりてぞ侍りける。おぼぢのすさかの治部卿(註)の御手にぞよく似て侍なる。その定信の君は一切經を一筆にかき奉りたまへる。たゞ人ともおぼえ給はず世になきとにこそ侍めれ。五部の大乘經などだにありがたく侍るに。いとたうときちざりむすび給へる人なるべし。教長の御わらは名は文珠君と聞えき。殿上人におはせしにも道心おはして。おとこながらひじりにおはすとときこえ給しかば。いかばかりたうとくおはすらん。その御弟にて賀茂ばらの公だち(註)あまたおはすとときこえたまふ。その御母こそ歌よみにおはせしか。おぼぢ(註)の名高き歌よみなりしかばなるべし。いとやさしくこそ。月やむかしのかたみなるらんとよみ給へるぞかし。撰集には有教が母とていり侍へり。奈良仁和寺山などに僧きんだちも多くおはすとぞきこえ給ふ。民部卿(註)の次に宮内卿(註)ときこえ給ひし。か

んだちめにもならてやみたまひにき。

ふるさとの花のいろ。

おほと(舞)の僧公達には。山には理智房の座主(舞)と申して。おと(男)こぎみ(公)だち(理)より
[は]兄におはしけるなるべし。奈良には覺信大僧正。三井寺には白河の僧正増智と
て讃岐のみかど(舞)の護持僧におはしき。忠教の大納言のひとつ腹とぞきこえ給。
徳大寺の法眼(舞)と申し。は花山院の左のおと(舞)のひとつ腹におはす。心のきこ
給へるにや。法金剛院の石たてなどにめされて参り給けるとかや。梵字などもよく
かき給とぞきこえ給し。奈良に立覺僧正と申し。もおはしき。うせ給しほどに仁和
寺の寛運とかいひし人(舞)みずほう(法)の賞に僧都になりし。いかなりしことにかたれが
御つかひとかやとて。日ごと(舞)にみてくら奉らるゝことありときこしめしたりけると
かや。二條殿の御時にも範俊とかやきこえし鳥羽の僧正林の中にし(舞)びてたてら
れたる。丈六の明王の御堂にてみずほうをこなはせ給給などきこえ侍し。これらよ
しなきとに侍り。山の座主行立大僧正ときこえ給しはやんどなき真言師にて。と
ばの院佛のとくにおもほし給ときこえき。三昧のあざり良祐といひしやんどなき
真言師にこまかにつたへならひ給て。心ばへふるまひありがたく。僧のあらまほ
しきさまにて。さる人またいできがたくなんおはしける。尊勝陀羅尼の御導師にお

は、據前本補
増智、前本無
に、前本無

ける以下十五
字、前本無

正、前本作都
せ給な、原作
な、今從コ本、
前本無字

補に、據コ本前本

給、前本此下有
へり二字
な、コ本無
廿四以下至より
○御以下十八
とて、前本無
○な、前本無
うら、前本無
本、作、前本無
お、は、前本無
お、は、前本無
に、前本無
前、本、作、前本無
け、る、前本無
有、へ、り、前本無
本、補、前本無
な、ま、前本無
な、ま、前本無
ふ、前、本、作
○、前、本、改
○、前、本、改

はしけるに。日ぐらしあるとなれば僧膳などいふともあり。又おのづからた立給と
などありけるに。御おあふぎのうへに五結をきて。わが御かはりにとめ給。けるなど
をも。いと心にくよしありてめもあやにぞ思ひあへりける。鳥羽院御ぐしおろさ
せ給し年にや侍けん。七月ばかりより御わらはやみ大事におはしまして月比わづ
らはせ給しに。さま、の御いのりせさせ給はぬ事なく。かた、より御いのりし
つゝたてまつりたまふ。げんざとて三井寺の覺宗などいふ僧たち。うちかはりつゝ
参りて、おこたらせ給はてあさましくきこえはべしに。げんざなどし給さまには
あはせねど。この座主のまいり給ていのり奉り給けるにこそ。かひ、しくおこた
らせ給。け「は」。また後にも程へておこらせ給へりけるにも。たひ、やめたて
まつり給。けるとこそきこえ侍しか。かやうのげんざには山伏をのみたのもしきも
のに、この世に思ひあへるに。まとしきことはこのたびぞ見を侍ける。山しなでらの
尋範僧正と申ぞひとりのこり給てこのごろおはする。それはもろかたの辨のむす
めの腹にや。奈良にはきよき僧もかたきを。いとたうとき人にぞおはしますめる。和
歌こそよくよみ給「な」めれときこえ侍しか。
(千載雜中)
やどもやと花も昔に匂へどもぬしなき色はさびしかりけり。
とよみ給ふ。とばもいひなれすがたもよみすまされ侍り。近院の大臣(舞)の河原院

にてよみたまへるうた。

(古今成語) うちつけにさびしくもあるかもみぢばの主なき宿は色なかりけり。

といふ御うたの心なるものから。よみかへられていとやさしくきこえ侍。又範永が月のひかりもさびしかりけりといふ歌の心なれどもるれにかはりて侍り。おなじ御はらのあににて寺の仁證法印とてもおはしき。猶僧ぎみだちはあら法眼など申すもおはしき。又てらに法印など申も。大方おとこぎみ十五六人ばかりやおはしましけん。

ら、原作う、今
従コ本、前本與
此同

今鏡第六

ぶちなみの下

あはせのうた

鷹司殿(瑞)の御はらの公だちの御ながれ皆申し侍ぬ。高松(瑞)の御はらの堀河の右大臣よりむねのおとこを關白にはなりたまはざりかども。女御(聖)たてまつりなどし給ひ。すゑのきむだちも近くまで位高くおはするあまたきこえたまひしか。このおとこ御堂(聖)の第二の御子におはす。御は、は西宮の左大臣高明のおとこの

は、據コ本補

四、補任作五

給き、此下恐脱
御年六十八同八
年かくれ給云々
十餘字
申、據コ本補

御むすめ也。永承二年八月一日内大臣になり給ふ。御年五十四。大將もとのまゝにか
け給ひき。康平三年(七月十七日)に右大臣になり給き。御年七十三ときこえき。和歌の道むかし
にはぢずおはしき。歌よみは貫之。かねもり。堀河のおほい殿(聖)。千載の一遇とかや
ある人申侍けると申いだしたる。人はえき侍らず。御集にもすぐれたる歌おほく
きこえ撰集にもあまたいり給へり。いたく人の口ならし侍る御哥は。花紅葉七夕千
鳥など數しらすきこえ侍るめり。中にも戀の歌はいたく人の口ずさびにもし侍る
多くよみ給へりき。(後拾遺)戀はうらなきなどよみ給へるぞかし。この御歌のさまはめづら
しき心をさきにし給へるなるべし。帥のうちのおとこ(聖)の御むすめの腹に君だち
あまたおはしき。後朱雀院の御時女御に奉り給へりし。麗景殿の女御(聖)と申なるべ
し。帝かくれさせ給ひて後里にまかりいて給へりけるに。うへをき給へりける萩
を。またの年の秋人のありて侍けるを見給ひてよみ給ひける。
(後拾遺) こそよりも色こそ濃けれ萩の花涙の雨のかゝる秋には。

その女御のうみ奉り給へりける姫宮(聖)賀茂のいつきときこえ給ひき。この宮合
あはせし給しに。卯の花さける玉川の里と相模がよめるは名高き歌にはべるなり。
三の君(聖)は後三條院の東宮と申し、時御息所にまいらたまへり。このおとこの太
郎にては兼頼中納言おはしき。御は、は女御のひとつ御はら(聖)なり。いとすゑの

の、據コ本補
は、據コ本補

大食調云々、宜
参考古事談六

う、コ本作、

の、據コ本補
下有か字

はかくしきもあはせぬなるべし。次には右大臣俊家のおとと。大宮の右のおとと
 ときこえ給ひき。この御末多(中御門又松本)くさかへさせ給めり。その御子は宗俊の大納言。御母
 は宇治大納言隆國の女なり。管絃の道すぐれてあはしける。時光といふ笙の笛ふき
 に習ひ給ひけるに。大食調の入調をいまくとて年經へてあしへ申さけりける程に。
 雨かぎりなくふりてくらやみしげかりける夜いできて。今宵かのも教へたてま
 つらんと申しければ。歎びてとくと給ひけるを。殿(時光)のうちにうしなどとりよせてあ
 人もはべらん。大極殿へわたらせ給へといひければ。さらにうしなどとりよせてあ
 はしけるに。御供には人侍らてありなん。時光ひとりとて簀笠(時光)きてなん有ける。大
 極殿におはしたるに。猶おぼつかなく侍りとて。ついまつとりて更に火ともして見
 ければ。柱に簀きたる者のたちそひたる有けり。かれはたれぞととひければ。武能と
 なのりければ。さればこそとて。その夜は教へ申さて歸りにけりと申す人もありき。
 又かばかり心ざし有りとして教へけりともしきこえ侍りき。それはひがごとくや侍り
 けん。かの武能もその道の上手なりけるに。たれにかあはしけん。一の人(武能)たれに。
 習ひたるぞと問はせ給ひければ。道のものにもあらぬ法師とか。能く習ひたるも
 のありけるになん傳へてはべるなど申しければ。猶時光が弟子になるべきことあは
 せうけ給はりて。みやうぶかきてかれが家にいたりて。それがし参りたりといはせ

ふ、コ本作な

ければ。いどみて年ごろかやうにも見えぬものとしてあどろきてよびいれければ。時
 光ははなちてにふえつくるひて居たりけるに。武能庭にゐてのぼらざりければ。袖
 のはたをひきてのぼせていかにと問ひければ。殿のおほせにて御弟子に参りたるな
 りといへば。いと心ゆきて。何をか習ひ給ふべきといふに。大食調(武能)の入調なんまだ
 知らぬものにてうけ給はらんと思ひたまふるといふにけしきかはりて。太郎子に
 侍りける公里が前なりけるを。このわらはに教へ侍りてのちにこそこと人には授け
 たてまつらめ。これは忽におぼしよるまじき事といひければ。この君傳へられんこ
 とたちまちの事にあらじとてみやうぶとりかへして。歸りいで、年へける後心ふ
 かくうかひひてきかんとするなりけり。昔の物の師はかくなん心ふかくてたはや
 すくも授けざりける。その大納言(時光)はさやうに道をたしなみてやんどなくなん
 おはしける。

から人のあそび。

按察(時光)の御子にて備中守實綱といひしはかせのむすめの腹に。右大臣宗忠のおと
 ど。また堀河の左のおとと(時光)の御むすめのはらに。太政のおとと宗輔など近くまで
 おはしき。右のおとと(時光)は中御門のおとととて催馬樂の上手におはして。御あそび
 などにはつねに拍子とり給ひけり。才學おはして尙齒會とて年老いたる時の詩作

りのなしたりあつまりて。文作ることおこなひ給き。から國にては白樂天ぞ序かき
たまひて行ひ給ひけり。この國にはこれ加へて三たびになりけり。からくに
ふたゝびまでまさりたるとにきこえ侍しに。近くわたりたるから人の又後に行ひた
る。もてわたりたりけるとぞ聞き侍し。年のおいたるを上臈にて庭に居ならびて詩
つくりなど遊ぶ事にぞ侍るなる。このたびは諸陵頭爲康といふ翁一の座にて。その
次にこのおと(蝶)大納言とておはしけんいとやさしく侍りし。藏人頭より始め
て。殿上人垣下してから人の遊びのとくこの世の事とも見えざりけり。弟の宗輔の
おほきおといは笛をぞきはめ給ける。あまり心ばへふるめきて。この世の人にはた
がひ給へりけり。菊や牡丹などめでたく大きに作り立て、好みもち。院にも奉りな
どして。ことこの世の用事などいと申し給ふとなかりけり。あまり足ぞはやくお
はすとて御供の人もおひつき申さへりけり。思ひかけぬことには。蜂といひて人
さす蟲をなん好みかひ給ける。かうなる紙などに蜜ぬりてさへげてありき給へば。
いくらともなく飛びきて遊びけれど。大方つゆさし奉るとせざりけり。あしたか。つ
のみじか。はねまだらなどいふ名つけて呼ばれければ。めしに従ひて聞きまはりてな
ん來つゝむれるける。うへなどいふ人もいと定め給はざりけるにや。おさなきめの
わらはべをぞあまた御ふところには伏せておはしける。知り給ところより何もて

に、據コ本補
宗輔愛蜂事、見
古事談一
る、古本作り

世、コ本元

わ、原作さ、據
コ本改

くらんとも知り給はて。あづかりたるものなど取りいづることあれば。こはいづく
なりつるぞなどいひて世に喜びたまひけりとぞ。おや(蝶)は大臣にもなり給はざり
しかども。この二人はたかくいたり給へりき。中御門の右のおと(宗忠)の御子は宗
能の内大臣ときこえ給。美濃守行房の女の腹にやおはすらん。大臣も辭し給ひて御
くしおろしてまたおはすとぞうけたまはる。おとなしき人だにこの世にはおはせ
ず。いかなるにかわかき人のみ上達部にもおはする世に。やとせにあやまり給ひぬ
らんひとり残りたまへるとぞ。宰相中將など申し、程直衣ゆるされておはしける
とかや。讃岐のみかど(蝶)の御時。御身したしき上達部にもおはせぬにおもひかけず
などきこえき。わきの關白かなとあざける人などもおはしけるとかや。大方は事に
明らかにはかゝしくおはして。御さかしらなどもしたまへばなるべし。やすきと
なれどもおさなくおはしますみかどなど。常には五節の帳臺の心みなどにいでさ
せ給ふとまれなるに。讃岐のみかどおとなにならせ給ひてはじめていでさせ給ひし
に。御指貫はなにの紋といふとも。おさめどのくから人おぼつかなくおもへるに。
あられぢにくわんの紋ぞかしなど藏人頭におはせし時の給ひなどして。さやうの
と明らかにおはしき。みかどの御指貫たてまつるとはひととせに唯ひと度ぞおはし
ませば。おぼつかなく思へるもことほりなるべし。このおと(蝶)もさいはら(蝶)の上手

におはして御聲めてたくおはすとぞ。ろの御子は贈左大臣長實の御むすめのはらに。中納言(經)とておはすとぞ。右のおと(經)の御子は宗成の左大辨の宰相とておはしき。又刑部少輔宗重とて琵琶ひき給ふ人ぞおはしける。なにとの侍りけるにかよる河原にてはかなくなり給にけり。いかなるかたきをもち給へりけるにか。また山科寺に覺靜僧都と申しも皆同じ御はらなるべし。その僧都こそすぐれたる智者におはすとつけ給はりしか。のりもよくとき給とて。鳥羽院などにも御講つとめ給ひき。宗輔のおほきちともの御子は前中納言兵部卿(經)と申すとかや。ふえもあやの殿ばかりはおはせずやあらんふきたまふとぞ申める。大宮の右のおと(經)の公達あまたおはしき。宰相中將師兼と申し。その御子に少將おはしき。宰相の弟に基俊の前左衛門佐と申し。は。下野守順業ときこえしむすめの腹にやおはしけん。その左衛門佐はうたよみ詩つくりにておはすとときこえ侍しか。さばかりの人の五位にてやみ給ひしこそくちおしく。餘りすぐれて人に似ぬ事などのけにや有けん。いはもる清水いくむすびしつなどよみ給へるぞかし。九十ばかりまでおはしき。七の翁にも入りたまへりけるとぞきこえ侍りし。山の座主寛慶ときこえしも大宮のおと(經)の御子とぞきこえし。大乘坊とかや申けん。

たびねのとこ。

九十ばかり、康治元年正月卒、康治元年二月五日

の人、據コ本補の、を、並據コ本補

すゑの子にやおはしけむ。大納言宗通の民部卿と申し、こそ大宮どの(經)の御子にはむねと時めき給しか。すゑもひろくさかへ給へり。白河院の御おぼえ(經)の人におはしき。あこまろ(經)の大納言とぞきこえ侍りし。歌(經)もあかしくよみ給けるにこそ。行尊僧正のよるしてとこわすれ侍りけるをつかはすとてよみ給ふこそ。いとむかしの心ちして。

草枕(金葉)さこそかりねのとこならめけさしもをきて歸るべしやは。

返しはあとりたりけるにやえき侍らざりき。その公達は顯季の三位のむすめの腹に多くおはしき。信通宰相中將と申し。笛の上手にておはしけり。これは世の覺えおはすとときこえ給き。白河殿の殿上人にも(經)の装束せさせて御覽じけるに。しげめゆひの水干きてやなぐひをひ給へりけるこそしなすぐれておはしけるにや。こゝと人はとも人の様にて。この君こそあるじなどいはむやうにおはしけると人の申し、ひがことにや。わらはやみしてうせ給ひにけりとぞき侍し。いと人の死なぬやまひにこそつねはき侍るに。大方はこの末の御ものけこはくおはするにや。民部卿(經)のうせ給ひけるほどにも。家正(經)がありつるはまだあるかなどの給はせければ。さも待らず。はかなくなりて年へ給にし者の。いかてか侍らんなど人申ければ。うやかきてまさしくありつるものをとの給けるは。その家正といふが親のゆづ

つれ、コ本此下有に字

りたる所をとり給ひけるをからく思ひけるほどに。よせ文を奉れあづけんなど侍り
 ければ。喜びて奉りければあづからざりけるとぞ聞きはべりし。家正とはさねしげ
 とて式部太夫とかきこゆるがあぢになんきこえし。故宰相(醍醐)うせ給ひけるにも。
 卿殿(醍醐)おはしまさねば候はんとしてなんと。いひていできたりけるとかや。さてその
 所はむすめ尋ねいだしてかへさるなときこえ侍りし。後いか侍りけん。これなら
 ず大宮のおほいどの(醍醐)のものけなといふ者も侍るが。年おいたりける僧のしる
 所侍りけるを。ろれもさまたげ給ければ。まいりて中門の廊につとめてより日た
 るまで居たりけれど。家人も御けしきにやよりけん申しもつがざりけるを。民部卿
(醍醐)おさなくてうつくしきわか君の遊びありき給ふに。この僧のいとあしくつく
 づくとをりければ。とぶらひてわれ申さんとて殿に申給ければ。ひといだしてとは
 せ給けるに。しかくの所のことうたへ申し侍るなど申しければ。その由あること
 などこまかにいひいだし給へりけるを。ことばりの侍らんはとかく申すべくも侍ら
 ず。年ごろをしるべくてこそ久しくもしり侍らめ。何かは申べからず。命のたえ侍
 りなむずるとのかなしくと申しければ。いはれのあればとてかなひ侍らざりけれ
 ば。いかにも命たえ侍りなんとす。たゞし若君をばなさけおはしませばまぼり奉ら
 んと申しけれど。それもものけにいでけるを。まもらんといひしはなどありけれ

う、原作は、
コ本改 據

ど、原作は、
コ本改 據

ば。さ申し契り思ふたまふればまもり奉つるに。その御ゆかりとおもふによりてお
 のづから参りよるなりとぞ云ひける。宰相中將(醍醐)の公だちは基隆三位のむすめの
 腹に行通中將ときこえ給しつかさも辭し給へりし。ほうし(醍醐)になりておはすることぞ。
 ことばらの今一人おはするとかや。ふたりながらいよの入道とぞきこえ給ひし。思
 ひかけぬやうなる御名なるべし。

ゆみのね。

そのむねみちの大納言の次郎におはせし太政大臣伊通のおとゝおはしき。詩などつ
 くり給ふかたいとよくおはしけり。手もよくかきたまひけり。よき上達部とておは
 しけるに。あまりいちはやくて世のものいひにてぞおはしける。こもり給へり
 しおりも御幸など見給ては。百太夫變じて百殿上人になりけりなどのたまひ。又
 こもりたるは苦しからねど。世にまじろはまほしきことは。人のいたくえぼしの
 しり高くあげたるに。うなじのくぼにゆひていでんとおもふなりなど。世に似ぬや
 うにのたまひけり。また信頼右衛門督(醍醐)むさおとしてのち。除目をおこなへりし見給
 ては。など井は司もならぬにかあらん。井こそ人は多く殺したれなど。かやうのと
 をのみの給ふ人になんおはしける。こもり給ひしとは。宰相におはせしに。われよ
 り上臈四人(醍醐)中納言になれるに。われひとりのこりたり。たとひ上臈なりとも

やうなる御、
コ本改

こもりぬ云々、
宜参若開集五
古事談二及十訓
抄九

後に宰相になりたる人もあり。われこそなるべきにひとりならずとて。宰相をも兵衛督をも中宮権太夫をも皆たてまつりて久しくこもり給へりき。人に越えられたることもし。こと人ならばさてもおはすべけれども。腹立ちでこもり給へりしに。爲通宰相の太郎子におはせし讃岐のみかど(註)の御おぼえにおはせし程に。おほきおと(註)前の宰相にて。なりもかへらて中納言になり給き。陣の座の除目にかんだちめになる例は。これや始めにて侍りけん(註)とぞ聞き侍し。内(註)より院(註)に申させ給ひ。はからはせたまへと關白(註)におほせられよなど申させたまひけるにや。さまで御けしきもあしくもなかりければ。なさむとせさせ給を。法性寺のおと(註)關白にて。あるまじきこととたび(註)申させ給ければ。いつとなくしぶらせ給けれど。院にたび(註)御使などありてぢんの座にて中納言になり給にき。御前にて行はるゝ除目にこそ上達部はなさるなるに。これよりはじまりてこの頃はさてなさるゝとぞきこえ侍る。うへの御せうとなれば殿にはさりがたくおはすべけれど。例なき事と申させ給ひけるにこそ。つかさをも返したてまつりて入りこもり給ひける時。横柳毛の車やぶりて家の前の大宮おもての大路にて。とりいだして焼き失ひたまひけるは節會の日にて侍りけるとかや。さて紺の水干にくれなるの衣とか着て。馬にてかはじり(註)へかねとかいふあそびがらおはしける道に。鳥羽の櫻をなんすき給ける。

を、コ本作ど、似

あかざり、原作ありさるなり、コ本作ありさまなり、今従校本

と、いせあまり、千載作やとせまけて、かへすにつへるとみるに、さりとて、も云々、同上作何のそ、それ思ひすつへす、梓弓又引きかへす時もありな

の、ぞ、並據コ本

かくて月日をわたりてありかんと思ふと。院の御おぼえなりし中納言(註)に消息し給ひければ。さもとあほしめしけれど。うち任せてもえなくて。みかどのせさせ給ふあかざりけるなるべし。さきの宰相にて中納言になる例なき事なれど。隆國の宇治にこもりて。前中納言より大納言になりたる事のなぞらへつべきによりてぞなり給ひける。宰相にまづかへしなさんと御氣色ありけるを。さてはありかんともなかりければ。かたきことなりと侍りけるなるべし。さていりこもり給ひし時。中院大將(註)まだ中納言など申し、折にや。その弓をかり給へりけるが。つかさたてまつりて返したまふとて。

と、いせあまり手ならしたりし梓弓かへすにつけてねぞなかれける。
とはべりけるかへしに。中院。

さりとも思ひなすて梓弓ひきかへす世もありもこそすれ。
と侍りけるかひありて右衛門督になり給へりき。御むすめ(註)近衛のみかどの御時女御にまいり給へりし後にたちたまひて。みかどかくれさせ給ひにしかば御ぐしちろし給ひてけり。九條院と申なるべし。法性寺殿(註)の御子とて参り給へれど。まとはこの御子なればいとめてたき御名なり。きさきにはたち給へれど。院の御女。一の人(註)などならぬはかたき事にてぞ侍るなる。御みめも御けはひもいとらう

ある人になんおはすとて。鳥羽院もいと有がたくとぞほめさせ給ひける。近衛のみかどのかくれさせ給て。御ぐしあろしたまひてまたの年五月のいつかの日皇嘉門院にたてまつらせ給ける。

(新古今集) おやめ草ひきたがへたる袂には昔をこふるねぞかゝりける。

御かへし。

(同上) さもこそはおなじ袂の色ならめかはらぬねをもかけてけるかな。

と侍りけるとぞきこえはべりし。太政のおとゝ(伊)の太郎(暁)にておはせし宰相とてうせたまひにき。その宰相は二郎か太郎かにはすとて。おほぢの大納言殿(暁)じたぎみとわらは名をつけ申し給ひけり。その宰相の御子はこのころ泰通の少將と申すなる。侍従大納言(暁)の子にし給ひておはしけり。またも御子はおはすとぞ。伊實中納言と申しは顯隆の中納言のむすめの腹にて。むかひばらとてむねとし給ひしかば。兄の宰相(暁)よりもときめき給き。あにおとゝ皆笛をぞ吹き給し。ふたりながらおほい殿(伊)よりさきにかくれ給ひにき。伊實の中納言の子に少將(暁)侍従(伊)など申しておはす也。宗通の大納言の三郎にて季通前備後守とておはしき。文のかたもしり給き。箒のと琵琶などならびなくすぐれておはしけるを。兵衛佐より四位し給ひて。この御中に上達部にもなり給はざりしぞくちあしき。さやうの道のすぐれ

ぞ原作て、今從
二本

給へるにつけても色めきすぐし給へりけるにや。

かりがね。

かの九條民部卿(暁)の四郎にやおはしけん。侍従大納言成通と申すこそよろづの事能多くきこえ給しか。笛歌詩などそのきこえおはして。いまやうゝたひ給事たぐひなき人におはしき。又あまりあしにあはするとも昔もありがたきとになん侍ける。大方ことに力いれ給へるさまゆゝしくおはしけり。まゐりも千日かゝすならし給ひけり。今様もこばんに石を百かぞへおきて。うるはしく装束し給ひて帯などもとかて。釋迦のみのりはしなくといふ同じ歌を。一夜にもかへりかぞへて百夜うたひ給ひなどしけり。むまにのり給事もすぐれておはしけり。白河の御幸に馬の川にふしたりけるに。鞍のうへにすぐれたち給ひてつゆぬれ給ふ所おはせざりけるも。こゝと人ならば水にこそうち入れられましか。大かた早業をさへ並びなくし給ければ。そりかへりたるくつはきてかうらんあのほこぎの上あゆみ給。車のまへうしろ。ついであのうらうへ。とゝこほる所おはせざりける。餘りに到らぬくまもおはせざりければ。宮内卿有賢ときこえられし人の許なりける女房に。しのびてよるく様をやつして通ひ給ひけるを。さぶらひどもいかなるものゝふの局へいるにかと思ひて。窺ひてあしたにいでんをうちふせんといひ支度しあへりければ。女房いみじく思ひ

なげきて例の日暮れにければ。おはしたりけるに泣くくこの次第を語りければ。いとく苦しかるまじきとなり。きとかへりこんとていて給にけり。女房のいへるどくに門どもさしまはして。さきくにも似ず嚴しげなりければ。人なかりける方のついでをやすくとこえておはしにけり。女房はかくきしておはしぬれば。又はよもかへり給はじと思ひけるほどに。とばかりありて袋をてづからもちて。又ついでをこえてかへりいり給にけり。あしたにはこのさぶらひどもいつらくとそぞめきあひたるに。日さしいづるまでいてたまはざりければ。さぶらひども杖などもちて打ちふせんずるまうけをして目をつけあへりけるに。殊の外に日たかくなりて。まづちりえぼうしのさきをさしだし給にけり。次に柿の水干の袖のはしをさしだされければ。おはすてにとてものくすみやきあへりけるほどに。その後新しきくつをさしだして縁におき給ひけり。こはいかにと見る程に。いと清らかなる直衣に織物の指貫着てあゆみいで給ければこのさぶらひどもにげまどひ土をほりてひざまづきけり。くつをはきて庭にありて北の對のうしろをあゆみ参りければ。つぼねくたてさはざけり。中門の廊にのぼり給ひけるに。宮内卿(註)もたずみありかれけるが急ぎ入りて装束して出て會ひ申されて。こはいかなる(註)にかとさはざければ。へちの事には侍らず。日ごろ女房のもとへときくしのびて通ひ

ま、二本作を

は、二本无

は、據二本補

ん、二本作る

侍りつるを。さぶらひの打ちふせんと申す由うけたまはりて。その怠り申さんとてなん参りつると侍りければ。宮内卿おほきにさはざて。この科はいかゝあがひ侍るべきと申されければ。へちの御あがひ侍るまじ。かの女房を給はりて出て侍らんとありければ。さうなきとにて御車どもの人などは。かちにてかどのとにまうけたりければ具していで給にけり。女房さぶらひすべていゑのうちこぞりてめづらかなるにてぞ侍りける。から國に江都王など申しけん人もかくやおはしけむ。大方は心わかくなどおはして。始めて人のむこにおはせしありも調度のづしかきいだして。呪師のわらはの御おぼえなるに給ひなどし給にけり。上達部になり給ひても。賀茂詣に檳榔にあをすだれかけなどし給ひし。始めたる事にはあらねどもさやうに好み給ひけるなるべし。わかざかりは左中將とてすきものやさしき殿上人名高きにておはしき。五節などには雲のうへ皆その御まゝなるやうにぞ侍ける。いつれの年にか五節に藏人頭たちの舞ひたまはざりければ。殿上人たちはやみていかにぞや歌うたひ給ひけるに。右兵衛督公行のまだ別當の兵衛佐など申しけん。その人を表におし立て。成通の中將かくれてうたひ給けるを。頭辨うれへ申されたりければ。そのおりにぞ御かしこまりにてしばしこもり給へりし。白河院には御いとをしみの人にておはしき。殿上人の中にはたゞひとり色ゆるされておはすとぞきこえし。雪ふりの

いふも、コ本作
きたり

御幸に。ひきわたのかりごろもをき給へりとして。こころえぬことに仰せらるゝとききて。資遠とて侍りし檢非違使のまだわらはにて御前にも近くつかはせ給ひしに。わひ申す由きかせ參らせよとの給ひければ。はかなくうちいだして成通こそひきわたの事かしてまりて申し候へと申したりければ。あしよしの御けしきはなくて。まことにきくわいなりとぞ仰せられける。近衛のすけなどはかとりうすものなど。花の色紅葉のかたなどそめつけらるべかりけるを。ひきわたのあらしくおもほしめしけるにや。讃岐院のくらゐの御時十五首の歌人々によませ給ひけるに。述懐といふ題をよみ給として。

(詞花集下) 白河のながれをたのむ心をばたれかほくみてそらにしるべき。

と講せられける時。むしろこそりてあはれと思ひあへりけり。涙ぐむ人もありけるとかや。おほかた歌などもをかしくよみ給ひき。かへる雁のうたに。

(金葉集) こそせずばいかでしらしまし春霞へだつるそらに歸る鷹がね。

とよみ給へるもきよらかにきこえ侍り。戀の歌ども。こひせよとてもむまれざりけり。またふる白雪のかたもなくな。わが心より思ひいだし給へるなるべしときこえていとあかし。詩などもよく心得給へりけるなるべし。左大辨宰相顯業といふはかせのかたられけるは。詩のことなどいはるゝきけば。なにがし千里などもつく

侍、コ本作給へ
また、コ本元

行兼、コ本作兼

りたるいふにきこえて心すむわざになんある。萬里といふになりぬればまたいふにもおよばずなどあるはと。けふありなどぞはべりける。あまりねなきやすきやうにぞおはしける。鳥羽にて白河院のやぶさめといふと御らんじけるに。瀧口なにかしとかいふもの射むとしけるに。兄に似てつはもの、おぼえある家の者にて侍るなるが。的たてはべりけるを見て。弟のいかに兄の的たてによるか。いとやさしきとなりとてなきたまひければ。二條帥(兼)は行兼がやぶさめ射むに公兼が的たてん。おはれなるべきことかはとぞ侍ける。またある源氏のむさのやさしく歌よみあそびなどしけるに。指貫のくゝりのせばく見えければ。あつからの事もあらばさはきとあげんずるかなどいひても涙ぐみ給ひけり。また三井寺に侍ける山伏の法橋になれりけるとかたらし給ひても。山伏ゆかしくばそれがし見よなどいふらんこそ。おほみねのすがたゆかしけれなどいひてもうちしぐれ給けりときこえ給き。やすき事も物をほむる心にてかくなんおはしける。弟の按察の大納言重通ときこえ給ひしは。みめなどは似通ひ給へりけるが。いますこしにほひありてあいつかはしきやうにぞおはしける。いと能などはおはせねども。笙のふえ吹き琵琶ひき給ひき。法性寺殿(兼)にぞ常はしたしくさぶらはせ給けるに。殿もこの大納言もすぎておはするのちなどもなつかしくさとかほる香ぞおはしける。にほふ兵部卿。かぞる大將などお

ぼえ給ひけるなるべし。このふたりの大納言だち御子もおはせてみな人の子をぞやしなひ給ける。

ますみのかけ。

閑院の春宮大夫と申すも高松の御はらなり。贈太政大臣よしのぶと申す。白河院の御ちほぢ贈皇后宮(璣)の御ちやにて。まとの御むすめにこそおはしまさねどもいとやんどとなし。この殿(璣)は詩など作らせ給けるとて人の語り侍しは。はるにとめる山の月はかうべにあたりてしろしとぞきこえ侍しまだ忘れ侍らぬ。これはふみを題にて作り給へるに。吳漢とかいふ人とぞいひし。所の名などをもさすがにたどたどしくなん申し。また御歌もうけ給りき。

(後拾遺)
くもりなき鏡の光ますくにてらさん影にかくれざらめや。

と白河院の御事を伊勢大輔よみ侍りける。その御返しとぞきこえ侍し。白河院一つ御はらの御いもうとは仁和寺の一品宮とてちかくまでおはしましき。聰子内親王と申なるべし。後三條院うせさせ給しとき。その日御ぐしあろさせ給ひて仁和寺にすませたまひき。さておはしましきかども年ごとにつかさくらるなどたまはらせたまひき。その御あとうとに伊勢のいつきにておはせし三品したまへり。俊子内親王ときこえき。樋口の齋宮と申すなるべし。次に賀茂のいつき佳子の内親王ときこ

篤、原作焉、據コ本改

三、據コ本補

な、據コ本補

ぞ、原作て、今從コ本

つ、據コ本補

え給し。御なやみによりて延久四年七月に罷りいで給き。富小路の齋院とぞ申めりし。齋宮はしはすにいて給き。そのあとうとにて篤子の内親王と申しも皆同じ御はらからなり。はじめ延久元年賀茂のいつきにたち給て。同五年に院うせさせ給ひしかば前齋院にておはしましに。むばの女院(璣)の御讓にて准三后(璣)みふなど給はらせたまへりし程に。堀河の帝の御時后にたち給ひき。みかどよりは御とし殊の外におとなにおはしければ。世にうたふ歌なんはべりけるとかや。春宮大夫殿(璣)はまとの御子もおはせねば。三條の内大臣能長のおとこの甥におはするをぞ子にしたてまつり給ける。まとは堀河殿の御子におはす。これも帥殿(璣)の御女のはらなり。この内のおと(璣)の御子は。中納言基長と申しは贈三位濟政の女のはらなり。彈正尹になり給へりしかば尹の中納言とぞ申し。三井てらに併都(璣)とて御子おはすとぞ。尹の中納言の弟大藏卿長忠とておはしき。母は昭登親王の女なり。大辨の宰相より中納言になりておはせしほどに。中納言をたてまつりて。われ大藏卿になり子(璣)を辨になされ侍りき。石山辨とぞ申めりし。加茂にぞ限りなく仕うまつられし。中納言までなど夢に見られたりけるとかや。その子は左少辨能忠と申し。詩などよく作り給ひつ。心さとき人になんおはしける。若くてとくうせ給にき。少將入道有家ときこえし人の子に。この辨の同じ名つきたるがわづらひける

願、原作誤、據東
寺長者補任改

に、據二本改

程に。公伊法印といふ人にいのりをつけたりけるが。同じ名にてとりかへられたる
とぞ世にはいひあへりし。そのとりかへ人はまだおはすとかや。大藏卿の弟に山の
座主仁豪と申もおはしき。南勝房とぞ申はべりし。又律師などいひて二人ばかりお
はしき。又四位の侍従宗信と申すもおはしき。その子は仁和寺に禎喜僧正とて東寺
長者にてこのころおはすとぞ。尹の中納言のおなじはらにおはせし。三條のおと
(孫)の御むすめは。白河院東宮におはしまし、時御息所ときこえ給し。みかど位に
つかせ給ひて延久五年女御の宣旨かうぶり給き。道子の女御ときこえき。姫宮うみ
奉りてのち内へも参り給はずなりにき。承香殿の女御とや申しけん。御むすめの善
子の内親王に伊勢にいつきにて下らせ給しに具し奉りてぞおはしける。七十に餘
りてうせたまひにき。この女御はまた何とかや申す女おはしき。春宮の大夫(孫)の
御弟に同じ高松の御腹の無動寺の右馬頭入道顯信のきみときこえ給し。その御名は
長禪とぞ申すなる。十八にてこの世をおぼしめて、ひえの山にこもらせ給し。たう
とくおはれになど申すもあろかなり。昔の物語どもにこまかに侍れば。さのみやは
くりかへし申侍らん。長家の民部卿と申すもやがて高松の御はらなり。御歌どもこ
そうけ給はりしか。庭しろたへの志もと見えつゝなどよみ給へるもこの御歌とこそ
き侍りしか。この大納言。御子忠家大納言。祐家中納言など申しておはしき。母は

みな美濃守基貞のむすめとぞ。大納言の御子にてもとた、俊忠一人の中納言おはし
き。それは經輔の大納言のむすめの御はらなり。俊忠の中納言は。それもうたよみ給
ふときこえ給き。堀河院の御時ととて女のふみかけしにもよみ給へるとこそき侍
りしか。その中納言の公達は民部大輔忠成ときこえ給し。又俊成三位とてもおはす
なり。伊豫守敦家のむすめのはらとぞ。その三位の御歌もこの頃の上手におはすと
かや。歌の判などし給とこそき侍れ。この三位の讃岐のみかどの御時殿上人にお
はしけるが。みかど位あり給てのち院の殿上をし給はざりければ。

(續拾遺集卷)
雲井よりなれし山路を今更にかすみへだて、なげく春かな。

とよみて教長の卿につけて奉られ侍ければ。御返事はなくてやがて殿上仰せ下され
けるとぞ。撰集にはあやしや何の暮を待つらんとかやいふ歌ぞいりて侍なる。その
兄に山の大僧正(孫)とて經たうとくよみ給おはすなりときこえ給。

たけのよ。

みかど關白につき奉りては。御母方の君たちを「こそみな世にしかるべき人にてお
はすめれ。九條殿(孫)の御子の中に三郎(孫)におはしまし、關白たえずせさせ給。十
郎にあまり給へりし。閑院のおほきとと(孫)のすまこそ關白はし給はねども。うち
つゝきみかどのおほんおちにてさるべき人々おはすめれば。その御有様申さんと

を、當衍

てまづみかどの御母方を申しつゞけ侍るなり。朱雀院村上の御おほぢは堀河殿(建隆)。冷泉院圓融院の御おほぢは九條殿(建隆)。花山院の御おほぢは一條院(建隆)。一條院三條院の御おほぢは東三條殿(建隆)。後一條院後朱雀院後冷泉院の三代の御おほぢは御堂の入道殿(建隆)。この十代のみかどは昭宣公(建隆)と申す。堀河殿の御おほぢは御堂の御孫にておほしませみかど(建隆)の御孫にておほしませど。御母陽明門院(建隆)は御堂の御孫にておほしませはひとつ御ながれなり。白河院の御おほぢ。閑院の春宮太夫(建隆)の同じながれに御末にはおほせで。その御おとうとの閑院のおと(建隆)の御末なり。この閑院のおほきおと(建隆)の御うまごにおほせし左兵衛のかみ(建隆)の御すゑ。うちつゞきみかどの御おほぢにおほす。この公成の左兵衛督の御子按察の大納言實季は鳥羽院の御おほぢなり。この大納言の太郎には春宮太夫公實と申しき。經平の大貳のむすめの腹におほす。みめもきよらかに和歌なども能くよみ給ときこえ給き。笛ふきことひきなどし給はざりけれど。紅梅のみちのくに紙にまきたるふえ腰にさしてことづめおほしてぞおほしける。こと人のさやうにおほせば人もあざけるべきに。よくなり給ひぬればとがなくないうにぞ見え侍し。わかおほしけるほどにや右近の馬場に郭公尋ねに夜をこめておほしたりければ。女房ぐるまの雑色一人具したるさきにたてり

けるに。ほととぎすは啼かてやうく明けゆく程に。水雞のたゞきければ女の車よ

いかにせんまたぬくひなはたしくなり。

といひおくり侍りければ。

山ほととぎすかゝらましかば。

とつけて返したまひにけり。女はたれにかありけん。ゆりばな石合花にやとぞうけ給はりし。いかにもやさしく侍りけることかな。この世にはさやうのことありがたくぞあるべき。よみ給へる歌おほかる中にいとやさしくきこえ侍りし。

思ひいづやありしそのよの吳竹のあさましかりしふし所かな。

とよみ給へることそいづくにかいばみ給けるにか侍りけん。からうすのおとして當來導師などやちがみけむとさへ思ひやられ侍る。そのおほい君は經實の大納言のうへ。そのつぎは花園の左のおと(建隆)の北の方。三の君は待賢門院におほしませ。つゞきさまにまさり給へるとを。まろが姉あらししかば。それなどいひてたきいあへる賤のをに具する人にやあらしなど給はせけるときこえし。さしもの給はぬことを人のいはせ侍るにもありけん。またさやうのことはたはぶれたまはんさも侍りけん。皆この御母光子の二位の御はら也。春宮太夫(建隆)の太郎にては侍從中納言實隆

の、コ本作も、金葉作は

と申しておはしき。その御は、美濃守基貞の御女なり。この中納言人がらはよくおはしけるにや。院に和歌の會せさせ給ひけるに歌人にまじりて歌かきたる。むねにも入れひきそばめなどはし給はていつとなくさへげておはしければ。御弟の太政のあと(預)そのちりまだ中納言などにやおはしけん見給て。この人は歌などもよみ給はぬにおぼつかなくて。御歌見給へ侍らばやと申給ければ。何(何)ごとの給ふぞ。前左衛門佐(基)ひがごとせられけんやはとの給ひける。おかしかりしとぞ侍りける。基俊の君すぐれたる歌よみなん。よき歌なるべしとの給ふにこそとはきこゆれど。歌の道はよきにつけあしきにつけてし、あひて。われもたびく、人に見せおはせなどすること。我がえぬことはかくおはする事なり。その子にて冷泉の宰相公隆とておはせし。若くて後少將ときこえし。若殿上人のいうなるにておはしき。その弟に兵衛佐成隆とておはしけるまだあさなくてかくれ給ひにき。こと御はらにや奈良に覺珍法印と申し、は當時おはす。才ある人ときこえ給き。春宮太夫(聡)の二郎におはせしにや。大宮のすけ實兼とかきこえて後には刑部卿など申すおはしき。この御中に上達部などにえなり給はざりき。その御女のあはのかみ朝綱ときこえしむすめの腹におはしける。女院(顯)に参り給へりけるが。鳥羽院しのびて物など仰せらるゝ事ありとて。法皇のいださせ給ひけるとぞきこえ侍りし。

え、原作み、今従
校本

き、據コ本補

むめのこのもと。

春宮太夫(聡)の三郎にやあたり給ふらん、これも美濃守(基)のむすめの腹におはせし太政大臣實行のおと、は。學問もし給たる人にておはせし上に。たちゐのふるまひなどめてたくよき上達部にてぞおはしける。四位し給ひて前少納言にていつとなくおはしければ。おやの春宮の太夫殿(聡)は身のさえなどもありよき者にてあるにくちおしくとのみ歎き給けるに。うせたまひて後中弁にも藏人頭にもなり給ければ。身の時なかりしをのみ見え奉りてとぞ思ひ出つゝの給はせける。おやの御やまひのほどなどもまろぶしにて常はあつかひきこえ給けるに。うせ給てのち基俊の君とぶらひにおはして梅の枝にむすびつけられける。

むかし見しあるじがほにて梅がえの花だにわれに物語せよ。
と侍りければ。このあと(預)の御かへし。

ねにかへる花の姿のゆかしくばた、このもとを形見とは見よ。
とぞ侍りける。おとうとの左衛門督(基)より下臈にて頭にてならび給へるに。頭中將は上臈にておはしけれど。この兄はさえもおはし命もなかくておほきおと、まていたり給へるいとめてたし。院(尊)くらゐにおはしまし、時内宴行はせ給に詩作りてまいらんとし給を。御子のうちのおと(聡)は。さら(公)て侍りなん。年もあまりつもり

ぞ、據コ本補

り、コ本作る

給ひ御ありきも叶ひ給はぬに見苦しといさめ申給ければ。中院入道おと(補)に。
 内大臣かく申侍はいかゝと申あはせ給ければ。かならず参らせ給べきことなり。お
 ぼろげに侍らぬことなるに。みかどの御おぢにおはしまして。おほきおと(補)の参ら
 せ給はざらんくちおしく侍りなどはべりければ。むまごの實長の 大納言の宰相中
 將と申し、にかゝりてこそまゐり給ひけれ。御ぐしおろし給しも中院かくと申し給
 ひければ。しか侍るまじきことにやとこそ思ひ給へて過ぎはべれ。おぼしめし立つ
 ならばいとめてたきとに侍り。同じくは障りなき程にとくはべらんめてたきこと、
 の給せければ。入道し給てぞうせ給にし。弟の左衛門督(補)は御こそめてたくうた
 をよくうたひ給て。成通の大納言にもとり、にぞ申しける。その左衛門督通季と
 申し、は春宮太夫(補)の四郎にておはせしなるべし。みめもきよらにおほきにふと
 りたるひとにておはしき。母は二位の光子にてむかひばらにておはせしかば。兄
 をもこえて頭中將頭辨にてならびておはしき。ことのほかに世にあひたる人にて。
 通季信通とてひとにておはせしに。立ちならび給けるに。信通の君はちひさく
 これは大きにおはすれば。母の二位殿。これはいづれか、たはと申し給ひければ。白
 河院は男の大きなはあしきとかはとぞ仰せられける。實行の太政のおと(補)の御
 子は内大臣公教と申しき。修理のかみ顯季と申し、女のはらにおはす。その御母は

は、據コ本補
光、原作御、據校
本改

し、原作そ、據校
本改

房、コ本作院
など、據コ本補

へ、コ本作つ

歌よみにおはしき。少將公教の母とて集などに多くおはすめり。常盤の山は春を知
 るらんなどこそいうにきこえ侍れ。内のおと(補)は若くよりみめ心ばへも思ひあが
 りたるけしきにぞおはしける。藏人の少將四位の少將など申し、程。左右の御手の
 うらにかうになるまでたき物しめて。月いだしたる扇になつかしきほどにまめたる
 狩衣など着給ひてさき花やかにおはせて。夕つ方などに常に三條室町殿に院。女院な
 どおはしますかた、にまひりまいへば。女房などは四位少將のときになりたり
 などぞいはれけるとぞきこえし。さなともおはし笛もよくふき給き。心ば(な)ど
 おとなしくて公事などもよくつとめ給。世のさたなどもよくおはせしを。世の人の
 様にあながちなるついでせうもし給はずなどおはしければにや。家などは叶ひ給はて
 ぞ有ける。藏人頭檢非違使の別當などし給ひしものとよくおはしけり。左大將など
 申すほど。鳥羽院の御うしろみ院の内とりさたしたましかども。われと國ひとつも
 知り給はず賢人にぞおはすめりし。て(補)の太政のおと(補)よりもさきにうせ給ひ
 にし。おほかたおとなしきやうにふるまひて藏人頭になり給へりしに。弟におはせ
 し公行の辨にはじめてなりて。あつびたひのかぶりになし給ければ。われも今はあ
 つびたひにせんとして同じやうにして内に参り給へるに。成通宰相の中將にはじめて
 なりて。まばしはすきびたひの冠にてとやおぼしけん。内にまゐり給ひて頭中將の

かぶりを見給ひて。額に扇さしかくしてまかりいで給ひて。やがてあつひたひになりておはしけり。成通の御心ばへは世のさたをばいたくもこのみ給はて。公事などは識者におはせしかど。世のまめなるとはとりいらぬ御心にや。藏人頭も檢非違使の別當もへ給はず。侍従大納言などいひてすぎ給ひにき。公教のおほい殿は三條の内大臣とも高倉のおととも申すなるべし。三條のおととは能長のおとを申ししかばいひかふるなるべし。高倉のおと(松)の姫君。清隆の中納言のむすめのはらにおはする院(齋)の女御にたてまつり給へり。今梅壺の女御(瑠)と申なるべし。御名こそいとやさしくきこえ侍れ。その弟の姫君は父おと(松)うせ給てのち。おほぢのおほきおと(松)さたし給て。今の攝政殿(藤)右のおと(松)などきこえさせ給ひしときまゐりたまひて北のまん所とぞきこえ給。男公達は同じ御はらにおはする大納言實房と申すこそ。内のおと(松)うせ給ひてのち三位の中將になり給。殊の外の御さかえなるべし。末の子におはすれどもかひばらなれば兄二人にまさり給へるなるべし。左衛門督實國と申すは中納言にておはす也。この頃みめよき上達部ときこえ給。また笛もふき給て御ちや(松)のおとつぎ給とぞ。みかど(藤)の御師にもおはすときこえ給。かぐらなどもうたひ給てせいそ(松)の御神樂にも拍子とり給ときこえ給。その御兄にて左大辨の宰相實綱と申すなる。ふみなどにたづさはり給て。辨にも

今、原作「二」據
本改

給、此下恐脱へ
字

なり給なるべし。僧公達も法眼など申して山におはす也。又石山の座主などもきこえ給。内のおと(松)の御次に右兵衛督公行と申し、御弟のおはせし。宰相までなり給てわかくてかくれ給にき。さ(松)えなどもおはしけるにや辨などにもつかへたまひき。歌こそよくよみ給けれ。その御子に顯親の播磨守のむすめのはらに前大納言實長と申すおはす也。みめよき上達部におはすなる。いりこもり給へる若き人だちのいかに侍るよにか。實慶法眼とて山におはしけるもうせ給ひにけり。右兵衛督(松)の御弟に民部大輔公宗ときこえ給おはしき。うつしご(松)うもなくて常にはもの、けにてうせ給にき。みめなどもよくおはしけるときこえ給き。皆おなじ御はらからにぞおはしける。顯季の三位のむすめの御腹におはしけり。左衛門督通季と申し、中納言の御子に按察の大納言公通と申すおはす也。詩などもつくり給なり。くびの御やまひ重くおはすればにやたび(松)つかさも辭し給ひて。前大納言にておはすとぞ。其の御子に中將(藤)侍従(松)などおはす也。通基大藏卿のむすめの腹におはすとぞ。前少將公重と申すも左衛門督(藤)の御子なり。歌よみ給とぞ。又山に法印など申しておはす也。この人々の御いもうとに廊の御方と申して白河院の御おぼえし給人におはせし。後には徳大寺の左のおと(松)の御子二人うみ給へりき。今の公保の大納言におはす也。いまひとりは山に僧都(松)と申すとぞ。左衛門督(藤)のつぎに

は山の座主仁實と申し、おなじ御はらにおはせしかば。山僧などは二位僧正などぞ申なる。いとのおはすぐれたるもおはせざりけれども。心ばへかしくおはせしかばにや世のおぼえなどもすぐれ給へりけるにや。世の末にさばかりの天台座主はかたくなん侍る。山のやんごとなき堂どもの破れたるも多く作りたて。大衆などの中はすこしもふようなるをばよくきたゝめなどせられければ。世のためかの山のためそのときはおだやかにんきこえ侍りし。傳教大師のふたゝび生れ給ふといふ事も侍りけるとかや。白河院のかくれさせ給ひけるに。七月七日俄に御心ちそこなひて。つとめてより御霍亂などきこえて。さだかにものなど仰せられざりけるに。今はかくと見えさせ給ける時。かねてより忠盛のぬしに念佛かならずすゝめよとおぼせられおきたりければ。かくなんうけ給はりしと爲業といふが母してたびく申けれど。仁和寺の宮(聖)など佛頂尊勝陀羅尼とのみおぼせられて。これおなじとなりとの給はせけれど。かねてうけ給はりたるにたがひておぼえけるに。この僧正(聖)の南無阿彌陀佛と高く申したまへりけるなんうれしかりしとこそそのちにきこえけれ。その僧正はさすなども辭し給ひて。坂本に梶井といふ所にこもりて四十にあまりてうせ給にけり。

花ちるにはのおも。

二位即堀河院御乳母從二位光子也

春宮太夫(聖)の六郎にやおはすらん。左大臣實能のおとゝ。これも左衛門督(聖)。山の座主(聖)。女院(聖)などのひとつ御はらからにて二位の御子におはす。大炊御門のおとゝも徳大寺のおとゝも申なるべし。御みめも心ばへもたをやかにいとよき人におはしき。兄よりもなつかしくいうなる人におはせしを。ふみなどつくり給ふとはおはせねど歌などよくよみ給き。戀の歌のなかにもいうにきこえ侍りしは。うつらつき心なりとも。また命だにはかなからずばなどもきこえ侍りき。又思ふばかりの色にいでばなどよき歌ところき侍れ。又あひみし夜はのうれしさになどもきこえ侍りき。聲もよくおはしけるにや御あそびには拍子とり給などぞうけ給はりし。庭こそ花のなどいふもこの御歌とこそおぼえ侍れ。世のおぼえも殊の外におはしき。むかひばらにておはするうへに人がらよくおはすればにや。三位中將歴給へるもことの外の御おぼえなり。この頃こそ多くきこえたまへ。關白つぎ給ふべき人など放ちてはさることも侍らぬにいとめづらしくはべりき。大納言の大將になり給へりしも近くたゞびとのなり給ともなきにいとめづらかになん侍りし。左大臣までなり給へる。閑院のおとゝの後は四代(聖)なりたえ給へるに。この殿の大將になりはじめたまひて。兄の太政のおとゝ(聖)この左のおとゝ(聖)右大臣内大臣になりはじめ給ひて公達もおのゝなり給へり。兄の太政のおとゝ(聖)按察の大納言とて

臣、コ本作將

おはせし。大將弟(藤)になられてこもり給しに。一の大納言忠教。二の大納言實行。三にて雅定。第四實能の大納言おはせし。上龍三人をおきて大將になり給ひしかば。實行雅定二人はいりこもりておはせしを。中院の源大納言雅定左大將に成り給ひてのちこそ實行雅定右大臣内大臣になり給しか。いづれの中納言とかの。まづ右のおと(實)の御よろこびにおはしたりければ。その家の門にうま車多くたちなみて。俄によつあしたつとてと門より入りたるに。見やりたればかくれのかたまでひきつくろひて。おとこ女いろくにとりさうずきてはきのごひなどしてゆしく花やかに見えけるに。かくと申入れたれば。ひさしうありて烏帽子直衣にて物がたりまめやかにきこえて。院の御心ざしかたむけなくなどいひて。はなうちかみてよろこびの涙おしのごひつゝ忍びあへぬ御氣色なるに。ほどもへぬればやうくしりぞき出て。つぎに中院に渡りて内のおと(藤)の御よろこび申給ければ。中門の廊に犬の足がたやつこのつありて。さりげなる氣色もせず。さぶらひよびいだして申入れたれば。使にとりつゝきて半尻なる狩衣にていて給ひて。よろこびに渡り給へるが。大臣は大饗など申して大事おほかり。何かさとぶらひ給など云ひちらしてやみ給にけり。ふたりの人のかはられたりしさまこそと語られけるとなん。徳大寺のおと(藤)の御子は右大臣公能のおと。その御母按察中納言顯隆ときこえしむすめ

青草、二本作榮

白 かつち、原作は、
據二本改

におはす。このおと(藤)管絃も身のさえもかた(藤)おはすときこえき。おや(藤)おほぢ(藤)などはさえおはせぬに。詩など作り給ひみゆる心ばへもいというなる人にぞおはしける。中納言の大將になりて右大臣までなり給へりき。このおと(藤)は若くよりこゑもうつしくおはしまして。藏人少將などいひて五節の淵醉の今様などに権現うたひ給ひける。内侍所の御神樂の拍子とりなどし給けるも。ほそき御聲いとあかしくぞ侍りける。むねとは詩作り給事をこのみて。中將などきこえ給しとき北野の人の夢に。久しくこそ詩など講ずる人なけれとのたまはすとて。野徑只青草とかいふ詩。博士學生などあまたまうて講じけるに。年二十にすこしあまり給へるわかき殿上人の。みめかた(藤)いとあかしくて。上の御ぞなどなよらかにきなし給へるに。ほそぢ(藤)か(藤)ひ(藤)ら(藤)を(藤)などし(藤)な(藤)や(藤)か(藤)にて(藤)ま(藤)じ(藤)り(藤)給(藤)へ(藤)る。神もいか(藤)御覽(藤)す(藤)ら(藤)む(藤)と(藤)ぞ(藤)お(藤)ほ(藤)え(藤)ける。次第に朗詠し給へりける中に。花やかなる御聲して羅綺の重衣たるとうち出でたまへりける。年老いたる人など涙をさへながしてむしろこぞりてめで思へり。また讃岐のみかど(藤)位におはしましてしける時。きさいの宮(藤)の御方にて管絃する殿上人どもめしてよもすがら遊ばせ給ひけるに。大殿(藤)もおはしまして。朗詠つかまつれと仰せられけるに。このおと(藤)の中將など申しける時に。大公望が周文にあへるといだし給へりけるこそ御聲もうつくしう。みかど一の人の事にてそのよし

あることのうにきこえ侍りける。藏人頭より宰相になり給しに。中將をぞもとの
となればかけ給ふべかりしに。道をへんとにや右大辨になり給へりき。いと身にも
おひ給はずなど思ふ人もありけるに。侍従になりそへ給ひて太刀はきたまへるなど
心のまゝにはせしさま。事につけてあらまほしくおはしき。藏人頭におはせし時
も。殿上の一寸物し日記のからびつに日毎に日記かきていれなどして。ふるきを
おこさんとし給ふとぞきこえ給ひし。

みやぎの。

このおと(懸)の御むすめ。俊忠中納言のむすめの腹に四人おはすときこえ給。お
ほい君はいまの皇后宮におはしますとぞ。この院(階)の位の御時にきさきにたち給
ひし。御名は忻子と申なるべし。その次に姫君おはしき。きさきふたりの中にておほ
ろげの御振舞あるまじ。佛の道にこそは入らせ給はめと故おほい殿のたまはせけれ
ば。それにたがはず若くおはすなるに御ぐしおろし給ひたるとき、侍るいとあはれ
に。この御事をたれがよみ給へるとかや。

宮城野の秋の野中のをみなべしなべての花にまじるべきかは。

とぞき侍し。まことにいとありがたく契りあき給ふとも。そのまゝにおぼしなり給
ふ。いとくありがたく物し給ふ御心なるべし。三の君(彦)は宇治の左のおと(懸)

コ本作は
コ本作は
コ本作は

の北の方の父おと(懸)の御いもうとにおはすれば。御子にしたてまつり給て。近衛
のみかどの御時姉宮(雅)よりさきに十一にて后に立ち給へり。近衛のみかどもこの
宮もそのかみまだおさなくおはしきほどに。九條のおほきおと(懸)の御むす
め(懸)を鳥羽院女院(懸)などの御さたにて女御にたてまつりたまへり。法性寺の
おと(懸)の北の方は。九條のおほきおと(懸)の御いもうとにおはすれば。御子と
てうらうへより心ひとつにてたてまつり給へりしに。宇治の左のおと(懸)年ごろ
は兄の法性寺のおと(懸)よりも世にあひ給へりしに。餘りにおはせしけにやさす
がにひとつにもおしはり給はざりしに。今参り給ひたる中宮のみひとつにおはしま
すにて。父の伊通のおと(懸)も大納言など申して常にさぶらひ給。關白殿(懸)も宇治
のおと(懸)も心よからぬさまにてへだて多かりける程に。みかど(懸)もかくれさせ
給ひ。左のおと(懸)もうせ給て年ふるほどに。二條のみかどの御時あながちに御
せうそこ有ければ。父おと(懸)にもかたぐし申かへさせ給けれども。しのびたるさ
まにて参らせたてまつり給ひけるに。むかしの御すまひも同じさまにて。雲井の月
もひかりかはらずおほえさせ給ければ。

思ひきやうきみながらにめぐりきて同じ雲井の月を見んとは。

とぞ思ひかけず傳へうけ給はりし。かやうにきこえさせ給ひしほどに。みかど(懸)

もまたかくれさせ給ひてよも心ぼそくおぼえさせ給けるに。例ならずおはしませば
 などきこえて御ぐしおろさせ給ひける。御とし廿五六ばかりの御ほどにおはしけ
 るにやとぞきこえさせ給し。この宮何事もえんなるかた。なさけ多くおはしまして
 御手うつくしうかゝせ給ふ。繪をさへなべての筆だちにもあらずなんおはしますな
 る。またほに出でしこと琵琶などひかせ給ふことはきこえさせ給はねど。すぐれた
 る人に劣らせ給はず。物のねもよくきしらせ給ひたるとかや。御せうとだち参り
 給ひたるにも御帳おましなどこそあらめ。さぶらふ人々までよろづめやすくもてつ
 けたる様にて。人参るとて今更に臺盤所とかくひきつくるひ御几帳おしいてなど
 せて。かねて用意やあらん心にくしおはしますなる。故左のおと(註)も中にと
 りわきて。御心につかせ給とてぞ御子に養ひ申させたまひける。かやうになさけ多
 くおはしますことをやまかせ給けん。二條院の御時もあながちに御けしき侍り
 けるなるべし。この宮だちあやの御子におはしませばことほりとは申しながら。な
 べてならぬ御姿なんおはしますなる。たれもと申ながら院(註)の御あねにおはしま
 すなる女院(註)こそすぐれておはしますさまは。ならば御かたぐかたくおはしま
 すなるに。いまの皇后宮(註)にやいづれにかおはしますらん参らせ給へりけるに。
 人の見くらべまいらせけるこそ。とりぐにいとおかしく見えさせ給ひけれ。女院

ま、コ本作れ

ま、コ本作れ
さ、コ本作れ
ひ、コ本作れ

も、コ本元

(註)はしろき御ぞ十にあまりてかさなりたるに。菊のうつろひたる小うちぎ。白き
 二重あり物のうはぎたてまつりて。三尺の御几帳のうちなるさせ給へりけるに。皇
 后宮はうへ赤いろにてしたま黄なるはじめみぢの十ばかりかさなりたるに。うは
 ぎにおなじいろに。やがて濃きえびぞめの小褂の色々なる紅葉うち散りたるふたへ
 織物たてまつりたりけるを。見参らせたる人のかたりけるとなん。さてこの大炊の
 御門の右のおと(註)のおのこ君は。太郎にては三位中將とまうし。宮だちの同
 じ御はらにおはする。大納言實定と申すなり。つかさも辭し給ひてこもり給へると
 かや。さばかりの英雄におはするに。人をこそこえ給べきを人にこえられ給ひけれ
 ば位にかへてこえかへし給へる。いとことほりときこえ侍り。詩などもつくり給ひ
 歌もよくよみ給ふとぞ。御聲などもうつくしうて。あやの御あつぎ給ひて御神樂
 拍子などもとり給ひ。今様なども能くうたひ給なるべし。こもり給へるもわたらし
 くはべるとかな。次に三位中將實家と申すなるは。藏人頭より宰相になり給ひた
 らんにも。なか／＼まさりてなべてならずきこえ侍り。やまとごとなどよくひきた
 まひ御こゑもすぐれて。これも今様神樂うたひ給ふときこえ給ふ。この御弟に頭中
 將守さねもりときこえ給も。やまとごとなど習ひ傳へたまへり。この君だち皆才など
 もおはしてからやまとの女など作りたまふ。御みめも昔のにはひ残りてこの頃すぐ

れ給へる御有様どもにおはすときこえ給ひ。又いづれの御はらにかおはすらん。山に法眼(聖)とておはすときこえ給。また院(聖)の姫宮(聖)生み奉り給へる姫君もおはすとぞ。まことや北の方の御はらにや侍従(聖)とておはすなるは。頭中將(聖)御子にしたまふとぞ。徳大寺のおと(聖)の二郎には。中御門の右のおと(聖)の御むすめのはらに公親の宰相中將とておはしきとくうせ給にき。つぎに一條の大納言公保と申すなる。左衛門督(聖)の姫君廊の御方と申す御はらなり。當時大納言におはすなり。父おと(聖)に御みめは少し似給へるとかや。同じ御はらに公雲僧都とて山におはすなり。とばらの御子(聖)僧にて三井寺などにおはすとぞ。春宮太夫(聖)の末の御子は民部卿季成と申しておはしき。あづまとにてぞ御あそびにはまじり給けるととき、侍りし。右京のかみ道家のむすめのはらにおはす。文の方も習ひ給へりけり。その御子に左衛門督公光と申すなるこそぞえなどもおはして。詩つくり給ひ歌もよみてよき人ととき、奉るに。これも前の中納言などうけ給はるこそいかにける世の中にか。この御母顯頼の民部卿のむすめとぞ。みめもとによき上達部にて。ち(聖)の大納言(聖)にはまじり給へりとぞ。聲よく神樂などもうたひ給ふとか。これもゆしく大なる人にて。御あぢの通季左衛門督の御たけいと劣り給はずとぞうけ給はる。すべてよき人にこそ。若くてもて(聖)の世おぼえよりは殊の外に殿上にゆるされたる。

近衛づかさにてぞおはしける。

志賀のみそぎ。

春宮太夫(聖)の御末のかくさかえ給こともみかどの御ゆかりなれば。女院(聖)の御とこそ申し侍るべけれど。その御有様はさきに申侍ぬ。そのうみ奉り給へる宮々は。一の御子はさぬきの院(聖)におはします。二の御子(聖)は御目くらくなり給ておさなかくてかくれ給にき。三の御子は若宮と申しておはしまし。おさなくよりなえさせ給て。起きふしも人のま(聖)にてものも仰せられておはしまし。十六にて御ぐしあろさせ給てうせさせ給にき。御みめもうつくしう御ぐしも長くおはしましけり。むかし朝綱宰相の日本紀の歌に。

たらちねはいかにあはれと思ふらん三年に成りぬ足た(聖)ずして。

とよまれたるも。蛭子におはしましける宮の如くこそはきこえさせたまへ。昔もかかるたぐひおはせぬにはあらぬにや。嵯峨のみかどの御子に隠君子と申しける御子は。御身にいかなるとのおはしけるとかや。さて嵯峨にこもり給ひてひきもの、うちにたれこめて。人にも見え給はでわらはにてぞおはしける。この頃ならば法師にぞなり給はまし。昔はかくぞおはしける。心もさとくいとまもおはするま(聖)によろづの文をひらき見給ければ。身の御さえ人にすぐれ給ひておはしましけるに。や

身、原作み、
今従校本

まし、二本元

んごとなき博士のみちをとげ給けるとき。廣相の宰相ときこそける人のかのはかせになり給けるに。小屋とかいふ所たちよりとぶらひ奉られけるに難きこと侍りけるをば。駒をはやめてかの嵯峨にまうて、ぞ問ひ奉りける。みかどの御子にもかやうなる様々おはしけり。これ(四)は佛の道に入らせ給ひたれば後の世の契りはむすばせ給ふらん。この宮わかごにおはしませしけるとき絶えいり給へりければ行尊僧正祈り奉られけるに。白河院位につき給ふべくばいきかへり給へと仰せられけるほどになをらせ給ひければ。たのもしく人も思ひあへりけるに。そのかひなくおはしませしけるいかに侍るにか。なえさせ給ひたりとも御いのちは十にあまりておはしますべく。又ひとのしるしもたふとくおはすれば。なをらせ給へども位はべちのことなるべし。第四の御子は今の一院(五)におはします。第五のみこは本仁の親王と申し。わらはより出家し給て仁和寺の法親王(六)と申すなるべし。きさきばらの宮法師にならせ給ふことありがたきこと、申せども。佛の道を重くせさせ給ふいとめてたきことなるべし。この宮いとよき人におはして眞言よく習ひ給ひ。御手もかへせたまひ詩つくり歌よみななどもよくしたまひき。その御歌多く侍る中に。みのをにこもりていで給ひけるに。有明の月おもしろかりけるに。

(千載集上)
このまもる有明の月のおくらずば獨や秋のみねをこえまし。

とよみ給へるとかや。又。

夏のよはたい時のまもながむればやがて有明の月をこそ見れ。

などよませ給へり。まだわかかおはせしにこの一二年がさきにうせさせ給にき。四十一二にやおはしけん。をしくもおはします御よはひに定めなき世の恨めしきなるべし。又何事も世におはぬほどの人とき、奉りしげにや。うせ給はんとの頃金泥の一切經かきい出して高野にて供養し給けるに。ひえの山(七)の澄憲僧都を院(八)に申うけさせ給て導師にて供養せさせ給けり。その時院に御ものまうてに具せさせ給ふべかりけるとかや。殊にえらびたまひて。あらぬ方の僧なりとも能く説きつべきをとおぼしけんもいとたふとし。こがねの文字をも院(九)女院(一〇)などはなちたてまつりてはありがたきとを。おぼるげの御心ざしにはあらざるべし。女宮は二品宮とておはしませし。禧子の内親王とて賀茂のいつきにたち給へりし。御なやみにて程なくいでたまひにき。長承二年十月十一日御とし十二にてかくれさせ給にき。いつきのほどなくありさせ給ふためしありとも。まだ本院にもつかせ給はてかくいでさせ給ふことはいとあさましきこととぞきこえ侍りし。廿七日薨奏とてこのよし内裏に奏すれば。三日は廢朝とて御殿のみすもあろされ。何事も聲たて、奏するなど侍らざりけり。みかどの御いもうとにおはしませば御服たてまつりなどしけ

させ、二本元

の、原作は、今
従古本

なみ、二本元

き、原作て、據
二本

と、二本此下有

り。紋もなき御かぶり冠な冠はえいなどきこえて。年中行事の障子のもとにてぞ奉りける。みかどは日の敷を月なみのかはりにせさせ給なれば。三日御ぶくとぞきこえける。次の姫宮は又さきの齋院とて恂子の内親王と申し。後には腕子とあらためさせ給ひたるとぞきこえさせ給ひしは。大治元年七月廿三日にむまれさせ給ひて。八月に親王の宣旨かぶり給き。長承元年六月卅日いつきいでさせ給て。保元三年二月(三)皇后宮にたせ給ふ。上西門院と申すなるべし。永曆二年二月十七日御ぐしおろさせ給ときこえき。后にたせ給ときこえしは。みかどの御母になぞらへ申させ給とぞきこえさせ給。六條院(隣)の例にや侍らん。この女院のさきの齋院とてからさきの御はらへさせ給し時。御おちの太政のおと(隣)のよみ給へる。

(手紙上)昨日までみたらし川にせしみそぎしがの浦波たちぞかへたる。

と侍りけるとなん。秋のことなりけるにかりごろもおのくはざりうた歌などいとめづらしきに。逢坂のせきうちこえて。山のけしきみづうみなどいとおもしろくて。御祓のところにはかたのやうなるかりやに。いがきのあけの色水のみどり見えわきて。心あらん人はいかなる言のほいひとめまほしきに。おとのの御歌たけたかくいとやさしくこそきこえ侍りしか。

今鏡第七

村上の源氏。

うたゝね。

藤波の御ながれの榮え給ふのみにあらず。みかど一の人の御母方には。近くは源氏の君たちこそよき上達部どもはあはすなれ。堀河のみかどの御母賢子の中宮はおほと(隣)の御子とて参り給へれど。まとは六條の右のおと(隣)の御女なり。きささきの御事はみかどのついでに申侍りぬ。そのゆかりのありさまみなもとをたづぬれば。いとやんごとなくなん侍る。村上のみかどの御子に中務のみこ(和)と申しは。六條の宮とも後中書王とも申すこの御事なり。ふみ作らせ給ふこと世にすぐれ給へりき。御歌も世々の集どもに見え侍らん。その御子に土御門の右のおととと申しは。始めは源の姓得させ給て。師房のおととときこえさせ給き。御身のさえも高くよ文作らせたまふ方もすぐれ給て。野のみかりの歌の序など人の口に侍るなり。又月の歌こそ心にしみてきこえ侍りしか。

(金葉歌)有明の月まつ程のうたゝねは山のはのみぞ夢に見えける。

すきくしき方のみにあらず。土御門の御日記とて世の中の鑑となんうけ給はる。みかど一の人の御よそひどもその中にぞ多く侍るなる。御堂(隣)の御女はおほくき

代世々、二本作代

の、據コ本補

さき國母にてのみおはしますに。この殿の北のかたのみこそたゞ人はおはしませ
 ばいとく、やんごとなし。その御はらに堀河の左のおとゞ俊房。六條の右のおとゞ
 顯房と申して兄おとうとならびたまへりき。堀河殿は才學高くおはして文作りた
 まふとすぐれてきこえ給き。六條殿は歌よみにぞおはして判などし給ひき。世のお
 ぼえ兄よりもまさり給て。大納言の大將(源)中宮(源)のおほんおやにておはせしに。
 大臣あきて侍りけるを白河のみかどおぼしわづらはせ給て日ごろ過ぎけるに。匡房
 の中納言に仰せられおはせければ。堀河の大納言(源)をなさせ給へとうちいだして
 申しければ。みかど仰せられけるは。弟なれども右大將(源)中宮の御おやにて。この
 九次ならずば法師にならんといふなり。また上臈ども有て。われこそなるべけれな
 どいへば。それもすてがたきなりと仰せられければ。大納言大臣になり侍るとはか
 ならずしも一二といふと侍らず。なるべき人をえりてなされ侍るなり。又國の司へ
 たる人いかなど申し侍りければ。菅原のおとゞ(源)も讃岐守ぞかしと仰せられけ
 れば江帥(源)申しけるは。博士はべちのことに侍り。又才學高く侍らん兄を大臣にな
 させ給はんに。出家するおとうとはよに侍らじと申しければ堀河殿(源)はなり給へ
 りけるとぞ。六條のおとゞ(源)はそのうちぞなり給ひし。中宮の御おや堀河のみ
 かどの御おぼぢにていとめてたくおはしき。後には大將をば太政のおとゞ(源)の大

右、コ本作左、據
補任似非是

是に、コ本元、亦

ひ、原作の、今
從コ本

納言におはせしに譲り申給て。行幸につかうまつり給へりしこそいとめづらかに侍
 しか。おそく参り給て道にて車よりありて馬にのり給ひしかば。大將殿(源)よりはじ
 めて皆あり給へりしに。盛重といひしが左衛門尉なりしと。行利といふ隨身の陣に
 つかうまつりしを。あがり馬にのせてさきにぐせさせたまへりければ。なを大將に
 てわたり給ふとぞ見えける。このおに(源)おとうと(源)のおほいどの少將におはしけ
 る時。隆俊治部卿御むこにとり申さんと思て。その時めしひたる相人ありけるに。彼
 の二人いかに相したてまつりたると問はれければ。ともによくおはします。皆大臣
 にいたり給べき人といひけるを。いづれか世にはあひ給ふべきと問はれけるに。お
 とうとはすゑひろく。みかど一の人もいでき給ふべき相おはすと申ければ。六條殿
 をとり申たるとぞき侍し。そのかひありてみかど關白もその御末よりいでき給へ
 り。雪ふりのみゆきにおそく参り給ひて。雪見んとしもしもいそがれぬかなとよみたま
 へるこそいとやさしく昔の心ちし侍れ。よる女の許にわたり給へりけるに。かねて
 もなくて門に車のたえずたちければ。それをめしめてたまひければ。盛重といひ
 しが出でさせたまふ道に常はふしたりければ。かならずおくれ奉ることなかりける
 に。る中さぶらひと盛重とふたりとも具して出でたまひけるに。馬に乘れりける
 者のちりざりければ。る中人ともしたるついで松してうちおとさんとしけるを。たけ

きものゝふども多く具したりけるが御車によらんとしけるを。盛重御車のもとにて。皇后宮太夫殿のおはしますぞ。あやまちつかうまつるなといひければ。まどひありて。みな(或)まかりのきねといひければ。すぎ給ひにけり。つぎの日の夕暮に頼治といひしむさのおほいどのへ参りて。御門の方にて盛重たづねい出して。よべかしこく御恩かぶりて。あやまちをつかうまつるらんとて。かしまり申しに参りたる也。かくとはな申したまひそといひけれど。おほい殿に申したりければ。召してみきすゝめなどしたまひけるとぞ盛重が子盛道といひしは語りける。

ほりかはのながれ。

堀河の左のおと(母)の御子は。太郎にては師頼大納言とておはせし。御母中將實基の君の御むすめなり。文などひろくならひ給て。さえおはする人にておはしき。中辨より宰相になり給て。ひら宰相にて前の右兵衛督とて年ひさしくおはしき。年よりてぞ中納言大納言などに引つゝきて程なくなり給ひし。近衛のみかど東宮にたゝせ給ひしかば。母きさき(或)の御ゆかりにて大夫になり給へりき。歌をぞ口とくよみ給ける。早くけさうし給ふ女の。百首よみ給ひたらば逢はんといふありけるに。題をうちよりいだしたりけるに從ひて。よひより曉になるほどによみはて給たりけるに。女かくれにけるぞいとくちおしかりける。周防内侍がゆかりなりければ。

大納言、コ本元

ぞ、コ本作に
み、原作に、
コ本改のれ、
コ本の〇の、
コ本補の、
コ本補

軒、校イ本作新

の、據コ本補

内侍のとがにぞきく人申しける。大納言(或)の御子は師能の辨とて若狭守通宗のむすめのはらにおはしき。其わに弟に師教師光などきこえ給。三井寺に證禪已講とてよき智者おはしけるうせ給ひにけり。師光は小野宮の大納言能實のうまごにて小野宮の侍従など申すにや。大納言(或)のつぎの御弟も師時の中納言と申し。その母侍従宰相基平のむすめなり。それも詩などよくつくり給ふなるべし。大藏卿匡房と申し、博士の申されけるは。この君は詩の心得てよく作り給とぞほめきこえける。からの文ものし給へるとは兄(或)には劣り給へりけれど。日記などはかりなくかきつめ給ひて。この世にさばかり多く記せる人なくぞ侍るなる。その文どもはうせ給ひてのち鳥羽院めして鳥羽の北殿におかせ給へりけるに。權太夫とかきつけられたる櫃どもかざしらずぞ侍りける。宗茂菅軒などいひしがくさう(或)の上官なりし時は。この君弟子におはして車などかし給へりければ。外記の車は上臈次第にこそたつなるを。中將殿の車とて牛飼一つに立て、あらしひなどしける。歌よみにもおはして。兄の大納言(或)もこの君(或)も堀河院の百首などよみ給へり。爲隆宰相は大辨にて中納言にならんとしけるにも。宰相中將なれども大辨におとらず。何事もつかへ除目の執筆などもすれば。うれへといめなどし給ひける。大方の物の上手にて鳥羽の御堂のいけほり山つくりなど。とりもちてさたし給ふとぞきこえ侍りし。ゆゝしく

おはす、此下コ本有る字

歌、原作詩、據コ本改

北
うへをぞ多くもち給へるとうけたまはりし。六七人ともち給へりけるを夜ことに皆
おはしわたしけるとかや。冬は炭などをもちたせて火おこしたる。消えがたにはいで
つよもすがらありきたまひて。朝あいを午時などまでせられけるとぞ。さてそのう
へどもみな中よくていひかはしつゝ、ぞおはしける。この中納言の御子は中宮大夫師
忠のむすめのはらに師仲中納言とておはする。右衛門督(卿)のいくさおこしたりし
折。あづまに流され給ひて歸りのぼりておはす。とぞ。この兄ども少納言(卿)大藏卿
(卿)などきこゆるあまたおはしき。おほいどの(卿)の御子は入道中納言師俊とておは
しき。大辨の宰相より中納言になりて治部卿など申し、程に。御病によりてかしら
あろし給て。たうのもと入道中納言とぞきこえ給し。それも物よくならひ給て詩
などよく作り給ふ。歌よみにもおはしき。この兄おとうとだちかやうにおはする。と
はりと申しながらいとありがたくなん。延喜天曆二代のみかどかしこき御世におは
します上に。ふみ作らせ給ふ方もたへにおはしますに中務の宮(卿)又すぐれ給へり
けり。土御門殿(卿)堀河殿(卿)あひつぎて。御身のさえ文作らせ給ふ方もすぐれ給へ
るに。土御門殿は才すぐれ堀河殿はふみ作り給ふとすぐれておはすとぞきこえ給け
る。この大納言(卿)中納言(卿)だちかく仕へ給ひて六代かくおはする。いとありがた
くやんごとなし。この大納言中納言殿だちの詩も歌も集どもに多く侍らん。中納言

句々に、コ本作
佛、コ本元

の御子(卿)は少納言になり給へりし。後は大宮亮とぞきこえける。そのおとうとは
寛勝僧都とて山におはしけるころ。あめつちといふ女房のみめよきがうみきこえた
りければにや。みめもいとよきに心ばへもいとつきくしき學生にて。山の探題
などいふともしたまひけるに。あるべかしくいはまほしきさまにいとめてたくこ
そおはしけれ。説法よくし給ひけるに。人にすぐれてもきこえ給はざりしかど。ある
所にて阿彌陀佛釋し給ひしこそ。法文のかぎりし給へば。聞きしらぬ人は何とも思
ふまじきを。男も女も身にしみてたうとがり申て。聞きしりたるはかばかりのとな
しと思ひあへり。天台大師の經を釋し給ふに。四の法文にてはじめ如是より經のす
ゑまで句ごとと釋し給へば。そのながれをくまん人法をとかんそのあとを思ふべけ
ればとて。はじめには因縁などいひて。さまぐの阿彌陀佛をときてむかし物がた
りとときぐしつゝ。何事も我心より外のともものやはある。事の心をしらぬはいとかひ
なし。朝夕に上その寶をかぞふるになんあるべきなど説き給ひし思ひかけずうけた
まはりしこそ。世々の罪もほろびぬらんかしとおぼえ侍しか。

ゆめのかよひぢ。

堀河殿(卿)の公達大臣に成り給はぬぞくちおしき。春宮太夫(卿)は一の大納言にて時
にあひ給へりしに成り給ふべかりしに。ありふしあきあふ事なくえならてうせ給

さん、ヨ本元

ひにき。若くおはしける時に。御夢に採桑老といふ舞をし給ふとみて語り給へりけるを。物に心得ぬ人の宰相にて久しくやおはしまさんずらむとおはせたりけるとあさまし。さいさうといふとは有りともさい相とやは心得べき。桑といふ木をとるおきなといふ心とも。その木をとりて老いたりとも云ふにつきてぞ心うべきをかゝるひがどのある也。されば大納言はらだちてのたまひければにやありけん。さいひける人もとくうせにけり。又大納言殿も誠に宰相にて久しくおはしき。昔九條の右のおと(卿)の御夢をわしくおはせたりけんやうなること也。宰相にて久しくおはせざらましかば大臣にはなり給ひなまし。又おほい殿(卿)のいつき(理)をとりすへ給へりしかばにや。御末のつかさのぼりがたくおはすると申す人もあるとかや。九條殿(卿)の北の方の宮(理)もびんなきとなれど。それはたゞ宮ばかりにおはしき。これはいつきに居たまへる人をこめすへ申たまへりしたぐひなくや。業平の中將も夢かうつゝかの事にてやみにけり。道雅の三位もゆふしてかけしいにしへになどいひてしのびたるとにこそ侍りけれ。これはぬすみだしてとりすへ給へれど。業平の中將にはかはりてさきのなれば。さまであやまりならずやあらん。齋宮の女御なども又いつきのあり給ひてきさきになり給へるもおはせずやはある。また大臣までぬしのぼり給ひしかば末のかたかるべきにあらざるのづからのことなるべし。

御、據ヨ本補

堀河殿は僧子も多くおはしき。小野法印(卿)の山の座主(卿)などきこえ給き。姫君はふけの入道おと(卿)の北の方にておはせし。後には御堂の御前などきこえて御ぐしおろし給へりき。おとうとの姫君は子にし給ひて御堂をも譲り給へるは。堀河の大納言(卿)の子の辨(卿)に具し給へりけるとかや。それもさまかへておはするとぞ。又近衛のみかどの御は、女院(卿)も左のおと(卿)の御むすめのうみたてまつり給へるときこえ給き。この堀河殿は七十になり給ふ御とし。御子の堀河の大納言殿(卿)の右兵衛督と申し。父のおと(卿)の御賀せさせ給ふとて。長治元年しはすの廿日あまり堀河殿にて御賀したてまつり給とき侍しこそ。むかしのこと聞き侍るやうにおぼえ侍しか。その殿にまいりし僧のかたり侍りしは。瑠璃のみくにの佛の人のたけにおはしますかき奉りてこそ。かの岸のみりにかねの文字に七卷。たのの文字の御経な、そごうつしたてまつりて。僧綱有職など七人請せさせ給ひて供養したてまつらせ給。一家の上達部殿上人。太政のおほいどの(卿)内大臣と申し、より始めてわたり給ひて。御佛供養の後無人樂人など左右のまひなどしてのちには御あそびせさせ給ふ。御みききこえかはしなどして。いひしらずめてたく聞きたまへりしか。中院の大將(卿)若君におはしける。十八ばかりにて笙の笛吹き給ひけるこそ。その日のめづらしく涙もちとしつべきとに侍けれ。このおと(卿)よりは六條大臣殿

(顯)はさきにうせ給にしかば。その御子の太政のおと(顯)は堀河のおと(顯)に何事も尋ねならひ給て。親子のごとくなんぢはしける。それにひかれてこときんだち皆なびき申給けりとぞき侍し。

ねあはせ。

六條の右のおと(顯)の公達は。まづ堀河のみかどの御母中宮(顯)。その御はらに前坊(顯)と。堀河のみかどと。をのこ宮うみたてまつり給へり。女宮は媿子の内親王と申すは白河院の第一の御むすめ。伊勢のいつきにあはしまし。中宮(顯)うせさせ給にしかば出でさせいて。堀河のみかどの姉にて。御母きさきになぞらへて皇后宮に立たせ給ふ。院號ありて郁芳門院と申き。寛治七年五月五日あやめの根合せさせ給ひて。歌合の題。菖蒲。郭公。五月雨。祝。戀なん侍りける。こまかには歌合の日記などに侍るらん。判者は六條のおほい殿(顯)せさせ給へり。周防内侍戀の歌。

こひわびてながむるそらのうき雲や我が下もえの煙なるらん。

とよめりけるを。判者あはれつかうまつりたる歌かなと侍りければ。右歌人かちぬとてこのうた詠じてたちけるとなん。二位大納言(顯)の宰相におはせしにかはりて。孝善がひくてもたゆくながき根のとよめとめ侍るぞかし。永長元年八月七日かくれさせ給ひにき。そのとしおほ田樂とて都にも道もさりあへず神の社々この事

いなしさに、金葉作うかりしに

ひまなかりける。御事あるべくてなど世に申ける。この御ことを白河院なげかせ給ふともあろかなり。これによりて御ぐしあろさせたまへり。あさましなど申すもあろかなり。御めのと子のまだ若くて廿一とかきこえしも法師になり侍し。かなしさはことほりと申ながらも。わかきそらにいとあはれにありがたき心なるべし。日野といふところにすむとぞき侍し。次のとしの秋むかしの御事思ひ出で。ろのとも(顯)のぶの大とこ。

かなしさに秋はつきぬと思ひしをことしも虫のねこそなかるれ。

とよみて。筑前の御とて伯の母(顯)ときこえしがもにつかはしたりければ。筑前かへし。

虫のねはこの秋しもぞなきまざるわかれのとをくなる心ちして。

と侍りしを。金葉集にはきあやまりたるにやかきたがへられてぞ侍るなる。六條院に御堂たてさせ給ひて昔あはしまし、やうに女房さぶらひなどかはらぬさまにいまだあかれ侍るめり。御かなしみむかしもたぐひあれどかゝると侍らず。御庄御封などよにおはします様にしちかせ給へれば。すゑくのみかどの御ときにも改めさせ給ふとなくて。このころもさきの齋宮つたへておはしますとぞきこえさせ給める。

ありす川。

この中宮(璽)の姫宮。二條の大宮とて女院(璽)の御おとうとおはしまし。令子内親王とて齋院になり給ひて。のちには鳥羽院の御母とて皇后宮になり給ひて大宮にあらせ給ひにき。いと心にくき宮のうちと聞き侍しは。侍従大納言(璽)三條のおと(公)などまだ下臈におはせし時。月のあかりける夜さまやつして。宮ばらをしのびて立ち聞きたまひけるに。あるは皆ねいりなどしたるも有けり。この宮にいりたまひければ。西の對の方しづまりたるけしきにて。人々皆ねたるにやとおぼしかりけるに。奥の方にわざとはなくて箏のとのつまならしめて絶えくきこえけり。いとやさしくきこえけるに。北の方のつまなるつぼね妻戸たてたりければ。月も見ぬにやとおぼしけるに。うちに源氏よみて。柳こそいみじけれ葵はしかありなきこえけり。臺盤所のかたにはさくれ石まきて。らんごひろふ音などきこえけるをぞ。昔の宮ばらもかくやありけん侍りける。また古き歌よみ攝津の御といふ。又六條とて若きうたよみなどありて。折ふしにつけて心にくきごだち多く侍りけり。爲忠といひしが子の爲業といひしにや。いづれにかありけんかの宮による参りて御たちとあそびけるに。爲忠國にまかりける程なりけるに。年老いたる聲にて。八橋と天の橋立といづれまさりて覺えさせ給ひしとたよりに傳へ給へなどいひけるを。後に又あ

稗、賀茂齋院記
作賦

るごだち。かくとづてし給ふ人をばたれとかしりたまひたるといひければ。やつはしあまのはしだてなど侍りけるに心え侍りぬといひけるを。次の日よべ心えたりといはれしこそなをそのひとのとくおぼゆるなどいひけるをきして。津の御とりもあへず。心えずのことや。八橋などいはんからにわれとや心うべき。ながらの橋といはれこそわれとはしらめといひけるもおかしく。又土御門の齋院と申して。積子内親王と申しておはしき。その齋院は常にのりのむしろなどひらかせ給て。法文のとなど僧参りあひてたふとき事ども侍りけり。雅兼入道中納言などまいつつもてなしきこえ給けるとかや。歌なども人々まいりてよむ折も侍りけり。水のうへの花といふ題を。時の歌よみども参りてよみけるに。女房の歌とりくにおかしかりければ。木工頭俊頼もむしろにつらなりて。このうたは園基ならばかたみせんにてぞよく侍らんなどとりくにおぼめられけるとぞ。そのひとり堀河君とて顯仲伯のむすめのおはせしうた。

雪とちる花のしたゆく山水のさえぬや春のしるしなるらん。

また。春風にきしの櫻の散るまゝにいと咲きそふ浪の花かな。

この外もき侍りしかど忘れにけり。入道治部卿(璽)の嵐や峯をわたるらんとよみ

給その九次の歌なり。白河院歌どもめしよせて御らんじなどせさせ給ひけり。一院(一)の御むすめなればにや。殊の外にあるべかしくぞ宮のうち侍りける。女房中臈になりぬれば。みづからさぶらひに物いひなどはせざりけりとぞきこえ侍りし。この齋院(二)かくれさせ給ひてのち。そのあとに堀河の齋院(三)つぎてすみまたひけるこそ。むかしおぼしいて、中院の入道おと(四)よみ給ひける。

(新古今文庫) ありすがは同じながれと思へども昔のかけの見えはこそあらめ。

むらさきのゆかり。

中宮(五)の御せうとだち。男も僧もさまぐおほくおはしましき。太政大臣雅實のおと(六)と申し、は中宮(七)のひとつ御はらからにて。六條の右のおと(八)の太郎におはしき。その御母治部卿隆俊の中納言のむすめなり。久我のおほきおと(九)と申しき。いと御身のさえなどはおはせざりしかど。世に重く思はれたる人にぞおはせし。父おと(十)わがまゝなる御心にて。ひがくしきこともしたまひけるにも。このおとど参り給ひければと(十一)まりたまひけり。白河院もはぢさせ給へりけるとこそきこえ侍しか。醍醐より僧正の申さるゝなど侍りけるを。このおと(十二)に仰せられおはせければ。しる所などいくばくも侍らねば。さぶらふ者どもに申しつけて。しもづかさなどいふとはえ知り給はぬとになんなど侍りければ。いと(十三)はづかしくあるかなと仰

我、據二本補

せられけり。堀河のみかどの御時。子の少將とて入道右のおと(十四)石清水の舞人し給べかりけるに。中のみかどの内のおと(十五)少將とておはするは上臈なりけれど。一の舞は中院ぞ仰せられんずらんとおぼしけるに。知足院の大殿(十六)の關白におはするにみかども憚りて。宗能の一の舞し給へりければ。久我のおと(十七)聞きつけ給ひて。この少將(十八)をばよびとめて腹だちてこもり給ひければ。みかどもいたませ給ひて。心ゆるさむとて加階を給はせたりければ。しかあらばいてありかざらんも便なしとてよろこび申しなどせられけるに。關白どの(十九)對面したまひて。ことをついでなれば申すぞ。大饗にはおと(二十)尊者に申さむするなり。その山きこえしるべきなりなどありてたのみておはしける程に。その日になりて見せにつかはしたりければ。御物忌にて門さしておはしければ。俊明の大納言をぞ尊者にはよび給ひける。四條の宮(二十一)はむげに下りたる世かなとて泣かせ給ひけるとかや。臨時の祭の一の舞少將(二十二)のし給はぬやすからぬ心にてかくたがへ給ふなりけり。その入道右のおと(二十三)宰相の中將と申し、とき。實能のおと(二十四)の三位中將とておはせしこえて中納言になり給ひけるにも。太政のおと(二十五)院(二十六)をうらみ申給ふときかせ給て。中宮(二十七)のせうとにてうちのせさせ給ふすぢなきとかなと仰せられながら。長忠の宰相左大辨にて中納言になりたりけるを。子を辨になさんと申しけるものをとて。

中納言にて七八日ばかりやありけん。長忠をば大藏卿になして子の能忠をば辨になしてぞ。中院の宰相中將(建)は中納言になり給ふとうけ給はりし。待賢門院中宮にたゝせ給ひけるにや。白河院盛重とてありしを御使にて太政のおと(建)に。何ごとも思ふ事のかなはぬはなきに。上臈女房なん心にかなはぬことはあるを。思ひがけず上臈女房をまうけたることなん侍ると仰せられたりければ。いかなる人のかかるととひ給ふに。ほか腹の姫君のおはしける御事へけり。それを聞き給て御後見よびて。その姫君のもとへさたしやる事どもは怠たらぬかと問ひ給へば。更に怠り侍らずと申すに。今はそのさたあるまじとありければ。御使も後見もいと思はずに思へりけり。御かへりいかいと申しければ。うけ給はりぬとばかり申給けり。院(建)はともかくもの給はざりけりとなん。かやうに院にも關白にも憚り給はぬ人におはしけり。御心のあてなるあまりに。物の數もこまかに知り給はざりけるにや。おさめどのするさぶらひ人のもとに。きぬせさせにやれとありければ。二つが料にはふた匹なん遣しつると申しければ。一つをこそ二匹にてはすれとのたまひて驚き給けるに。内匠のすけなながしといふに問ひ給ければ。同じさまに申しけるにこそ。さはえ知らざりけるにこそとあれ給けれ。これをいゝ人語りあひけるをきいて。兼延といふ近衛舍人は。いづれの國の絹とかを。こまかにきりなどせさせ給ふ所もおはします

ものをなどいひけるいとほづかしくこそ。このおほいまうちぎみ(建)おこりごちわづらひ給ひけるに。白河院より平等院の僧正(建)をつかはして祈らせ給けるに。おこたりたる布施に馬をひき給ける。大方いひしらぬ悪馬になむ侍ければ。院きこしめして。われこそ布施も得べけれと。盛重といひしを遣はして仰せられければ。院にありがたきもの參らせんとて。武藏の大徳隆頼がつくりたる小弓の。ゆづかのしもひとひねりしたるを取りいで。漆のきらめきたるさしてすりまはして錦のゆづかとりすて。みちのくに紙してひきまきて。錦の袋にも入れず唯みちのくに紙につゝみてたてまつられたりければ。いとめづらしきものなりとたちかへり仰せられけるとぞき侍りし。

にひまくら。

このおと(建)の御子は、大納言顯通と申して。父おと(建)よりもさきにうせ給にき。その御子はいまの内大臣雅通の大將と申なるべし。この大將の御母は、よしとしの治部卿のむすめにやおはすらん。又この御兄につのかみ廣綱のむすめのはらに。山の座主明雲權僧正とていまにおはすなるこそ。世の末にはかやうなる天台座主はおはしがたくうけ給はれ。我が道の法文をも深く學び給。かたぐ世にたふとくて御心ばへも重くおはするにや。山のうへこそどりてもちる奉りたるとかや。うちつゝきた

は、據本補

もつ人ありがたくきこえ給に。大衆など鐘ならしておこる事だに侍らぬとかや。又太政のおと(囀)の御子にては。右大臣雅定と申してさきにも舞人のと申し侍る。中院のおと(囀)とておはしき。御母は加賀兵衛とかいひしがいるうとにて。下らう女房におはせしかど。兄の大納言(囀)よりもおぼえもおはしもてなし申給き。このおと(囀)はさきもおはして。公事などもよくつかへ給けり。笙の笛などすぐれ給へりける。時元とて侍しを少しもたがへずうつし給へるとぞ。まじりまるといふ笛をも傳へ給へり。まじりまるとは。からの竹やまとの竹の中にすぐれたるねなるをえらび作りたるとなん。まじりまるといふ笙の笛は二つぞ侍るなる。時元が兄にて時忠といひしも作り傳へ侍るなり。むらといひて稻荷祭などいふ祭わたるもの、吹きてわたりける笛の。ひききことなる竹のまじりてきこえ侍りければ。さじきにて時忠よびよせて。かゝるはれには同じくはかやうの笛をこそ吹かめとて。我が笛にとりかへて我をば見知りたるらん。後にとりかへんといひければ。むらのをのこ喜びて。皆見知り奉れりとしてとりかへたりけるを。すぐれたる響きありける竹をぬきかへて。えならず調べたてゝたびたりければ。喜びてかへしえてなん侍りける。そのまじりまるとは。時忠が子の時秀といひしが傳へ侍りしを。子も侍らざりしかばこの比はたれか傳へ侍らん。時忠は刑部丞義光といひし源氏のむさのこのみ侍りしにを

まる、據ニ本補

れば、原作ゆで、據ニ本改

貞、ニ本作瓦

しへて。その笛を元よりとりこめて侍りけるほどに。義光あづまの方へまかりけるに。時忠もいかでか年ごろのほいに送り申さいらんとてはるく(囀)と行きけるを。この笛のよを思ふにやとや心得けん。我が身はいかでも有りなん。道の人にてこの笛をいかでか傳へざらんとて返したびたりければ。それよりこそ暇こひてかへりのぼりにけれ。その笛をかくたしなみたれども。時元若かりける時。武能といひてえならず笛調ぶる道のものありけるが。年たけてよる道た(囀)しきに。時元手をひきつつまかりければいとうれしくおもひて。えならず調ぶるやうども傳へて侍りければにや。いと殊なるねある笛になん侍るなる。この右のおと(囀)かゝる傳へおはするのみにあらず。家の事にて胡飲酒まひ給ふといみじく。その道得給ひて心殊におはしける。その舞も資忠とてありし舞人の政連といひしといども。祇園の會にはやしの日とか殺されにければ。忠方近方などいひしもまだいといはけなくてならひも傳へねば。太政のおと(囀)の忠方にはをしへ給へるぞかし。しかあれどもこのおほいどの(囀)ばかりはえ傳へざるべし。政連は出雲に流されて彼の國の司のくだりたるにも教へ。又子の友貞とかいふも京へのぼりて。顯仲とかいひし中納言にもをしへなどすと聞きしかども。このおほいどの(囀)の傳へ給へるばかりはいかでか侍らん。兄の忠方は胡飲酒をつたへ。弟の近方は採桑老を天王寺の公貞といひ

の原作、據
本改

しに傳へて。この比はその子どもの兄弟筋別れて舞ひ侍るとなん。忠方近忠落躰といふ舞し侍りしは。おとうとは兄のかたをふまぬさまに舞ひ侍りしはめづらしき事に侍りしを。子どもはいかゞ侍るらんとゆかし。この右のおと(彌)は御心ばへなどすなほにていとらうある人にておはしけるうへに。後の世の事などおぼしとるる心にや。わづらはしきともおはせていとあかしき人にぞおはせし。まだ若くおはせし比にや伊豫のごといふ女をかたらひ給けるに。ものの給たえてほどへぬほどに。山城の前の司なる人になれぬとき、てやり給へりける御歌こそ。いとらうありてあかしくき侍しか。

(子殿) まとにやみとせもまたて山城の伏見の里ににひ枕する。

と侍りける。むかし物がたり見る心ちしていとやさしくこそうけ給はりしか。おほかた歌よみにおはしき。殿上人におはせしとき石清水の臨時の祭の使したまへりけるに。その宮にて御神樂などはて、まかりいで給ひける程に。松のこずゑに郭公のなきけるを聞きたまひて。俊頼の君の陪從にておはしけるに。むくのかうの殿これはき、給ふやと侍りければ。思ひかけぬ春なけばこそはべめれと心とくこたへ給けるこそ。いとしもなき歌よみ給ひたらむにははるかにまさりてきこえける。四條中納言(彌)このれうによみおき給ひけるにやとさへおぼえて。又き、給ひておどろ

松、原作まへ、據
本改

右、原作左、據
本及補任改
は、據本補

かし給ふもいうにこそ侍りけれ。かやうにおはせん人いとありがたく侍り。出家などし給ひしこそいと清げにめてたくうけ給はりしか。べちの御やまひなどもなくてたこの世はかくて。後の世の御ためとて右大臣左大將かへしたてまつりて。かはり奉らんなどいふ御まうけもなくて。中院にてかしらおろしてこもりゐたまへりしこそいと心にくく侍しか。御子もおはせねば。兄の御子今の内のおと(彌)。又雅兼の入道中納言の御子定房の大納言。養ひ給へるかひありて位高くをのくなり給へり。御のうどもをつぎ給はぬぞくちあしく侍る。内のおと(彌)の御子も少將(彌)とてふたりおはすなり。

武藏野の草。

六條の右のおと(彌)は大方きんだちあまたおはしき。太政のおと(彌)につぎ奉りては大納言雅俊とておはしき。御母は美濃守良任ときこえしむすめの腹なり。京極に九體の丈六つくり給へり。その御子ははらゝに男女またおはしき。伊豫守爲家のぬしのむすめのはらに神祇伯顯重と申しき。もとはさきの少將肥前のすけにてぞ久しくおはせし。そのおなじはらに四位の侍從顯親と申して後は右京權太夫播磨守などきこえき。同じ御はらに上野守顯俊とておはしき。中宮(理)の御おほぢにやおはすらん。憲俊の中將ときこえしのちには大貳になり給へりき。百良と御わら

憲、二本作兼

け、據ニ本補

は名きこえ給き。又摩尼ぎみときこえ給し。左馬權頭(禮)など申き。この外にも上野。越中(禮)などになり給へるきこえき。又その子も多くおはするなるべし。大納言の同じ御腹に中納言國信と申しておはしき。堀河院の御おぢの中に殊に親しくさぶらひ給けりとぞきこえ侍りし。うたよみにおはして百首の歌人にもおはすめり。この中納言の姫君おほい君(禮)は。近くおはしまし、攝政殿(禮)の御母二位と申すなるべし。次には入道どのにさぶらひ給ひてさりがたき人におはすなり。第三の君は今の殿(禮)の御母(禮)におはします。三位のくらの得給へるなるべし。うちつゝき二人の一人の御おほぢにていとめてたき御末なり。この中納言の御子に四位の少將顯國とおはしき。その母はさきの伊豫守泰仲のむすめときこえき。その少將いとよき人にて歌などよくよみたまひき。とくうせたまひにき。少將の一つはらの弟にやおはしけん。備前々司(禮)。修理權太夫(禮)。越後守(禮)などきこえ給き。又六條殿(禮)の御子に顯仲伯ときこえたまふ大納言(禮)。中納言(禮)などの兄にやおはしけん。その母は肥前守定成のむすめの腹にやおはすらん。歌よみ笙の笛の上手におはしけり。公里といひしが調子をすぐれてつたへたりけるをうつし習ひ給へりけるとぞ。その御子淡路守(禮)。宮内大輔(禮)などきこえき。覺蒙法印とて法性寺殿(禮)の佛のよくにたのませ給へるおはしき。僧子もあまたおはするなるべし。女子は堀河の君。兵

衛の君などきこえ給て。昔歌よみにおはすときこえ給し。姉君はもとは前齋院の六條と申けるにや。金葉集に。

露しげき野べにならひてきりくす我がたまくらの下に鳴くなり。

とよみたまへるなるべし。堀河とは後に申けるなるべし。かやうなる女歌よみは世にいでき給はんとかたく侍べし。又やまもゝの大納言顯雅とて六條のおほい殿の御子おはしき。その末いとおはせぬなるべし。御むすめ鳥羽の女院(禮)の皇后宮の時みくしげどのとおはせし。女院の御せうとの肥後の前司ときこえしは。大納言の聲におはせしかばなるべし。その大納言の御車の紋こそきらくかにとをむろく侍りけれ。大かたばみのふるき繪に弘高金岡などかきたりけるにや。それを見てせられけるとぞ。今はのり給ふ人もおはせずやあらん。物などかき給ふともおはせざりけるにや。行尊僧正の許にやり給へりけるふみの上書には。きんざうはうとうゐんの僧正の御坊にとぞありける。かんならばきん「く」ざうなくともあるべけれど。えかき給はぬ餘りにやありけん。言のはもえきこえ給はざりけり。たゞ車をぞなべてよりよくしたて。うしざうしききよげにてありき給ひける。車などよくするはまさなきことして。はげあやしくなれども俄にかきすゑたるこそ。しかるべき人はさもすると中ともあるべし。これも又一つのやうにてつやくかにしたまひける

人、原作、今從
校本、コ本元、恐
衍

よ、コ本元

等、原作とぞ、據
校本改〇て、據
コ本補

お、コ本元、下文
同

か、原作も、據
本改〇三井寺
に、コ本此下有
て字

より、據コ本補

にこそ。風などのおもくおはしけるにやひがごとぞつねにしたまひける。雨のふるに車ひき入れよといはんとては。車ふる時雨さしいれよと侍りければ。車のさまさまさらよりふらんと恐ろしかるべしなど思ひあへりける。かやうのことをほりかはの院きこしめして。ひがごとこそふびんなれ。いのりはせぬかと仰せられれば。御返事申されけるほどに鼠のはしりわたりければ。されば等身の鼠作らせ候ふと申されければ。おほかたふにもたらずとなん仰せられける。これは信濃守伊綱の女のけらにおはするなるべし。同じはらに信雅のみちのおくの守とておはしき。加賀守家定とてひさしくおはせしが。後にみちのおくにはなり給へりしなり。その子は成雅の君とて。知足院の入道おと、寵し給ふ人におはすとときこえき。後には近江の中將ときこえし程に。都の亂れ侍りしあり。左大臣殿(顯)のゆかりに法師になりて。越の方に流され給ふときこえし。歸りのぼり給へるなるべし。その成雅の中將の兄にか弟かにて。房覺僧正とて三井寺に。げんざおはすとときこえ給。又六條殿(顯)の御子に。因幡守惟綱のむすめの内侍のはらに雅兼の治部卿と申す中納言おはしき。さいがくすぐれ給ひ。公事につかへ給とも昔もあり難き人になんおはしける。詩つくり歌よみにおはしき。高くもいたりたまふべかりしを。御やまひにより出家し給て久しくおはしき。鳥羽院大事仰せられおはせんとて。常はめしいてより出

など、據コ本補
の、コ本元

琴、コ本作琵琶

めんせさせ給ふ折ども侍りけり。この入道中納言(顯)のきんだちぞこの御ながれには上達部などにてもあまたきこえ給。右中辨雅綱ときこえ給ひし。よく仕へ給とて四位少將などにめづらしくなりなどし給へりし。とくうせ給にき。その御おとうとに。能俊の大納言のむすめの御はらに當時中納言雅頼ときこえ給こそ。入道治部卿(顯)の御子にはふみなどつたへ給らめ。家をつぎ給へる人にこそ。同じ御はらにその次に大納言(顯)と申は。入道右大臣(顯)の御子にし給ひて高きのぼり給へるなるべし。その御弟四位少將通能と申なるは琴ひき給ふときこえ給ふ。清暑堂のみかぐらにもひき給けるとなん。師能の辨とておはせしやしなひ申給へるとき、侍しこれにやおはすらん。六條のおほいどの(顯)のきんだちなど僧も多くおはすれどさのみ申つくしがたし。山に相覺僧都とて大原にすみたまふおはしき。醍醐には大僧正定海とて讃岐のみかど(顯)の護持僧におはしき。ならには山科でらの隆覺僧正。東大寺の覺樹僧都と申し、は東南院ときこえ給き。皆やんごとなき學生におはしき。又覺雅僧都とておはしき。歌よみにぞおはせし。すゑの世の僧などさやうによまんは有がたくや侍らん。白河院のいとしもなくおほしめしたる人にておはしけるに。俊頼のきみ金葉集えらびて奉りたりける始めに。貫之春立つとをかすがのといふ歌。そのつぎに覺雅法師とていり給へりけるを。貫之もめてたしと

も、二本元

を、據二本補

香、二本作音

いひながら。三代集にももれきてあまりふりたり。覺雅法師もげにももつゝき
おぼえずなど仰せられければ。ふるき上手ども入るまじかりけり。又いとしもなく
おぼしめす人のぞくべかりけりとて。おぼえの人をのみとりいれてつぎのたび奉り
ければ。これもげにともおぼえずと仰せられければ。又作りなをして源重之（源重之）をはじ
めに入れたるをぞとめさせ給ひけるは。かくれて世にもひろまらで。中たびのが
世にはちれるなるべし。又山におはせし妙香院の清覺内供などきこえ給し。その内
供の一つ腹にやはたの御はらにや治部大輔雅光ときこえ給し歌よみおはしき。人
に知られたる歌多くよみ給へりし人ぞかし。（金葉上）あふまては思ひもよらず。又身（御身）をうち
川の橋柱などきこえ侍めり。その御子には實寛法印とて山におはす。六條殿（六條殿）の御
子は又あとも丹波の前司（前司）。和泉の前司（前司）など申しておはしき。はかくしき
すゑもおはせぬなるべし。

もしほのけぶり。

給と、二本此下有
有ぞ字

二條のみかどの御時近くさぶらひ給ひて。かうの君とかきこえ給しは。殊の外にと
きめき給と。きこえ給しかば。内侍のかみになり給へりしにやありけん。たゞまた
かうの殿など申にや。よくもえうけ給はり定めざりき。それこそは六條殿（六條殿）の御子
の季房のたんばの守の子に。太夫（太夫）とか申して伊勢にこもりたるたまへる御むすめ

給、二本元

ぞ、二本作こそ

と、二本元

侍り、二本作い
へり

ときこえ給しか。かの御とき女御きさきかたぐうちつゝき多くきこえ給しに。御
心のはなにて一時のみさかりすくなくきこえしに。これぞときはにきこえ給て家を
さへにつくりて給はり。世にもてあつかふ程にきこえ給て。みかどの御なやみに
さへとがおひ給しぞかし。御めのとの大納言の三位なども。いたくな参り給ひそな
ど侍りけるにや。ある折は常にも候ひ給はずなどありけるとかや。かつは御おぼえ
の事など祈りすぐし給へる方もきこえけるにや。かつは聞きにくくもきこえけると
ぞ。おもらせたまひける程に。年わかき人なればおはしまさいらんにはいかにもあ
らんずらん。御消息ども返し参らせよとありければ。なくくとりつかねて参らせ
ければ。信保などいふ人うけ給はりてかきあつめさせたまへる。もしほのけぶりと
なりけむいかに悲しくおぼしけん。御ぐしのたけにあまり給へりけるも。そぞお
ろさばやとぞきこえけれど。心づよき事かたくて月日へけるほどに。御心ならずも
やありけん昔にはあらぬことどもいできて。若き上達部の時にあひたる所にこそむ
かへられ給ひてときこえ侍るめれ。めし返させ給ひけん。やんごとなきみづぐきの
あとも今やおぼしおはすらんいとかしこくこそ。

六條のおと（六條）いとあさましくすゑひろくおはします。昔よりふぢなみの流れこ
そみかどの御おぼぢにてはうちつゝき給へるに。ほりかはの院の御おぼぢにめづ

返、二本作よせ
○ぞ、原作よせ
校本改
も、二本元

は、據コ本補

部、原作正、據コ本改

らしくかく末さへひろごらせ給へる。一の人の御おほちうちつゞきておはしますめり。六條殿(顯)の御むすめは。ほりかはの院の御時承香殿と申しけるは。女御の宣旨などはなかりけるにや。醍醐におはすときこえし近くうせ給にき。堀河殿(顯)。六條どの(顯)の御おとうとに中宮太夫師忠の大納言おはしき。その御は、堀河のよりむねの右のおとりの御むすめなり。この大納言の御子は左馬頭師澄とて千日の講ひさしくおこなひ給てのちは大藏卿と申き。その御おとうとは師親の四位の侍従など申しておはしき。また大納言(顯)の御子には仁和寺の大僧正寛遍と申おはしき。備中守政長まさながのむすめの腹にやおはしけん。たかまつ高の院の中宮とて御おしあるさせ給ひし戒の師におはしけり。東寺の長者にて近くうせたまひにけり。中宮太夫(顯)の御弟廣綱とておはしき。四位までやのぼり給けん。攝津の守など申しにや。また堀河殿(顯)などの同じはらにやおはしけん。仁覺大僧正と申し、山の座主おはしき。それは中宮太夫(顯)の兄にやおはしけん。又ことばらにやましなてらの實覺僧都など申ておはしき。莊嚴院の僧都と申し、なるべし。

今鏡第八

みこだち。

源氏のみやすどころ。

みかどの御おほちにはおはせねど。東宮(仁)や宮だちの御母におはせしは後三條院の女御にて。侍従の宰相基平の御むすめ(孫)こそおはせしか。その宰相は小一條院の御子におはしき。その源氏のみやす所御名は基子女御とぞ申し。その御せうとにては春宮太夫季宗大藏卿行宗など申ておはしき。みな三位のくらゐにぞおはせし。大藏卿は八十ばかりまでおはせしかば近くまできてえ給き。歌よみにおはしき。ふたりながらからの文なども作り給とぞき、侍し。良頼の中納言のむすめの腹のきんだちなり。女御(孫)もおなじ御はらからにはす。又そのはらに平等院の僧正行尊とて。三井寺におはせしこそ名高き験者にておはせしか。少阿闍梨など申しける折より。大峯葛城はさることにてとをき國々山々など久しく行ひたまひて。白河院鳥羽院うちつゞき護持僧におはしき。仁和寺の女院(顯)の女御まいりにや侍りけん。御もの、けその夜になりておこらせ給て俄に大事におはましましけるに。この僧正・祈り申たまひければほどなくおこたらせ給て。御車にたてまつりて出てさせ給にけるあとに。ものつきにもものうたせてるさせ給へりけるこそ。いとめてたく侍りけれと

母、コ本作はら

し、コ本元

僧正、コ本此下有の字

傳へうけ給はりしか。僧正歌よみにおはして代々の集どもにも多くいりたまへるとこそき侍れ。笙のいはやにて。

(金葉集)

草のいほを何露けしと思ひけんもらぬいはやも袖はぬれけり。

などよみ給へり。傳へきく人の袖さへまぼりつべくなんきこえ侍る。大峯にて後冷泉院うせさせ給て世のうきことなど思ひみだれてこもりゐて侍りけるに。後三條院

(金葉集)

くらむにつかせ給てのち。七月七日まいるべきよし仰せられければよめる。

(金葉集)

などよみたまへり。歌よまさらんほいなかるべき事なるべし。いと御心もすま

まさり給けんかし。手かきにもおはしてかなの手本など世にとまり侍るなり。こ

とはらへにも勸修寺僧正(經)光明山の僧都(經)など申ておはしき。その女御(經)の

御はらに御子あまたおはしき。東宮(經)と申して延久三年二月にむまれ給ひて。同

四年十二月に御年ふたつと申し、東宮にたち給き。永保元年八月に御元服せさせ

給。應徳二年十一月八日十五におはしまし、かくれさせ給ひにき。平等院の僧正

(經)は女御の御せうとなれば。東宮の御忌にこもり給ひて御はてすきて人々ちりけ

るに。常陸のめのおくり給ふときこえ侍りし。

(新千載)おもひきや春のみや人なのみして花よりさきに散らむ物とは。

と原作く、は原
作ぞ、り原作る、
並據コ本及著聞
集二改
り、原作る、今從
コ本、下同

本、コ本元

の、據コ本補

け、校本作つ
は、コ本作も

へり、コ本作し

金葉集云々、宜
参考増鏡おどる
の下

しらず、據コ本
補○く、原作き、
據コ本改○く、
原作し、據コ本
改

とよみ給ひたりける。返し御めのと。

花よりもちりへになる身をしらてちとせの春と頼みけるかな。

とぞき侍りし。これは白河院の異はらの御ちとうと。後三條院の第二の御子也。

東宮(經)とちなじはらに第三の御子おはしき。輔仁親王と申き。延久五年正月にむま

れ給へり。承保二年十二月に親王の宣旨かぶり給ふ。この御子はさえおはして詩な

どつくり給ふと。むかしの中務の宮(經)などのやうにおはしき。歌よみ給ふともす

ぐれ給へりき。圓宗寺の花を見たまひて。

(金葉集)うへをきし君もなき世に年へたる花や我が身のたぐひなるらん。

とよみ給へることいとあはれにきこえ侍りしか。かやうの御歌どもむくのかみ(經)の

えらびてたてまつれる金葉集に輔仁のみことかきたりければ。白河院はいかにこ

に見むほど。かくはかきたるぞとおほせられければ三宮とぞかきたてまつれる。御

中らひはよくもおはしまさへりしかども。御ちとうとなればなるべし詩などは數

しらずめでたく侍る也。よろこびもなくうれへもなく世上の心とかや作り給へり

けるを。中御堂(經)と申しておはせしがのたまひけるは。うれへこそあれとの給はせ

けれど。位には必しもみかどの御子なれどつき給ふことならねば。ものしり給へる

人はなげきとおぼすべからず。かの仁和寺のみや(經)の利口にこそあれ。何事かは御

のぞみもあらむな。

花のあるじ。

三宮の御子は。中宮太夫師忠の大納言の御むすめのはらに。花園の左のおとと(註)とておはせしこそ。ひかる源氏などもかゝる人をこそ申さまほしくおぼえ給へし。か。まだおさなくおはせし程は若宮と申しに。御能も御みめもしかるべき事と見え。人にもすぐれ給て。常にひきものふき物などせさせ給ひ。又詩つくり歌などよませ給けるに。庭の櫻さかりなりける頃濃き紫の御指貫に直衣すがたいとあかしげにてわれもよませ給。人にもよませ給と。

(玉座下) おしと思ふ花のあるじをきながら我がもの顔にちらす風かな。

とよみ給たりければ。父の宮見たまひて。まろをきながら花のあるじとはわか宮はよみ給ふかなどあいし申し給けるとぞ人のかたり侍りし。御とし十三になり給ひしときうひかぶりせさせ給ひしは。白河院の御子にし申させ給て。院にて基隆の三位の播磨守なりしはつ元結したてまつり。右のおとととてこのおとと(註)おはせし御かうぶりせさせたてまつり給けり。御みめの清らかさおとなのやうにいづしかおはして。見たてまつる人よろこびの涙もこぼしつべくなむありける。元永二年にや侍りけん。なかの秋のころ御とし十七とや申しけん。はじめて源氏の御姓たまは

一、二本元

ら、二本作け

りて御名は有仁ときこえき。やがてその日三位中將になり給て。そのとしの十一月のころ中納言になり給てやがて中納言中將ときこえき。むかしのみかどの御子。一のきんだちなどおはすれど。かく四位五位などもきこえ給はではじめて三位中將になり給ふ。としのうち中納言中將などはいとありがたくや侍らん。又その次の年保安元年にや侍りけん大納言になり給ひて。年をならべて右近大將かけたまひき。世の人宮大將など申て。みゆき見る人はこれをなん見ものにしわへることに侍し。白河の花見の御幸とて侍りし和歌の序は。この大將殿かきたまへりけるをば。世こそりてほめきこえ侍き。

低枝折りてさしげもたれば紅蠟の色手にみてり。落花をふみて佇立すれば紫麝の氣衣に薫す。

などかき給へりける。その人のしたまへるとおぼえて。なつかしう優にはべりけるとぞ。御歌もおぼえ侍る。

(千原上) かけきよき花のかみと見ゆるかなのどかにすめる白川の水。

とぞき侍し。管絃はいづれもし給けるに。御ひは笙のふえぞ御あそびにはきこえ給。すぐれておはしけるなるべし。御手もよくかき給ひて色紙形てらくの額などかきたまへりき。中納言になり給し折にや三の御子(註)かくれ給ひしに。法皇(註)

に、原作は、據一本改

の御子とて御服などもし給はざりけるとかや。又うすくてやあはしけむ。院うせさせ給しにぞ色こくそめ給へりける。まだつかさなどもきこえ給はざりし程は。常におぼしいだしけるにや。院の御忌のほどまいり給ひて有ける時。南おもてのかたにひとりあはしてさめくと泣き給ひて。御手して涙をふりすてつゝあはしける。ものゝはさまよりのぞきてあはれなりしと人のかたり侍し。實能のおといは北の方のせうとにおはしてあさ夕なれあそびきこえ給ひければ。左兵衛督など申けるほどにや。五月五日大將殿(註)。

(金指) あやめ草ねたくも君がとはぬかなけふは心にかゝれと思ふに。

など心やりたまへるもいとなつかしく。この大將殿(註)はことの外にえもんをぞこのみ給て。上のきぬなどの長さ短さなどこまかにしたゝめ給ひてそのみちにするれたまへりける。大方むかしはかやうのともしらで。さしぬきもなかふみてえぼうしもこはくぬることもなかりけるなるべし。この頃こそさびえぼうし。きらめきえぼうしなどありくかはりて侍るめれ。白河院は御さうぞくまいる人など。おのづからひきつくるひなどし参らせければ。さいなみ給けるときこえ侍し。いかにかはりたる世にかあらむ。鳥羽院この花園のおと。あほかたも御みめとりくに姿もえ

實、原作寛、據、本改

く、コ本作きて
きこえ、原作き
きこえ、據、本改

もく、據、本補

もいはずあはします上に。こまかにさたせさせて。世のさがになりて肩あて。腰あて。えぼうしとめ。かぶりともめなどせぬ人なし。又せでも叶ふべきやうもなし。かうぶりをえぼうしのしりは雲をうがちたれば。さらずはあちぬべきなるべし。時に従へばにや。この世に見るには。袖のかゝり袴のきはなごつくるひたてたるはつぎつぎしく。うちとけたるはかひなくなん見ゆる。えもんの雑色などいひて藏人になれりしもこの御家の人。うへの御せうとの君たち若殿上人どもたえず参りつゝ遊びあはれたるはさるとにて。百太夫と世にはつけて。かげぼしなどのとくあさ夕なれつかうまつる。ふきものひきものせぬはすくなくて。ほかより参らねどうちの人にて御あそびたゆることなく。伊賀太夫。六條太夫などいふすぐれたる人どもあり。歌よみ詩つくりもかやうの人どもかざしらず。越後のめのと。小大進などいひて名高き女歌よみ家の女房にてあるに。公達まいりてはくさり連歌などいふことつねにせらるゝに。三條の内のおと(註)のまだ四位少將などの程にや。

ふきぞわづらふ賤のさしやを。

とし給ひたりけるに。中務少輔實重といふもの。つねにかやうのとにめしいださるる者にて。

月はもれ時雨はとまれともふには。

たり、二本此下
有けん、二本此下
○時、二本此下
有に字、二本元、
いはれ、二本元、
當行、二本作の

とつけたりければ。いとよくつけたり。などかんじあひ給ける。又ある時。

と「いはれ」はべりけるに大將殿(註)。

やへざくら秋のもみぢやいかならむ。

とつけさせ給ひけるに越後のめのと。

しぐるゝたびに色やかさなる。

とつけたりけるも後までほめあはれ侍けり。かやうなること多く侍けり。その越後
は。さこそ(金葉多)はかりの人はつられれといふうたなどこそやさしくよみて侍りけれ。か
やうなることかざしらずこそきこえ侍りしか。

ふししは。

大將殿(註)年わかくおはして。何ごともすぐれたる人にて御心ばへもめてにおはし
き。昔はかゝる人もやおはしけん。この世にはいとめづらかに。かくわざと物語など
に作りいだしたらんやうにおはすれば。やさしくすきくしき事多くて。これかれ
袖よりいろくのうすやうにかきたる文のひき結びたるが。なつかしき香したる二
つ三つばかりづゝとりいだしてつねにたてまつりなどすれば。これかれ見給ひて。
あるはうたよみ色このむ君だちなどに見せあはせ給てこの手はまさりたり。歌など

は、據二本補

き、原作て、據
本改

少、二本此上有

ふき、據二本補

は、二本元、恐衍

ほ、二本作を

もとりくゝにいひあへり。あるは見せ給はぬもあるべし。又兵衛のかみ(註)や・少將
(註)だちなどまいり給へば。かたみに女のとなどいひあはせつゝ。あまよのしづかな
るにもかたらひ給ふちりもあるべし。月あかき夜などは車にて御隨身ひとりふたり
ばかり何太夫などいふ人とも。かはるゝかちよりあゆみ御車にまいりかはり
つゝ。ふるき宮ばら。あるは色このむ所々にわたり給つゝ。人にうちまぎれてあそび
たまふに。びは笙のふえなどは人もきしりなんとて。ことひき笛(註)ふきなどぞし給
ける。あるちりは歌よむ御だちまうでかよひける中に。ほいなかりけるにや女(註)

(千載歌) かねてより思ひしものをふししはのこるばかりなるなげきせんとは。

とて奉りたりければ。やがてふししはとつけ給て折ふしには音づれ奉りければ。今
宵はふししは「は」音すらむものをなどあるに。すぐさず歌よみて奉りなどして。い
たきものとしてつねに申かはす女ありけり。土御門のさきのいつき(註)の御もとに中
將の御とかいひけるものとかや。北の方は手かき歌よみにおはしていと云なる
御中らひになむありける。あまりほかにやおはしけんときこえしは。鳥羽院くらゐ
の御時に。大將殿(註)菊をほりにやりて奉り給ひけるに。うすやうにかきたる文のむ
すびつけて見えければ。みかど御覽じつけて。かれは何ぞ取りて參れと藏人に仰せ

られけるに。おほい殿はふと心えて色もかはりて。うづぶしめになり給へりけるほどに。みかどひろげて御覽じければ。

(新古今歌)

九重にうつろひぬとも菊の花もとのまがきを忘れざらん。

とぞありける。きざり(躰)の御姉におはすれば。ときく参りかよひ給ふにつけつ。しのびてきこえ給となどもおはしけるなるべし。昔のみかどの御世にもかやうなる御とはきこえて。なをくなど仰せられければ。餘りなるとも侍りけるやうにこれもおはしけるにや。殿(御)のいろこのみ給など大方うへはのたまはせず。へだてもなくてふみどもとりいれて。歌よむ女房にかへしせさせなどし。上のめのとの車にてぞ女をくりむかへなどしたまひける。殿もこゝかしこにありき給ける。家の女房ども。おとこのもとよりえたるふみをも。その北の方に申しあはせて歌の返しなどし給ひける。小大進などいふ色好みの。おとこのもとよりえたる歌とて申しあはせけるあまたきこえしかどわすれておぼえ侍らず。按察の中納言とかいふ人のおほやうなるも。歌などつかはしけるかへりごと(新古今歌)に小大進。

(新古今歌)

夏山のしげみが下の思ひ草露しらすりつこゝろかくとは。

などき侍りし。口とく歌などおかしくよみて。和泉式部などいひしものやうにぞ侍りし。伊豫の御とて侍りしも中院の大將(親)の若くおはせしほどにものなどの

が、二本作の

たまひて。後には山城とかいふ人に物いふとき給ひて。さきにも申し侍りつるみとせもまたてといふ歌よみ給へりしぞかし。かやうに色このみたまへるごだち多くこそきこえ侍しか。

月のかくる山のは。

このおと(御)の御子のおはせぬぞくちあしけれど。かへりてはあはれなる方もありてなごりおしく侍りて。われものたまはせけるは。いと(新古今歌)しもなき子などのあらむはいとほいなかるべし。村上のみかどのすゑ。中務の宮(親)のうまごといふ人々見るに。せさるとなき人々どもこそ多く見ゆめれ。わが子などありともかひなかるべしなどぞ有ける。姫君こそおはすなれ。北の方の御はらにはあらで。うちにつかひ給へりけるわらはの多くの人のなかに。いかなるすくせにかうみきこえたるとなん。上西門院(親)にぞおはすときこえ給。とびはなどもひき給ともしられておはしけるに。月あかき夜のびてかきならし給けるよりあらはれ給けるとかや。又ことばらに女君きこえ給は。たかまつの院(親)に参りかよひ給ひて。殿上人の車などつかばして迎へなどせさせ給ふとかやぞきこえ給。大將殿(親)いつれの程にか侍りけん。年頃すみたまひしれんぜい東の洞院よりにや侍りけん。な夜かちより御束帯にて石清水の宮にまいり給ひけるに。光清ときこえし別當御まうけなど房とかいふに

など、原作たる、
據二本改

して御きそくきこえけれど。殊更にたちやどることなくて。この度はまいらむと心ざしたれば。えなむ入るまじきとてより給はざりけるに。七夜まいりはて給ける夜。みつといふところをいってたてまつりける。

りけ、據ニ本補

とよめりけるを。御神のみことしたのまんとて。御ふところにおさめさせたまひてかへさに。のり給御馬鞍をきながらぞ引きて給はせける。その御とも人などいかにかりなる御心ざしにて。かくかちの御物まうて夜をかさねさせ給ふらん。あら人神昔の帝におはしませば。ながれのとだえさせ給ふ御事にやなどおぼつかなく覺えけるに。臨修正念往生極樂としてのびて唱へさせ給ひける御ねぎごとにてぞ。あはれにかなしくうけ給はりしときこえ侍ける。おほいどの(四)後には大將も辭し給てた(五)左のおととてあはしき。仁和寺に花園といふ所に山里つくりいだしてかよひ給

き、原作に、據ニ本改
出家事、見台記
久安三正并條

き。四十にあまりてやうせ給ひにけむ。近くなりては御々しおろし給ひけるに。すがたは猶昔にかはらず清らにて少しおもやせてぞ見え給ける。岩倉なるひじりよびて。えぼうしなをしにていて、御々しおろし給ひけるとかなしく。見奉る人も涙あさへがたくなんありける。あちどのめのと風いたみける頃花にさして。
(五) 玉露
われはたゞ君をぞおしむ風をいたみ散りなん花は又も咲きなん。

かなしみ、原作申、據ニ本改
きこえ、原作き、據ニ本改

とよみたまひけるを。めのととはつねに語りつゝこひかなしみける。この大將殿(四)。みかどのむまご宮の御子にてたゞ人になり給へる。此の世にはめづらしく聞きたてまつるになさけ多くさへおはしけるいとありがたくきこえたてまつりしに。まださかりにて雲がくれ給にけむいと悲しくこそ侍れ。かの花園も雲けふりとのぼりて。あとさへ残らぬと聞き侍ることあはれに心うけれ。そのわたりにまうてかよひける人。

も、據ニ本補、下同○定、校イ本
作言

いづくをか形見ともみん夜をこめてひかり消にし山のはの月。
三のみこ(四)の御子にはまた信證僧正とて仁和寺におはしき。鳥羽院御々しおろさせ給ひし時御戒師におはしき。又山に(五)僧都の君(六)などいひてきこえ給き。一定に(七)なかりしにや院よりおほい殿(八)にたづね申させ給ひけるとかや。御むすめはおほい殿(九)の一つ腹に伊勢のいつきにて下り給へりき。後は伏見の齋宮(十)と申しこれにやおはすらん。又行宗の大藏卿の女のはらに齋院(十一)もおはするなるべし。この頃もそぢなどにや餘り給ふらん。そのいつきにはせし頃おほい殿(十二)本院に有栖川のもとの櫻のさかりなりけるにおはして歌などよみ給ひけるに。女房の歌とて。

ちる花を君ふみわけてこそりせば庭のちもてもなくやあらまし。

き、
コ本作

とぞきこえし。

はらぐの御子。

きさいの宮。女御更衣におはせねど。御子うみたてまつり給へるところ。近き御代にあまたきこえ給き。后はらの宮だちは皆申し侍りぬ。ちりぐにうち續きおはします多くきこえ給。白河院のきさきばらの女宮みところ(御子)の外に。承香殿の女御(理)の生みたてまつり給ひしは伊勢のいつきにおはしき。それは女四宮(理)なるべし。女五宮(理)も天仁元年しも月のころ。みうらにあひたまひて齋宮ときこえ給ひき。御はらはいづれにかおはしけんひがことにや侍らん。季實とかきこえしむすめにやおはしけむ。せがるの齋宮(理)と申しも同じ頃立ち給ときこえき。それは頼綱ときこえし源氏の。三河守なりしがむすめのはらにおはすときこえき。七十におまり給ひてまだおはすときこえ給き。唐崎のみそぎ上西門院(理)せさせ給ひし頃。そのつゝきに院の御さたにて殿上人など奉らせ給ひけり。とのもりのかみ何太夫とか名ありし人御後見にて御車のしりに綾の指貫院のおろして着てわたるなどきこえき。男はこの世にはおほく佛の道にいり給て御元服もかたくて。うへの御ぞの色などもたづねえ侍らぬ折々もはべるとかや。位おはしまさぬほどは淺黄と日記に侍るなるをば。あをきいろか黄なるかなほおぼつかなくて。花園のおほいどの(理)に

き、
コ本作
きた、
コ本作
きた

尋ね奉られけるも。あさなくておぼえ給はぬよし申したまふなどきこえし。一宮の御元服のは黄なるを奉りけるなるべし。位まだえさせまたはねば黄なる衣ぞとにもおはしますらん。無位の人は黄袍なるべければ。小野篁が隱岐より歸りて作りたる詩にも。請ふ君菊を愛せば我をみるべし。白きことはかうべにあり。黄なることは衣にありなどぞきこえ侍し。神の社の黄狩衣なども位なきうへのきぬの心なるべし。かやうのついでにある人の申されけるは。つるばみのころもは王の四位の色にて。たゞ人の四位と王五位とはくろあけを着。たゞ人の五位あけの衣にてうるはしくはあるべきを。今の人心およすけて四位は王の衣になり。五位は四位のころもを着るなるべし。檢非違使上官などはうるはしくてなほあけをあらためざるべしとぞ侍りける。佛の道に入りたまへるはこの頃うちつかせ給へり。仁和寺に覺行法親王ときこえたまひしは白河院のみこにおはす。御ぐしおろさせまたひてやう／＼おとなに成らせ給ふほどに。いとかひ／＼しくおはしければ。さらに親王の宣旨かぶり給とぞきこえ侍りし。おほ御室とておはしましは。三條院の御子師明親王ときこえ給ひし。まだちびにおはしまして御子の御名えたまひければ。法師の／＼ちは親王の宣旨かぶり給はず。その宮につけ奉りたまひしに。御弟子の宮(理)はわらはにて親王の御名をえたまはねば親王の宣旨かぶりたまへり。後二條のおと(理)。出

家のうちには例なき由侍りけれども。白河院。内親王といふこともあれば。法親王も
 などかなからんとて。はじめて法師の後親王ときこえ給しなり。かくて後ぞうち
 つまきいづくにも出家の後の親王ときこえ給める。そのちとうとにて覺法々親王と
 きこえたまひしは。六條の右のおと(醍醐)の御むすめ(理)のうみ奉り給へりし。法性
 寺のおと(醍醐)のひとつ御はらからにはす。さきに申し侍りぬ。みかどの御子關白
 などひとつはらにははしませいとかたきことなるべし。この御室(醍醐)はおほきに聲
 清らかなる人にぞあはしける。眞言のみちよくならひ給ひ又手かきにて(て)もあはしけ
 り。御堂の色紙形などかき給ときこえ給き。高野の大師の手かきにははしければに
 や。御室だちもうちつ(つ)き手かきにぞあはすなる。高野へまうでたまひける道に
 て。

て、據コ本補

(手紙の形) 定めなきうき世の中としりぬればいづくも旅の心ちこそすれ。
(後拾遺集) とよみたまへりけるとぞ。横河の覺超僧都の。よろづのとを夢とみるかなといふ歌

て、コ本作りて○

思ひ出でられて。あはれにきこえ侍る御歌なり。又仁和寺に花藏院の宮(醍醐)とてもあ
 はしましき。それはと御はらなるべし。御母は大宮の右のおと(醍醐)の御子に。なで
 しこの宰相(醍醐)とかきこえ給しむすめとぞ。六條殿とかきこえ給てのちには九條の
 民部卿(醍醐)にははしけるとかや。この宮はいみじくたうとき人ときこえ給き。長尾の

又、據コ本補

宮とも申しき。又三井寺大僧正行慶ときこえたまひしもあはしき。備中守政長とき
 こえし人のむすめのはらにはす。これも眞言よく習ひ給へるなるべし。この院(醍醐)
 もこの僧正にぞあこなひのこと受けさせ給ときこえし。法性寺のおと(醍醐)御ぐし
 ありし給ひて御戒の師にし給ともきこえき。こまの僧正とも申なるべし。天王寺へ
 まうでたまひけるに難波をすぎ給ふとて。

(五葉雜記) 夕暮に浪花わたりを見渡せばたうす墨のあしてなりけり。
 となむきこえし。こと所のゆふべののぞみよりもなにはのあしてと見えんげにとき

こえ侍り。歸る雁のうすいみ。夕暮のあしてになりたるもやさしくきこえ侍り。又若
 御前法眼(醍醐)ときこえ給へりしも白河院の御子にやあはしけむ。みちのおくのかみ
 有宗といひしがむすめのはらにはすとぞ。堀河のみかどの宮だちは山に法印な
 どきこえたまひし。後には座主になりて親王の宣旨かぶり給ひて座主の宮(醍醐)とき
 こえき。伊勢の守時經とて。傳の大納言(醍醐)のすゑときこえしむすめのうみたてまつ
 れるとぞ。又仁和寺の花藏院の大僧正(醍醐)と申しは。近江守隆宗ときこえしがむす
 めのはらとぞきこえ給し。僧正御身のしづみ給へるとをあもほしける時よみたまへ
 りける。

さみだれのひまなき比のしづくには宿もあるじも朽にけるかな。

經、恐當作綱
が、原作は據コ
本改

とぞきこえ侍りし。身をしるあめ時にもあらぬしぐれなどや。御袖にふりそひたまひけむといとあはれにきこえ侍り。女宮は大宮の齋院(種)ときこえ給おはしき。やがて彼の大宮(種)の女房のうみたてまつりけるとなん。又さきの齋宮(種)も堀河院の御むすめときこえ給。まだこの頃もおはするなるべし。鳥羽院の宮は女院ふたところ(種)の御はらの外に。三井寺の六宮(種)。山の七宮(種)とおはします。御は石清水のながれとなん聞きたてまつりし。としよりの撰集(種)に鹿の歌などいりて侍り。光清法印とかいひける別當のむすめとなむ。小侍従などきこゆるは小大進が腹にて。これはさきのはらからなるべし。白河院の御時より近くさぶらひて。鳥羽院には御子あまたおはしますなるべし。又その同じはらにあや御前ときこえさせたまふ御ぐしあろして雙林寺といふ所にぞおはしますなる。寺の宮(種)はひとせうせ給にき。やまの(種)は法印など申し親王になり給とぞ。又宰相の中將家政と聞えし御むすめ侍賢門院におはしけるも。とばの院の御子うみたてまつり給へりし。吉田の齋宮(種)と申しき。それもうせ給て八九年にもやなり侍りぬらん。尾にならせ給て智恵深く尊ききこえさせ給き。その御母こそはあさましくてうせ給にしか。河内守なにかし(種)とかいひしが子なる男(種)のいかなる事のありけるにか失ひ奉りたるとて。おやも罪かぶりて都にもすまざりき。又徳大寺の左のおと(種)の御むす

女、種、本補
も、原作か、據
本改〇三の、據
コ本補

めとてとばの女院に候ひ給けるも。女三(種)みこ(種)生みたまひてかすがのひめ宮(種)ときこえ給。冷泉の姫宮と申にや。その母を春日殿と申なるべし。又勢賀院の姫宮。齋院のひめ宮。高松の宮などきこえさせ給もおはしますなるべし。とばの院の宮だちはおとこ女。きさきばら。たののなど取り加へ奉りて。男宮八人。女宮八人ばかりおはしますなるべし。さぬきの院(種)の一の御子ときこえ給しは重仁親王と申しけるなるべし。その御母院に具し奉りて遠くおはしたりけるが。歸りのぼり給へるとぞきこえ給。みかど(種)位におはしましたし、時きさいの宮(種)一の人(種)の御むすめにておはしますに。うちの女房にてかの御母宮仕へ人にてさぶらひ給へしが。殊の外にときめき給ひしかば。きさきの御方の人はめざましく思ひあひて。人の心をのみはたらかし。世の人おあまりまばゆきまで思へるなるべし。さりとして御後見のつよきもおはせず。たゞ大藏卿行宗とてし七十ばかりなるが歌よみによりて。したしくつかうまつりなれたるをちやなどいひて。兵衛佐などつけ申たるばかりなればさるべき方人もなし。まとの親(種)はおとこにはあらで。紫の袈裟など給はりて白河の御寺のつかさへけり。それもうせて年へにけり。しかるべき人の子なりけれどおとこならねばかひなかるべし。常にさぶらふ何の中將などいふ人の。かたごゝろあるなども目をそばめらるゝ様にてはしたなくなんありける。されどたぐひな

き御心ざしをさりがたきとにてすぐし給ふ程に。おのこ君(皇)うみいだし給へれば。中宮(皇)にはまだかゝるともなきに。いとめづらしくいとやすからぬつまなるべし。御ちほぢの院(皇)もきかせ給て迎へとり給て女院(皇)の御方に養ひ申させ給。やうくうち(皇)の御めのとこの播磨守伯耆守などいふ人ども。彼のさとや局などの女房など。かみしものこともとりさたすべきよしうけ給はりてつかうまつり。若宮の御めのと刑部卿(皇)などいひて。大貳の御めのとのおとこときこゆ。みこ(皇)も親王の宣旨などかぶり給て御元服などせさせ給ひぬ。かくて年月すぐさせ給ふ程に。位さらせ給ひて新院(皇)とておはしますにも。世にたぐひなくてすぐさせたまへば。まさらの宮(皇)殿(皇)の御わたりには心よからず疎きとにてのみおはします。本院(皇)の御まゝなれば世を心にまかせさせ給はず。うち(皇)中宮(皇)殿(皇)などにひとつにて。世の中すさまじき事多くておはしますべし。かやうなるにつけてもわたくしものにもほしつゝすぐさせ給に。法皇(皇)かくれさせ給ひぬる後世の中に事どもいできて讃岐へとぞくおはしますにしかば。やがて御船にぐし奉りてかの國に年へたまひき。一の御子(皇)も御ぐしおろし給て。仁和寺大僧正寛曉と申し、につかせ給て真言などならはせ給けるに。さとくめてたくおはしますければ。昔の真如親王もかくやと見えさせたまひけるに。御足のやまひもくならせ給て。ひとせ

うせさせ給にけり。御とし廿二三ばかりにやなり給けん。讃岐(皇)にも御なげきのあまりにや。御なやみつもりてかしこにてかくれさせ給にしかば。宮の御はしものぼり給て。かしらおろして醍醐のみかどの御母方の御寺(皇)のわたりにぞすみ給なる。かの院(皇)の御にほひなればことわりと申ながら。歌などこそいとらうありてよみ給なれ。のぼり給ひたりけるにある人のとぶらひ申たりければ。

君なくて歸る波路にしほれし袂を人の思ひやらなん。と侍りけるなん。さこそはといと悲しくおしはかられ侍し。院の御あとうとの仁和寺の宮(皇)おはしまし、程はとぶらはせ給ふときこえしに。宮もかくれ給て心ぐるしく思ひやり奉るあたりなるべし。その遠くおはしましたりける人のまだ京におはしけるに。白河に池殿といふ所を人のつくりて御覽せよなど申ければ。わたりて見られけるにいとあかしく見えければ。かきつけさせ給ひけるとなむ。

音羽川せき入れぬ宿の池水も人の心は見えけるものを。とぞき侍し。又さぬきの院(皇)の皇子はそれも仁和寺の宮(皇)におはしますなる。法印にならせ給へるとぞきこえさせたまふ。それも真言よくならはせ給て勤め行はせ給へりとぞ。上西門院(皇)御子にし申させ給へるとぞ。その御母(皇)師隆の大藏卿の子に。參河權守と申す人(皇)おはしけるむすめの。さぬきのみかど(皇)の御時内

られ、二本作給
ひらせ給ひ、
原作られ、今從
二本

は、據二本補

侍のすけにて候はれしが。うみたてまつり給へるとぞきこえさせ給。さぬきの法皇(醍醐)かくれさせ給へりける頃。御服はいつか奉ると御室(醍醐)より尋ね申させ給へりければ。

うきながらその松山のかたみにはこよひぞ藤の衣をばきる。
とよませ給へりける。いとあはれに悲しく。又御行ひはてやすませたまひけるに。

嵐はげしく瀧の音むせびあひていと心ほそくきこえけるに。
夜もすがら枕をつる音きけば心をあらふ谷川の水。

とよませたまへりけるとぞきこえ侍し。昔の風ふきつたへさせ給いとやさしく。

女宮はきこえさせ給はず。今の一院(醍醐)の宮だちはあまたあはしますとぞ。きこえ
ばらの外には。高倉の三位(醍醐)と申すなる御はらに。仁和寺の宮(醍醐)の御室つたへて
あはします也。まだわかくあはしますに御ちこなひのかたも梵字などもよくかかせ
給ときこえさせ給。つぎに御元服(醍醐)させ給へるあはしますなるも。御ふみにもたづ
さはらせ給ひ御手などかかせ給ふときこえさせ給。その宮も宮だちまうけさせ給へ
るとぞ。あなじ三位の御はらに女宮もあまたあはしますなるべし。伊勢のいつき
にてあね宮(醍醐)はあはしますときこえさせたまひし。あとうとの宮(醍醐)は六條の院の
宣旨養ひ奉りて。かの院つたへてあはしますとぞきこえさせ給。又賀茂のいつき(醍醐)

宮は、原作おと
うと、今従二本

にもあはするなるべし。又女房のさぶらひ給なる。御あはえのなにかしのぬしとか
きこえし妹のはらにも。宮だちあまたあはしますなるべし。三井寺に法印僧都(醍醐)な
どきこえさせ給ふ。また女宮もあはしますとぞ。大炊御門の右のあとも(醍醐)の御むす
めも姫宮(醍醐)うみたてまつり給へるあはしますときこえ給。又ことばらの宮々もあ
またあはしますなるべし。二條のみかどの宮だちもあとも宮(醍醐)女宮(醍醐)きこえさせ
給ふ。その女宮はうちの女房うみたてまつりたまへるとぞ。中原の氏の博士(醍醐)の
むすめにぞあはすなる。男宮は源氏のうまのすけ(醍醐)とかいふむすめの腹にあはし
ますとかきこえ給。又徳大寺のあとも(醍醐)の御むすめのはらとかきこえ給ふは位に
つかせたまへりし。さきに申侍ぬ。又かむのきみの御あとうとにあはしけるがうみ
たてまつり給へる(醍醐)あはしますときこえさせたまふ。かく今の世の事を申しつ
け侍る。いとかしこくかたはらいたくもはべるべきかな。

今鏡第九

むかしがたり。

あしたづ。

今の世のことは人にぞ問ひ奉るべきを。よしなきこと申しつゝ侍るになんなどいへば。さらば昔語りも猶いかなる事か聞き給ひし語り給へといふに。あつから見き侍しともことのつゞきにこそ思ひいで侍れ。かつはき給へりし事もたしかにも覚え侍らず。傳へうけ給はりしことも思ひいづるにしたがひて申侍りなん。かたちこそ人の御覽じ所なくとも。いにしへの鏡とはなかなり侍らざらむとて。むかし清和のみかどの御ときかたぐ多くおはしける中に。ひとりの御息所の太上法皇(稱)かくれさせ給へりける時。御經供養して佛の道とぶらひ奉られけるに。御法かきたまへりける色紙の色の。ゆふべのうす雲などのやうに墨染なりければ人々怪しく思ひけるに。むかし賜はりたまへりける御ふみどもを色紙にすきて。みりの料紙になされたりける也けり。それよりぞ多く色紙の經は世に傳はれりける。なん。かきとめられたるふみなども侍らんものを。橘の氏贈中納言ときこえ給し宰相(稱)の日記にぞこの事はかゝれたるときこえ侍し。

村上の御とき枇杷の大納言延光藏人頭にて御おぼえに「おはしけるに。すこし御け

御經供養云々、見十訓抄五

給、原作侍、今從二本

此條、見十訓抄當行、二本元

材、原作村、據二本十訓抄改

所の、二本元

秀才、二本作雅村(村當作材)

ど、原作は、據二本改

しきたがひたるともおはせてすぎ給けるに。心よからぬ御けしきの見えければ。あやしくおそれおぼしてこもり給へりける程に。めしありければいそぎ参りておはしけるに。年ごろはあろかならずたのみてすぐしつるに。くちあしきことは藤原雅材といふ學生のつくりたるふみのいとおしみあるべかりけるをば。など藏人になるべきよしをば奏せざりけるぞ。いと頼むかひなくと仰せられければ。ことほり申限なくてやがておほせ下されけるに。みくらのことねり家を尋ねてかねてかよふ所ありとききて。その所にいたりて藏人になりたるよしつけければ。その家あるじのむすめの男所の雑色なりけるが。藏人に望みかけゝるありふしにて。わがなりぬると喜びて祿など饗應せむ料に俄に親しきゆかりどもよびていとなみける程に。小舎人雑色どのおはせず。秀才殿のならせ給へる也といひければあやしくなりて。家あるじいかなる事ぞと尋ねけるに。雑色がめのおねかおとうとかなる女房のまかなひなどしけるを。この秀才しのびてかよひつゝつぼねにすみわたりけるを。かかる人こそおはすれと家の女どもいひければ。よもそれは藏人になるべきものにはあらず。ひがごとならむといひけれど。小舎人その人なりといひければ。雑色も家あるじもはぢがましくなりて。かゝる者かよふによりかゝる事は出てくるぞとて。夜のうちにそのつぼねの志のびづまを追ひいだしてけり。その事をいかてか雲の上ま

○、コ本元、當行
のう、據コ本補

補つかへ、據コ本

に、據コ本補

を御以下至ける
廿二字、コ本元
此條、見十訓五
著聞集四

今鏡第九 むかしがたり (祈るしるし)

九百四十八

できとしめしつゝ「けいむ(行)いとあしきとかな。さてはいてつかうまつらんに。装
ひの然るべきもかなひがたくやあらんとて。くらづかさ(行)に仰せられて。くらのかみ
調へてさまぐの天の羽衣たまはりてぞまいりつかへける。そのつくりたる詩は
釋奠とかに。鶴九つのさはになくといふ題の序をかきたりけるとぞ。詞をばえ覺え
ず。その心は廻り翔けらんとを蓬が島にのぞめば。霞の袖いまだあはず。ひく人や
あると淺茅が山に思へば。霜のうはげいたづらに老(行)にたりといふ心なり。又村上
のみかどかの大納言に。われなからん世に忘れず思ひいださんずらむやなどのたま
はせければ。いかてかつゆ忘れ參らせ侍らんと答へ申されけるを。折節(行)には思ひい
だすともいかでか常にはわすれざらむと仰せられければ。御(行)ぶくをぬぎ侍らてこの
世をおくり侍らんずれば。かはらぬ袂の色に侍らば忘れ參らすまじきつまには侍る
べきと奏し給。まことにその契りにたがはずおはしければ。後のみかどの御時も色な
がら事に従ひ給ひけるを御らんじて。御涙もをさへあへず悲しませ給ひけるとぞ。
かの大納言(行)の夢に。先帝(行)を見たてまつりて作り給へる詩きこえ侍りき。夢の
うちにもし夢のうちのとをまらましかば。たとひこの生を送るとも早くはさめざら
ましとぞおぼえ侍る。夢(行)とまりせばさめざらましをといふ歌の同じ心なるべし。
祈るるし。

し、コ本作も

此條、見古事談
三十訓七〇殿、
據コ本補

今鏡第九 むかしがたり (祈るしるし)

九百四十九

圓融院の御時にや。横川(行)の慈惠大僧正參り給へりけるに。眞言のおこなひの時行者
の本尊になるとはあるべきさまをするにや。又まことに佛になるとにてあるかと問
はせ給ひければ。その印をむすびて眞言を唱へ侍らんに。いかでかならぬやうは
侍らんと答へ申給ければ。五壇の御修法にみかどあはせ給て御覽じけるに。阿闍梨
の印をむすびて定に入りたるとは見ゆれども。もとの姿にてこそはあれと仰せられ
ければ。まことに本尊になりて侍を。御さけりものぞこらせたまひ。御功德もかさなら
せおはしましなば御覽せさせ給こともおはしましなると申給けるに。たび(行)か
さなりて御覽じければ。大僧正不動尊のかたち本尊と同じやうになりて。けし(行)やき
してゐたまひたりけるに。廣澤の僧正(行)も又降三世になりたまひたりけるが。程な
く例の人になり。又ほとけになりなどし給けり。いま三人は元のさまにてほとけに
もならず。かく御覽じて後に大師まいり給へりけるに。まことにたふとき事をおがみ
つることのよに有り難きと仰せられて。寛朝(行)こそいとあしかりつれ。心の亂れつる
にや。程なく姿のものと様になりかへりつると仰せられければ。大師の申したまひ
けるは。寛朝(行)なればまかりなるにこそ侍れとぞ奏し給ける。
禪林寺の僧正(行)ときこえ給けるが。宇治のおほきおと(行)にやおはしけん。時の
關白(行)のもとに消息たてまつりて。法藏のやぶれて侍る修理して給はらむと侍

りければ。家の司何のかみなどいふうけ給はりて。下家司などいふ者つぎがみ具して僧正の坊にまうて。殿(僧正)より法藏修理つかまつらんとて破れたる所々しるしになむ参りたると申しければ。僧正よびよせ給ひて。いかに(僧正)かく不覺にはおはするぞ。おほやけの御後見もかくてはいかにし給ふと申せとはべりければ。還り参りて。しるしにまうて侍りつれども。いづくなる法藏とも侍らずいかに心得ぬやうには侍るぞ。おほやけの御後見もいかやうにか御された候ふらんなど思ひかけず心得ぬ御返事なむの給はせつると申しければ。こはいかに。さはいかにすべきぞなど仰せられければ。年老いたる女房の(老)おれは御はらのそこなはせ給へるを。みのりのくらは侍るものと申しければ。さ(僧正)もいはれたるとさ(僧正)もあらんとてまなの御あはせども調へて奉り給へりければ。材木給はりてやぶれたる法藏つくろひ侍りぬとぞきこえ給ける。此頃の人ならば。關白(關白)殿に申さずとも隠して給こと。僧井(僧井)などいふものに心あはせて調へさせらるべけれども。かく申され侍りとかや。かの僧正大二條殿(殿)のかざりにおはしましけるにまいり給て。園基うたせ給へと申たまひければ。いかにあさましき事など侍りけれど。あながちに侍ければやうぞあらむとて。基盤とりよせ。かきあこされたまひてうたせ給ひけるほどに。御はらのふくれへらせ給ひて一番がほどに例ざまにならせ給へりける。いとありがたき験者に侍りけり。經な

こ、原作と、據
二本改

さ、二本元

殿、據二本補
二本作行〇〇
二本作い

此條、見古事談
二十訓抄十段覺
記一

れ、原作リ、據
二本改

どよみ祈り申しなどせさせ給はんだに。かた時の程にめでたく侍べきに。基うちてやめ申させ給けんもたゞ人にはおはせざるべし。
むかし勘解由長官なりける宰相(藤)のまだ下臈におはしける時。親(藤)の豊前守にて筑紫に下りける供にまかりけるに。その父國にてわづらひてうせにけるを。その子の父の爲に。泰山府君の祭といふ事を法のごとくに祭のそなへどもと一のへて祈りこひたりければ。其親いきがへりてかたられ侍けるは。炎魔(藤)の應に参りたりつるに。いひしらぬそなへを奉りけるによりて。返し遣はすべきさだめありつるに。其中に親の輔通をば返しつかはして。そのかはりに子の有國をばめすべき也。その故は道の者にもあらでたはやすくこの祭を行ふ。とがあるべしとさだめありつるを。ある人の申されつるは。孝養の志ある上に。とをき國に道の人のしかるべきもなければおもき罪にもあらず。有國めさるまじとなん覺ゆると申さるゝ人ありつるによりて。皆人いはれありとておや子ともにゆるされぬるとなん侍りけるとぞ。そのながれの人のさをも位も高くおはせし人のかたられ侍ける。
一條院の御時などにや侍けん。六位の史を経てかうぶり給はれる(明)が。縣召に心高く播磨國の司のぞみければ。こと人をなされけるに。たびく墨をすりてかきつけらるれども。おほかた文字のかゝれざりければいかゞすべきとさだめられけるに。

元、コ本元、
元、コ本元、
元、コ本元、

播磨の國望む申ぶみを皆とりあつめて。かゝるべきさだめありてえらびすてたる申ぶみどもをも。おほつかの中よりもとめいで、皆かゝれけるに。かの史大夫相尹とかいふが名のあざやかにかゝれたりけるとなむ。齊信民部卿の宰相におはしけるとかやその座にて見給ければ。ちいさき手して筆のさきをうけてかゝせぬとぞ見給ける。聖天供をして祈りけるしるしになむありける。その供は觀修僧正とかのせられけるとかや。たしかにも覺え侍らず。かく聞き侍りしを又人の申しは。一條院の御時長徳四年八月廿五日。外記の巡にて佐伯公行といふ者こそ播磨守にはなりたれ。かの國の史生とかにて「もと」ありけるとかや。相尹といふものはなりたることも見えすと申人もありきとなむ。

からうた。

一條院は御心ばへも能もすぐれておはしましける上に。しかるべきにや侍けん。上達部殿上人みちくの博士たけきものふまで。世にありがたき人のみ多く侍ける頃になんおはしましける。常は春風秋月の折ふしに付けつゝ。花のこずゑをわたり。池の水にうかぶをすぐさずもてあそばせたまひけるに。御ちぢの中務宮(和)はじめてそのむしろに参り給へりけるに。ならばせたまはぬ御有様に御かうぶりの額もつむる心ちせさせ給。御帯も御したうづもいぶせくのみ覺えさせ給けるに。御あそ

に、據コ本補

此條、宜參考者
聞集四

ひはじまりて。藤民部卿(和)。四條大納言(和)。源大納言(和)。侍従大納言(和)などいふ人だち周文王の車の右にのせたるなどいふ詩の序。以言ときこえし博士のつくりたる詠じ給けるにぞ。御子(和)の御かうぶりも御よそひもくつろぐやうに覺えさせ給て。面白くすゝしく覺えさせたまひける。かの村上の中務宮(和)ふみつくらせ給ふ道などすぐれておはしましければ。齊名以言などいふ博士常に参りて。ふみつくらせ給ふ御ともになむありける。大内記胤保とて中にすぐれたる博士御師にて文はならはせ給ける。その保胤(和)はこれらが文作りえたるところをぬ所のありさまとはせ給ければ。こたへ申けることこそ。からの言の葉は知らぬことなれど面白くきこえ侍りしか。いづれもくとりくりに侍るをたとひにて申侍らんとて。齊名が文作り侍るさまは。月のさえたるになかばふりたる椴皮葺の家の御籠ところくはづれたるうちに。女の箏のことひきすましたる様になん侍る。以言詩は砂子白くちらしたる庭の上に櫻の花散りしきたるに。陵王まひたるになん似てぞはべる。匡衡がやうは。ものふのあけの草して緋威のかやきたるきて。えならぬ駒の足ときにのりて逢坂のせきをこゆる景色なりとぞ申しける。さて宮(和)こはいかゞと仰せられければ。既に檳榔毛にのり侍りにたりとぞ申し侍りけるとなむ。

彼の齊信の藤民部卿。應司殿(和)の屏風の詩えらびたてまつられけるに。日野の三位

の、コ本作に○
據コ本補

(蘇)の詩多くいりたりけるを。義忠といひし贈宰相の難じて。色の糸ことばつりて
春風に任せたりといへる。糸といふ文字平聲にあらずひがとなりと中とききて。民
部卿。文集の詩の句のうるはしきことば、色の糸をつりたりといへるをかんがへ
て奉られたりければ。宇治のおほきあとも(蘇)むづからせ給ひて。いかにかゝるひが
難をば申けるぞとて。勘當せさせ給ひてあくる年までゆるさせ給はざりければ。義
忠の三位女房につけて奉りける。

青柳の色のいとにや結びてしうれへはとけて春ぞくれぬる。
とぞき侍りし。よればほどけてとかけけるもあり。いづれかまことにて侍らん。

此條、見古事談
一十訓十

むかしの御つぼね(蘇)の親にておはせし越後守(蘇)の。縣召に淡路になりていと
らくおぼして。女房につけ奏し給ひけるふみに。苦學の寒夜に紅涙襟をうるほし。除
目の春朝若天まなこにありと書き給へりけるを。一條のみかど御覽じて。夜のおと
どにいらせ給てひきかづきてふさせ給けるを。御堂殿(蘇)まいらせ給ひていかに
くはととせ給ひければ。女房の爲時が奉りて侍つるふみを御覽じて御とのごもら
せ給へるよし申されければ。いとふびんなる事かなとて。國盛といひしをめして。
越前になしたびたるを返し奉るよしのふみかきてたてまつれとて。爲時を越前に
なさせ給へりしにぞ。みかどの御心ゆかせ給ひて。こまうどふみ作りかはさせん

を、據コ本補

とおぼしめしつる御けしきありけるにあはせて。こしに下りてから人とふみつくり
かはされける。

去國三年孤館月。 歸程萬里片帆風。 書鼓雷奔天不雨。 綵旗雲聳地生風。
などぞきこえ侍し。

まことのみち。

大内記のひじり(蘇)はやんごとなき博士にて。文作るみちたぐひすくなくてよにつ
かへけれど。心はひとへに佛の道に深くそみてあはれびの心のみありければ。大内
記にてしるすべきとありて催されて内に参れりけるに。左衛門の陣などの方にや
女の泣きてたてるが有りけるを。何事(蘇)のあればかくは泣くぞと問ひければ。あるじ
の使にて石の帯を人に借りてもてまかりつるが。道におとしてはべればあるじにも
おもくいましめられんずらむ。さばかりのものを失ひつるあさましく悲しくて歸る
空もなければ。思ひやる方もなくてそれを泣き侍なりと申ければ。心のうちおしは
かるにまことにさぞ悲しからんとて。わがさしたる帯をときて取らせたりければ。
元の帯にはあらねども。空しく失ひて申すかたなからんよりもおのづから罪もよ
ろしくや侍とて。これをもてまからんずる嬉しさと。手をすりてとりてまかりにけ
り。さて片隅に帯もなくして隠れるたりける程に。事はじまりければおろしくと催

さしたる、コ本
作せし

て、據コ本補

ば、コ本作ども

されて。みくらの小舎人とかに帯をかりてぞ公事は勤められ侍りける。池亭の記とてかゝれたるふみにも。身は朝にありて心は隠にありとぞ侍なる。中務の宮(和)のものならひ給ひけるにも。ふみすこし教へたてまつりては目をとちて佛をねんじ奉りてぞ怠らず勧め給ける。かくて年をわたりける程に。年たけてぞかしらおろして横河にのぼりて法文ならひ給けるに。増賀ひじりのまだよがはにすみ給ひけるほどにて。止観の明静なること前代にいまだきかずとよみ給ける。この入道たゞ泣きなまきければ。ひじりかくやはいつしか泣くべきとてこぶしをにぎりて打ち給ひければ。われも人も事にがりて立ちにけり。又程経てさてもやは侍るべき。かのふみうけ奉り侍らんと申しければ。又さきの如くに泣きければ。またはしたなくさいなみければ。後のことばもえきかですぐるほどに。又こりずまに御けしきとり給ひければ。又さらによみ給にも同じやうにいと泣きをりければこそ。ひじりも涙こぼしてまよとに深きみのりのたうとくおぼゆるにこそとて。あはれがりてそのふみ静に授けたまひけり。さてやんごとなく侍りければ。御堂の入道殿(和)も御戒などうけさせ給ひて。ひじりみまかりにける時は御諷誦などせさせ給ひて。さらし布もむら給ける。うけぶみは三河のひじり(和)たてまつりて。秀句などかきとめ給ひけり。

御、二本元

リ、原作れ、據
二本改

寂公、二本作席
上を

此條、見古事談
及十訓抄十

昔隋煬帝の智者に報せし。千僧ひとつをあまし。今左丞相の寂公とぶらふ。さらし布もうちにみたり。

とぞかゝればべりける。その三河のひじり(和)も博士におはして。大江の氏のかんだちめ(和)の子におはしけるが。三河のかみになりて國へ下り給けるに。たぐひなくおぼえける女を具しておはしける程に。女みまかりにければかなしびのあまりにとりすつることもせで。なりまかるさまを見て心をおこして。やがてかしらおろして都にのぼりて物など乞ひありきけるに。おとの妻にてありける女。われをすてたりしむくいにかゝれとこそ思ひしに。かく見なしたるとなど申しければ。御とくに佛になりなん事とて。手をすりて喜びけると傳へ語り侍る。さて内記のひじり(和)を師にし給ひて。ひんがし山の如意寺におはし。横河にのぼりても源信僧都などに深き御法の心くみしり給て。惟仲の平中納言の北白川にて六十巻講を給ひけるには。覺運僧都まだ内供におはしける時講師せさせ給へり。この三河の入道は讀師とかやにてこそは。法華經の心ときあらはせるふみも黙じまたゝめて。そこばくの聴衆どももなみて。おの／＼よみしたゝめられ侍りけり。かくて後にぞ山三井寺の僧だちもやすらかによみ傳へたまふなる。つるにからくににおはしてもいひしらぬことどもおはしければ。大師の御名を給て圓通大師とこそきこえ給めれ。かくれ給ける

おと、コ本作
みなど、〇本
原作た、今從
本

聞、古本作耳

す、原作づ、據
校本改

た、原作け、據
コ本改

に佛むかへ給樂のおときこえければ。それにも詩つくり歌よみなどし給けるも。もろこしよりあくりはべりける。
笙誦はるかに聞ゆ孤雲のうへ。聖衆來迎す落日のまへ。
とつくり給へり。歌は。

雲の上にはるかにかくのをとすなり人やきくらんひが聞かもし。
とよみたまへりけるとときこえ侍し。

又少納言統理ときこえし人。年ごろも世をそむく心やありけむ。月のくまなく侍けるに心をすまして。山深くたづねいらん心ざしのせちに催しければ。まづ家にゆすも心えてさめくとなきありけれどかたみにとかくいふことはなくて。あくる日うるはしきよそひして一の人(璣)の御もとにまうて。山里にまかりこもるべきよしといとま申けれど。人も申つがざりけるをしひ申ければ。き給て少納言こなたへとて出あひ給て。御ずいたひて。後の世は頼むぞなど侍りければ。ずをばおさめて拜したてまつりて。増賀ひじりのむろにいたりてかしらあろじたりけれど。勤め行ふこともなくても思ひたる姿なりければ。ひじりさる心にてはしたなく侍りければ。うみ侍るべき月にあたりたる女の侍ること。思ひ捨て侍れどいぶせく思ひた

に、據コ本補

まへてなどいふを。ひじり都にいそぎ出てその家におはしたりければ。えうみやらてなやみけるを。ひじり祈り給ひてうませなどして。人にまめなるものなどこひ給て。車につみてうぶやしなひまでし給けり。その統理に三條院より歌の御かへし給はりける。

忘られず思ひ出つ、やま人をしか戀しくぞわれもながむる。

と侍りけるに。涙のごひはべりければ。東宮より歌たまはりたらんは佛にやはなるべきとひじりはぢしめ給けるとかや。たてまつりたる歌もあはれにきこえ侍りき。
きみに人なれな、らひそ奥山にいりての後もわびしかりける。
とぞよみてたてまつりける。

公經とかきこえし手かき。ことよろしき國の司になりたらば寺などもつくらんと思ひしを。河内といふあやしき國になりたればかひなし。ふる寺などをこそは修理せめと思ひて見ありきけるに。あるふる寺の佛の座の下にふみの見えけるをひらきて見ければ。沙門公經とかきたるふみに。こん世にこの國の司になりてこの寺修理せんといふ願たてたるふみ見てぞしかるべきちざりなりけるといひける。かきたる文字のさまなども似たる手になんありける。ふしみの修理のかみ(璣)のやうにおなじ昔の名をつけるなるべし。

侍、原作之、據
コ本改

今鏡第九 むかしがたり (かしこきみちく)

九百六十

大外記定俊といひしが越中守になりて侍けるに。國のものは思ふさまに侍けれど。國の人のないがしろに思へるをあやしみ思ひて。ねたりける夜の夢に。むかしこの國にめぐらきひじりの持經者にて有けるがむまれてかくはなりたるぞ。人のあなづらはしく思へるは昔のなごりなるべし。そのひじりさきの世に彼の國の牛なりける時。法華經一部を負ひて山寺にのぼりたりしゆへに持經者になれりしが。このたびは國のかみとなりて色のくろきもそのなごりとぞ見たりける。昔のなごりにやすえには法師になりて江文のかたにこもりて行ひけるとぞきこえはべし。その子にて信俊ときこえしも。身は世に仕へながら佛の道をのみいとなみて。あいの後にはかしらおろしなどして。かぎりの時にのぞみては。みづから肥後入道往^生したりと云ひあはんずらむなど申してたふとくてうせにけるに。かうばしきにほひありけるなどきこえ侍き。

かしこきみちく。

常陸介實宗ときこえし人。くすしに尋ねべきとありて雅忠がもとにゆけりけるに。しばしとて障子のつらにすゑたりけるに。まらうどきやうようしけるあひだに。かどよりいりくるやまひ人をかねてかほけしきを見て。これはそのやまひをとひにくる者なりといひてたづぬればまことにしかありけり。そのなかに見苦しきことも

生、據コ本補

つら、コ本作ほ

此條、見著開十
二十訓十

び、原作い、據
コ本改
かりきぬ、原作
かち、據コ本改
うら、原作い、
據コ本改

あり。おかしきこともありて。えいひやらねば皆心をたりなどいひて。つくろふべきやうなといひつゝあへしらへやりけるに。まらうどは有行なりけり。家あるじ盃とりたるを。とくそのみきめせ。只今ゆゝしきなるのふらんずれば。うちこぼしてんずといふに。さしもやはとや思ひけんいそがぬ程に。なるおびたしくふりてはたとひとしき酒をうちこぼしてけり。あさましき事どもまゝたりとぞかたりける。
中比笹の笛の師にて市佑時光ときこえしが。いづれの御時にか内より召しけるに。同じやうにをいたる者とふたり手うちて歌うたふ様によりあはせて。おほかた聞きもいれず御かへりも申さへりければ。御使あざけりて。かへり参りてかくなん侍るとうれへ申ければ。いましめはなくて仰せられけるは。いとあはれなる事かな。唱歌しすましてよろづ忘れたるにこそあんなれ。みかどの位こそくちおしけれ。さるめでたきことをゆきてもえ聞かぬとぞのたまはせける。用光といひし筆簾の師とふたり墨頭樂をさう歌にしけるとぞのちにきこえける。その用光が相撲の使に西の國へ下りけるに。きびの國のほどにてや。沖つ白波たちきてこゝにて命もたえぬべく見えければ。かりきぬかぶりうるはしくして。屋形のうへにいて、をりけるに。白波の舟こぎよせければ。その時用光筆簾とりいだして。うらみたる聲にえならず吹きすましたりければ。白波どもあのかなしびの心ちこりて。かづけものをさへし

今鏡第九 むかしがたり (かしこきみちく)

九百六十一

てござはなれてざりにけりとなん。さほどのことはりもなきものゝふさへ。なさけかくばかりふきかせけんもあり難く。又むかしのしらなみはなをかゝるなさけなんありける。

いとやさしくきこえ侍しことは。いづれの御時にかはべりけん。中頃のきさき上東門院(理)陽明門院(子)などにやあはしけん。近き世のみかどの御時めづらしく内にいらせ給へりける時。月のあかく侍りける夜。むかしはかやうに侍る夜は。殿上人あそびなどこそ内わたりはしはべりしか。さやうなることも侍らぬこそくちおしくなど申させ給ければ。いとはづかしくおぼしめしける程に。月の夜めてたきに。りんくとして氷しきといふうた。いと花やかなる聲してうたひけるがなべてなくきこえるに。またいといたくしみたる聲のたうときにて。無量義經の微滞まづおちてなどいふところをうちいでよまれ侍りけるが。いづれもくとりくにめてたくきこえければ。昔もかばかりのことこそえき侍らざりしか。いと優なるものどもこそ侍りけれと申させ給けるにこそ。御汗もかはかせ給て御心もひろごらせたまひにけれとき侍し。後冷泉院の御時上東門院(理)などいらせ給へりけるにや。又その人々は伊家の弁。敦家の中將などにやあはしけんとぞ人は申侍しひがことにや。

又能因法師。月あかく侍りける夜。いたるにむかひてひさしのふき板所々とりわけさせて月やどして見侍りけるに。かどたしくをとし侍りければ。女ごゑにてとひ侍けるに。うちより勅使のわたらせ給へるなりとめぶといふ者のまうしければ。かどひらきていづみのもとに御使の藏人いれ侍りけるに。仰せごとになん。月のうたのすぐれたるはいづれかあると仰せはべりつれば。にはかに馬づかさの御馬めして。いそぎ對面するよしなど。たれにか有けんその時の藏人の申し侍りければ。
月よ、しよ、しと人につげやらばこてふに似たりまたずしもあらず。
といふうたをなむ申しけるが。同じ御ときのことには侍りけんたしかにもき侍らざりき。

今鏡第十

うちぎき。
しきしまのうちぎき。
中なる男ありけり。女をおもひてときく通ひけるに。おとこある所にてともし火のほのをの上にかの女の見えければ。これはいむなるものを。火のもゆる所をかき

なき、猿二本補

おとしてこそその人にのますなれとて。かみにつゝみてもたりけるほどに。事し
げくしてまざるゝことありければわすれて一日二日すぎて。おもひいでけるまゝに
ゆけりければ。悩みて程なく女かくれぬといひければ。いつしかゆきてかのともし
ひのかきあとしたりし物を見せてと。わがあやまちに悲しくおぼえて。つね^{なき}を
ににひとくちにくはれけむ心うさ。足ずりをしつべく歎きなきけるほどに。御覽せ
させよとにや。この御ふみを見つけて待るととりいだしたるを見れば。

^(後拾遺)鳥部山たにけぶりの見えたらばはかなく消えし我とまらなん。

とぞかきたりける歌さへともし火のけぶりとおぼえていと悲しくおもひける。こと
はりになむ。

又ある女有りけり。ときく通ひける男のいつしかたえにければ。心うくて心のう
ちに思ひ悩みける程に。その人かどをすぐるとのありけるを。家の人の今こそすぎ
させ給へといひければ。おもひあまりてきと立ちながらいらせ給へとおひつきてい
はせければ。やりかへして入りたるに。もと見しよりもなつかしきさまにてとの外
に見えければ。悔しくなりてとかくいひけれど。女たに經をのみよみてかへりごと
もせざりける程に。七のまきの即住安樂世界といふ所をくりかへしよむと見ける程
に。やがて、絶えいりてうせにければ。われもよりてをさへ。人もよりてとかくまけれ

此條、宜参考袋
草紙二長明無名
抄下

どもやがてうせにけり。かくてこもりもしまたかしらをもおろしてむと思ひけれ
ど。當時弁なりける人(聯)なればさすがえこもらで。つちにありてとかくの事までさ
たして。まばしは山ざとににかくれたりければ。世をそむきぬるときこえけれど。さす
がかくれもはてし出でつかへければ。かへる弁となんいひける。

左衛門尉頼實といふ藏人。歌の道すぐれても又このみにもこのみ侍りけるに。七條
なる所にて夕に郭公をきくといふ題をよみ侍けるに。えひてそのいゑの車やどりに
たてたる車にて。歌案せんとしてねすぐして侍けるをもとめけれど。思ひよらで既に
講せんとして人皆かきたる後にて。このわたりは稻荷の明神こそとて念じければ。き
とおぼえけるをかきて侍りける。

^(五十四)いなり山こえてやきつる郭公ゆふかけてしも聲のきこゆる。

同じ人の。人にしらるばかりの歌よませさせ給へ。五年が命にかへんと住吉に申し
たりければ。落葉雨のとしと云ふ題に。

^(後拾遺)木の葉ちる宿は聞きわくとぞなき時雨する夜もしぐれせぬよも。

とよみて侍りけるを。かならずこれとも思ひよらざりけるにや。やまひのつきてい
かんと祈りなどしければ。家に侍りける女に住吉のつきて。さる歌よませしはされ
ばえいくまじとの給ひけるにぞ。ひとへに後の世のいのりになりけるとなん。

又同じゆかりに。三河守頼綱といひしは。まだ若くて親のともみかはの國にくだりけるに。かのくにの女をよばひて又もとづれざりければ女。

(後拾遺集三)

あさましや見しは夢かといふほどにちどろかずにもなりにけるかな。

と申たりければ。更におぼえつきてなん思侍ける。かくよむともみめかたちやかはるべきとおぼえ侍れど。むかしの人中ごろまては人のこゝろかくぞ侍ける。このとはその人の子の仲正といひしがかたり侍となむ。

三河守頼綱は歌のみちにとりて人もゆるせりけり。わが身にもとの外に思ひわがりたるけしきなりけり。俊頼といふ人の少將なりけるととき頼綱がいひけるは。少將殿。歌よまむとおぼしめさば頼綱を供させ給へ。べちの者もまかりいるまじ。あらひたる佛供なんふたかはらけそなへさせ給へなどぞいひける。その歌おほく侍れども。

(後拾遺集)

夏山のならはそよぐ夕暮はことしも秋の心ちこそすれ。

といふ歌ぞ人のくちずさびにし侍るめる。ちかき世に女ありけるを。やはたなる所にみやてらのつかさなる僧都(註)ときこえし。小侍従とかいふ親にやあらん。その房にこめすへて程へけるほどに。都よりしかるべき人のむすめをわたさんといひければ。かゝるとのあるに。人の聞く所もは

コ本作の

ひならずかへら
せ、コ本作玉か
づらせさせ

ばからはしければ。しばし都へかへりてむかへん折こととしたてゝいだしけるが。あまりこちたくおくり物などしてぐしければ。今はかくてやみぬべきわざなめりと思ひけるにつけてもいと心ほそくて。すゝり(註)がめのしたに歌をかきておくりけるをとりいで、見ければ。

行く方もしらぬうき木の身なれどもよにしめくらは流れあへかめ。

となむよめりけるを見て。むすめなりける人(註)は院(註)のみや(註)などうみ奉りたるがまだわかくおはしけるに。京へおくりつる人。このうたをよみおきたる返事をやすべき又迎へやすべきと申しあはせければ。かへしはよのつねのとなり。迎へ給へらんこそ歌のほいも侍らめときこえければ。心にやかなひけんその日のうちにむかへに更にやりて。けふかならずかへらせ給へとてあけゆく程にかへりにけり。又そのしかるべき人のむすめをいひしらするところなどしつらひ。はしたもの(註)ざうしなどいふもの數あまたしたてゝすへたりけれど。一夜ばかりにて硯がめの人(註)にのみ離るゝともなくぞありける。その女も大臣家の宮仕へ人なりけるが。母のつくしに下りて。菅原の氏寺の別當に具したりけるが。法師みまかりにければ。都へのぼるべきやすがもなくてありけるを。そのむすめは朝夕にこれを歎きけるほどに。大臣殿五節たてまつり給けるにや。わらはにいだすべき女外のかたぐ見たま

コ本改補
り候、原作る、據

え、コ本作身

夫さを、コ本作
夫れさを、山本
作夫さを、山本
或是

ひけれど。こればかりなる見えざりければ。思ふやう有ていふぞいはんと聞きてん
やとありければ。いかでかおほせとにまたがはず侍らんと申しけるに。五節のわら
はにいださんと思ふとのたまひければ。いかなるともうけ給はり候べきを。それは
えなん侍るまじきと申しければ。あながちに思ふとにてあるに。かまへてきいたら
ばいかなる大事をもかなへんとありければ。かくまでのたまはせんとさのみもえ
いなび申さていてたりけるに。かの大臣殿のわらはいかばかりなるらんとて。殿上
人われもくとゆかしがりあへりける中に。さかりに物などいひける何の少將など
いひける人も見んなどしけるを。ある殿上人の。めづらしげなしいつも御覽せよと
云ひければ。あやしと思ひて見るに。わがえさらず物いふ人なりければうらみは
ぢしめけれど。さほど思ひたちていてにけり。のちに大臣殿。このよろこびにかな
る大事かあるととひければ。熊野にまうてんの志ぞ深く侍ると申すに。やすき事と
て夫さをなどあまためして。清きころも何かといたしたてさせ給て。参りてつくし
の母むかへよせんとを心ざし申てかへるに。淀のわたりにや。みゆきなどのよそひ
のやうに道もえさりあへぬとのありけるが。けふまんどころの京にいてたまふと
いひてよそにはものとも思はぬことはいひしらず見えける程に。むしたれたるはさ
まよりや見えけん。ふみをかきて京より御ふみとてあるを見れば。大臣殿の御使に

舟の人、コ本作
ふな人
ば、コ本作ど

此條、見古事談
二長明無名抄下

なく、コ本作な
がく

はあらで思ひかけぬすぢのふみなりけり。ありつる石清水の僧の舟の人など見し
りたるとも人といひければ。きしもいれぬ程に。かたぐ思ひかけずいはせければ。
いなびもはてくだりて。かのつくしの母むかへとりて。都にしすへなどしたりけ
るとなむきこえしは。小大進とかいふ人の事にやあらん。
陸奥守橋爲仲と申。かの國にまかりくだりて。五月四日たちに廳官とかいふ者年あ
ひたるいできてあやめふかするを見ければ。れいの菖蒲にはあらぬ草をふきけるを
見て。けふはあやめをこそふく日にてあるに。これはいかなるものをふくぞとは
せければ。傳へうけ給はるは。この國にはむかし五月とてあやめふく事も知り侍ら
ざりけるに。中將(旗)のみたちの御時。けふは菖蒲ふくものを。いかにさるともなき
にかとのたまはせければ。國の例にさると侍らずと申けるを。さみだれのころなど
軒のしづくもあやめによりてこそ。今すこし見るにも聞くにも心すむとなればは
やふけとのたまひけれど。この國にはあひ侍らぬなりと申ければ。さりともいか
が目なくてはあらん。あさかの沼のはながつみといふもの有り。それをふけとのた
まひけるより。こもと申すものをなんふき侍るとぞむさしの入道隆資と申はかた
り侍ける。もししからはひく手もたゆくながきねといふ歌おぼつかなく侍り。實方
中將の御慕はみちのちくにぞ侍なると傳へき侍し。まことにや藏人頭にも成り